

青年期における同一性の特質と発達

加 藤 厚

寄	昭和
加	年
藤	月
厚	日
氏	

青年期における同一性の特質と発達

加藤 厚

第一部： 理論的検討

1章 Erikson の心理社会的人格発達理論と青年期における同一性

- 1節 はじめに
- 2節 Erikson の生育史と同一性
- 3節 Erikson の人格理論の展開
- 4節 Erikson の心理社会的人格発達理論
- 5節 コア・クライシスと“基本的強さ”
- 6節 心理社会的人格発達理論の特徴
- 7節 心理社会的人格発達理論における同一性の位置づけ

2章 同一性概念の展開とその検討整理

- 1節 Erikson の同一性概念
- 2節 Marciaによる同一性地位(identity status) 概念の導入
- 3節 同一性地位概念と Eriksonの“同一性” 概念との関連
- 4節 Marciaの同一性地位概念の展開
- 5節 本研究で実証的測定を試みる同一性概念

3章 青年期における同一性に関する研究の現状と問題点

- 1節 本研究であつかう同一性研究の領域
- 2節 同一性の測定に関する研究
- 3節 同一性の主要な領域・側面に関する研究
- 4節 同一性の発達過程に関する研究
- 5節 青年期における同一性と社会的適応に関する研究

第二部： 実証的検討

4章 同一性次元尺度ならびに同一性地位尺度の構成 [研究1]

- 1節 問題と目的
- 2節 同一性次元尺度の構成
- 3節 同一性地位尺度の構成
- 4節 同一性次元と同一性地位との関連の検討

5章 高校生、大学生、および若い成人における同一性の様相と その差異に関連する要因の横断的検討 [研究2]

- 1節 問題と目的
- 2節 調査対象、調査方法・時期および質問紙
- 3節 同一性次元得点の発達的变化
- 4節 同一性地位の発達的变化
- 5節 同一性次元と同一性地位の特質に関する考察
- 6節 諸領域における探索・危機ならびに自己投入の水準の検討
- 7節 同一性次元得点の水準との対応を基準とした諸領域に
おける探索・危機ならびに自己投入の重要性の検討
- 8節 各同一性地位群のプロフィールに基づく、諸領域の重要性
ならびに各同一性地位の特徴の検討

6章 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的検討 [研究3]

- 1節 問題と目的
- 2節 研究対象の設定と方法

3節 結果と考察

- 1 同一性次元得点の平均値の発達的变化
- 2 同一性次元得点に関する両コホートの同質性の検討
- 3 同一性次元得点の分布の発達的变化
- 4 同一性次元得点の発達の安定性
- 5 同一性次元の変動に関連する探索・危機および自己投入の領域

7章 大学生における同一性地位の発達に関する縦断的検討 [研究4]

1節 問題と目的

2節 方法

3節 結果と考察

- 1 同一性地位の分布の発達的变化
- 2 同一性地位に関する両コホートの同質性の検討
- 3 同一性地位の安定性と移行傾向
- 4 大学在学期の前半と後半における同一性地位の移行傾向の差異
- 5 同一性地位の発達の変遷パターン
- 6 同一性地位の移行に関連する要因

8章 大学生における同一性の様相と社会的適応ならびに諸性格特性との関連 [研究5]

1節 問題と目的

2節 YG性格検査を用いた検討の方法等

3節 同一性次元得点と性格特性・適応状態との関連

4節 同一性地位と性格特性・適応状態との関連

5節 ゲス・フー・テストを用いた検討

9章 大学生における同一性の様相と社会態度 [研究6]

1節 問題と目的

2節 方法

3節 結果と考察

4節 まとめ

10章 帰国高校生における同一性の特徴 [研究7]

1節 問題と目的

2節 方法

3節 結果と考察

- 1 調査対象者の海外在学校の種類および在学期間
- 2 海外在学経験と高校生における同一性次元得点
- 3 海外在学経験と高校生における同一性地位
- 4 海外在学経験と探索・危機—自己投入の水準
- 5 同一性次元得点を基準とした具体的な諸領域の重要性の差異
- 6 自由記述の内容について

11章 本研究の要約と今後の課題

文献

第一部： 理論的検討

1 章

Erikson の心理社会的人格発達理論と青年期における同一性

1 節 はじめに

本研究の目的は、Erikson (1950)の提唱以来、精神分析学、精神医学、心理学、文学、社会学等の諸領域に大きな影響を与えてきている同一性 (identity)の問題を、青年期における心理学的な発達と適応の観点から、実証的に検討することである。

より具体的には、本研究では、以下の諸点が試みられた。

- (1) 精神分析学者 Eriksonがその心理社会的人格発達理論の主要概念として導入した同一性概念、およびそれに基づいて他の研究者が展開した諸構成概念を、青年心理学の観点から検討・整理する。
- (2) これまでの研究において、代表的であり主要と考えられる 2つの同一性概念 (同一性次元ならびに同一性地位) について、それらを客観的に測定する尺度を構成する。
- (3) 構成した尺度を用いて多数の高校生、大学生、および若い成人を対象とする調査を実施し、その結果から青年期中期から初期成人期にわたる同一性の様相とその特徴を実証的に把握する。
- (4) 大学生を対象とする縦断調査によって、同一性の発達過程を明らかにするとともに、その関連要因の検討を試みる。
- (5) 大学生における同一性の様相と社会的適応ならびに社会態度との関連の検討から、青年期後期における同一性形成の意義の検証を試みる。
- (6) 帰国高校生と国内生との比較を通して、異文化体験が青年の同一性の様相ならびにその関連要因等に及ぼす影響を検討する。

- (7) 以上の知見全体をふまえて、青年心理学における同一性概念の重要性とその意義を明らかにする。

本研究は、Erikson 自身の生い立ちを契機とし、その文化人類学的フィールドワークならびに精神分析学的臨床実践を通して精緻化されるとともに、精神医学者、臨床心理学者、そして青年心理学者たちによって様々に解釈され展開されてきた多様な“同一性”概念を整理し、そのいくつかを尺度化することによって、“同一性”概念が健常な一般青年の心理学的発達への把握にどのように適用可能であり、またどのような意義を持ち得るかを検証しようとする試みである。したがってまず、同一性概念の背景にある Eriksonの生育史とその人格発達理論の概観から始めることとしたい。

2節 Erikson の生育史と同一性

Erikson, E.H. は1902年、ドイツ西南部のフランクフルト・アム・マインに生まれた。父母はともにデンマーク人であったが、実父は彼の誕生以前に実母と離婚しており、その後も Eriksonは実父と再会することはなかった。その後、母は彼を連れてフランクフルトからさらに南のカールス・ルーエという街に移り住み、そこでドイツ系ユダヤ人の小児科医、Theodor Homburger と結婚した。当時3歳だった Eriksonは、以後 Homburger 家の養子として育てられることになるが、この事実は幼かった Eriksonには知らされることはなかったという。

自らの“同一性”に関する Eriksonの問題意識を尖鋭化し、その後の理論的展開の基礎となったと考えられるもう一つの生育史上の特徴として、その人種的特徴と民族的・文化的なルーツの不一致が指摘できよう。

Abrahamsen という実母の姓が示すように Eriksonの母はデンマーク系ユダヤ人であり、また養父の Homburgerもドイツ系ユダヤ人であった。その一方で Eriksonの外見は彫りの深い北欧系白人のそれであり、背も高く髪もブロンドで全くユダヤ人的ではない。そのため彼は、カールス・ルーエのユダヤ人の少年たちからは異教徒を意味する“ゴイ”というあだ名で呼ばれたということである (Coles, 1970)。

自らの出生や民族的・文化的な帰属にまつわるこのような不確実性・境界性の意識を昇華・統合することによって、同一性をその中心概念とする Eriksonの人格発達理論はしだいに形成されていったと考えられる。

ギムナジウムを卒業した Eriksonは、読書やスケッチをしながら森をさまようワンダーフォーゲル的な暮らしを1年間ほど経験している。その後、バーデン州立芸術学校での勉強、ミュンヘンやフィレンツェでの画家・木版画家としての修行といった数年間のボヘミアン的な放浪を経た後、当時は彼と同様の無名の芸術青年であった Blois, P. からの誘いを受けて、ウィーンの小さな私立学校で美術を教えることとなった。この学校が精神分析関係者の子弟の学校であったことから、Erikson と精神分析関係者との交流が始まり、Freud, A. から教育分析を受けるとともに児童分析の訓練も積み、やがて彼は成人と児童の2つの分析資格を持つ最初の精神分析家としてその職業的同一性を確立していった。

ヒットラー内閣が成立した1933年、Erikson とその家族はアメリカに移住した。多様な民族、様々な人種が星条旗への忠誠のみを共有しつつ、広大な国土に独立独歩の生活を営むアメリカにおいて、自らの不確実性・境界性に根差す“同一性”に関する Eriksonの問題意識とその理論は共感的に迎えられ、精神分析的自我心理学者としての本格的な研究活動

とその同一性理論の形成・展開が始まることとなるのである。

3節 Erikson の人格理論の展開

1939年からのカリフォルニア大学バークレー校児童福祉研究所における児童の発達に関する人類学的調査等を経て、1950年には同一性研究における記念碑的著作である " *Childhood and society* " が出版された。本書によって、人格の漸進的分化の8段階に関する Erikson の理論が初めて体系的に記述されるとともに、青年期の主要な課題として " 同一性 " が位置づけられたのである。

しかし、まさにこの1950年に、共和党上院議員 McCarthy による極端な反共産主義運動に反発した Erikson は、バークレー校を去ってマサチューセッツ州の私立の精神病院兼研究・教育機関であるオースティン・リッグス・センターに移った。このセンターにおける主として青年を対象とした10年間の治療実践と研究活動から、青年期における同一性拡散の臨床像の明確化がなされ、" *The problem of ego identity* " (1956) 、" *Identity and the life cycle* " (1959) 等の成果が示された。

1950年代におけるこれらの研究は、" *Childhood and society* " の初版 (1950) でそのアウトラインが示された " 生涯にわたる人格発達の理論 " を、特に青年期における同一性の障害と病理の側面から具体的に検討したものであり、その後の青年期精神医学および臨床心理学の研究と実践に大きな影響を与えるものとなった。また、青年期における同一性の発達と適応に関する実証的な検討を意図する本研究にも示唆するところの大きいものであった。

1960年、Erikson はオースティン・リッグス・センターを辞し、スタンフォード大学を経てハーヴァード大学に移った。1960年代は世界的な規模での学生運動ならびに青年運動の高揚期であり、学生・青年らの激しい抗議・自己主張の中で青年期の問題は社会的な注目を集めるところとなり、Erikson の同一性概念は脚光を浴びるとともに、ジャーナリストに用いられ流布するようになった。

しかしながら、当時 Eriksonの関心は青年期への注目を離れ、成人期 (Adulthood)、ライフサイクルの全体、そして心理-歴史的問題へと向かっていた。その移行は " Childhood and society "の再版(1963)で
 “本書では、幼児期の諸段階に重点が置かれているが、さもないと当然 generativity (筆者注: 成人期の中心的体験である“生成”)の項が中心になるべきであろう” (p. 266) と述べており、また1964年の論文集 " Insight and responsibility"では " Human strength and the cycle of generations "、" Identity and uprootedness in our time"等の問題が主に論じられていることにも表われている。

その後、Erikson の研究上の関心は“心理歴史論”(psychohistory) や“世代のサイクル論”による成人理解の問題として展開し、“ Gandhi 's truth ”(1969)や “ Toys and reasons ” (1976)等における “ ritualization ”(儀式化)、“ pseudo-speciation ”(擬似種化)等の概念を用いた考察に結実している。これらの著作における考察は、Erikson の人格発達理論をより豊かで重層的なものとしているが、青年期における同一性の心理学的な発達と適応に関する実証的検討をその主要な目的とする本研究との関連は必ずしも強いものではない。

4節 Erikson の心理社会的人格発達理論

" Childhood and society " (1950)にその概要が示され、" Identity and the life cycle "(1959, 1980)、" Childhood and society " 第2版(1963)、" The life cycle completed "(1982)等において、部分的な修正と再考察が加えられてきた Eriksonの心理社会的人格発達理論は、
 “ある社会のある家族の中に生まれ、育てられ、成長し、学び、働き、子孫をはぐくみ、家庭と社会を支え、老いていく” という人間の一生の普遍的事実に関して、以下の諸仮説の下に、生涯にわたる人格の発達の構造と機構の全体像の展望を試みた理論として理解することができる。

- (1) 人間の生涯は、乳児期から老年期に至る8つの段階に区分することができ、各段階にはその各々の主題をなす固有の“コア・クライシス”(core crisis) ^{※1} がある。
- (2) コア・クライシスとは対をなす拮抗的経験であり、各段階における主要な外界と個人との相互作用がその体験の質と量とを規定する。
- (3) 人格は潜在的層構造をなしており、その各層にはコア・クライシスの解決を通して固有の“基本的強さ”(basic strength) ^{※2} を獲得していく潜在力が備わっている。
- (4) より以前の段階における基本的強さの獲得の程度は、個人のその後の社会的相互作用を促進あるいは抑制し、それ以降のコア・クライシスの体験の量と質とに影響を及ぼす。

注1

従来、Erikson の用語としての " crisis " の訳語には、“危機”が広く用いられてきている。しかし、日本語の“危機”は、“悪い結果・成行きを招くかも知れない、危険で不安な時”（岩波国語辞典第三版）を意味し、肯定的な意味は含まれていないのに対し、“ crisis ” は病気の“峠”を意味するヒポクラテス以来の用語が、より広く人生や歴史の“転換点”の意味でも用いられるようになったものであり、“それを経て良くも悪くも新たな状態に進展する”ことを示す概念である。そこで本論文では“危機”という訳語を用いずに、“クライシス”として示すことにした。

注2

各発達段階のコア・クライシスを構成する拮抗的体験を、自我支持的体験優位のバランス状態で経験することによって人格に備わると考えられる“強さ”を Erikson は " virtue ", " vital strength ", " human strength " 等とも呼んでいるが、本論文ではより最近の著作(1982)に従って、“基本的強さ”(basic strength)という用語を用いることとした。

なお、鑓(1984)は以下のように述べている。

“・・・Erikson は個体発達分化説において展開した危機論によって、獲得される自我の特質（信頼、自律性その他）を支える自我の「強さ」の発達分化を記述しようとした。自我の強さないし、人格的な強さといったものであるが、精神分析的にこれまで研究されてきた自我機能としての「強さ」ではない。「自我を支える力」という表現が一番ぴったりくるのではないだろうか。その意味で倫理性との関連の深さが考えられる。とはいっても、社会的規範として要請される道徳的次元の問題ではない。(p. 54) ”。

5節 コア・クライシスと“基本的強さ”

表 1- 1 は Erikson(1982)に示された表の一部である。この表に沿って彼の理論の諸側面とその特徴をより具体的に概観してみよう。

Erikson の理論の第 1 の特徴は、生涯をコア・クライシスの連続としてとらえ、主要なクライシスとして 8 対の拮抗的経験を指摘している点であろう。表 1- 1 に示したように、人生の第 1 段階におけるコア・クライシスは“信頼” (basic trust) と“不信” (basic mistrust) との葛藤であり、これは乳児期 (infancy) の主題である。乳児は空腹、寒さ暑さ、痛みといった不快を覚えると“泣くこと”によって外界（主に母親）に助けを求め、また快を覚えるとそれを微笑によって外界に表出する。これらの働きかけに対し、母親はある時には適切に対応し、乳児は満足感を覚えるとともに外界への信頼感を抱く。しかし、あるときには母親は適切な対応に失敗し、乳児の働きかけは無視され、外界への不信感が体験される。そして、一定期間の両体験の積み重ねにおいて信頼が不信を上まわった場合には、“外界は信頼するに足り、働きかけるに値する”という“希望” (hope) が乳児の自我にその“基本的強さ”として備わる。一方不信が信頼を上まわった場合には“外界は信頼できず、働きかけるに値しない”という“ひきこもり” (withdrawal) を乳児の自我はその“中心的病状”として持つに至る。

同様に、幼児期 (early childhood) においては、主に両親によって行われるトイレット・トレーニングをその代表とする糞に関して、幼児は自律 (autonomy) と恥・疑い (shame, doubt) の両者を体験し、そのバランスに応じて“意志” (will) という基本的強さを獲得し、また“強迫” (compulsion) という中心的病状を展開する。

表 1- 1 心理社会的な人格発達に関する Erikson の図式の諸側面とその内容

人生の各段階	コア・クライシス	主要な関係の 対象と範囲	基本的強さ	中心的病状
I 乳児期	信頼 対 不信	母親	希望	ひきこもり
II 幼児期	自律 対 恥・疑い	両親	意志	強迫
III 遊戯期	進取性 対 罪悪感	家族と近隣	目的	抑制
IV 学童期	勤勉 対 劣等感	近隣と学校	有能さ	怠惰
V 青年期	同一性 対 同一性の混乱	仲間集団と他の集団、 リーダーシップのモデル	忠誠心	放棄
VI 若い成人期	親密 対 孤立	友人、性的パートナー、 競争相手、協力相手	愛情	閉鎖性
VII 成人期	生成 対 沈滞	労働と家事の分担	配慮と世話	拒否
VIII 老年期	統合 対 絶望	人類、自分の同類	知恵	尊大と軽蔑

(Erikson, 1982 の pp. 32-33 から作成)

遊戯期(play age)には、両親や兄弟、近隣の他の子供たちとの遊びを通して、児童は積極的にとりくむ進取性(initiative)と過ちや失敗による罪悪感(guilt)の両者を体験し、そのバランスに応じて“目的”(purpose)という基本的強さと“抑制”(inhibition)という中心的病状を持つに至る。

学童期(school age)には、近隣や学校における組織的な教育・訓練活動を通して、児童は学び励む勤勉(industry)の体験と、それを果たし得ない劣等感(inferiority)の体験を持ち、両者のバランスに応じて“有能さ”(competence)という基本的強さと“怠惰”(inertia)という中心的病状を展開する。

青年期には、それまでに内在化してきた様々な自己像の要素である諸同一化(identifications)の実現可能性を吟味し取捨選択しながら、それらに対する他者からの反応を様々な集団の中での実践を通して検討する“役割実験”(role experimentation)を試みる。青年はそれらを通して、現実社会における自己の存在の一貫性(continuity)と不変性(sameness)を感じられる“同一性”(identity)と、それらを感じえない同一性混乱(identity confusion)の両者を体験し、そのバランスに応じて“忠誠心”(fidelity)という基本的強さと“放棄”(repudiation)という中心的病状を形成する。

若い成人期(young adulthood)には、職場や恋愛関係における競争と協力の過程を通して、親密(intimacy)と孤立(isolation)の両者が経験され、そのバランスに応じて“愛情”(love)という基本的強さと“閉鎖性”(exclusivity)という中心的病状とが形成される。

成人期には、職場や家庭等の“社会”における労働および家事の分担の過程を通して、生成(generativity)^{注3}と沈滞(stagnation)の両者が経験され、そのバランスに応じて“配慮と世話”(care)という基本的強さと“拒否”(rejectivity)という中心的病状とが形成される。

そして生涯の最終段階である老年期(old age)には、自らのそれまでの生涯における行い、その達成と失敗の全てを“人類”あるいは“わが同類”という文脈の中に位置づけ評価することを通して、老人は統合感(integrity)と絶望(despair)・嫌悪(disgust)とを共に経験し、そのバランスに応じて“知恵”(wisdom)という基本的強さと“尊大と軽蔑”(disdain)という中心的病状とがその自我に備わる。

注3

この“生成”(generativity)は、単なる“生殖”および“生産”を意味するものではなく、(自己、あるいは他者の)子供、意見や思想、製品や作品、さらには次の時代・次の社会の担い手である青少年や後輩等をはぐくみ育て上げるという、より広範な体験を意味する概念である。鑑(1984)は“generativity”を、“次世代への関与”という意味を重視して“世代性”と訳している。

6節 心理社会的人格発達理論の特徴

上にその概略を素描した Eriksonの心理社会的人格発達理論の特徴として、以下の諸点が指摘できる。

- (1) 人格発達における普遍的なデッサンであるグランドプラン(grand plan)を仮定している。

この着想は、根、茎、葉、花、果実、種子等にやがてなるべき部位が植物の種子の中に、未分化な状態で既に存在しており、環境条件が整うことによってそれらが順序正しく分化し、その可能性を実現していくことを思い浮かべると理解しやすい。

- (2) 拮抗する異質な体験を通して基本的強さを獲得していく自我の機構を仮定している。

negative な体験と positive な体験の両者をともに経験することの意義を重視した Eriksonの洞察は独自かつ説得力あるものである。

- (3) ある段階における基本的強さの獲得、あるいは中心的病状の形成はそれ以降の段階におけるコア・クライシスに促進的あるいは抑制的に影響する。

植物の種子の例を再び使うなら、よく抜がった強い根はより多くの養分を吸い上げるとともにより太い茎を支え、より太い茎は葉や花をより高く支え、より高くより広い葉はその植物全体に豊かな栄養を供給し・・・といった連鎖関係が(正負の両方向で)想定されている。

- (4) ある個人のグランドプランは孤立して展開しうるものではなく、親の世代、子孫の世代等のグランドプランとの相互性(mutuality)を通して進展する。

例えば、乳児の存在は母親の生成体験(はぐぐみ育てる体験)を促し、同時に母親の豊かな生成性は乳児に豊かな信頼体験を与える。ある世代のグランドプランは、先の世代および後の世代のそれらとの相互性のなかで、あたかも噛み合った歯車のように同時進行的に進展していくものとしてとらえられている。

7節 心理社会的人格発達理論における同一性の位置づけ

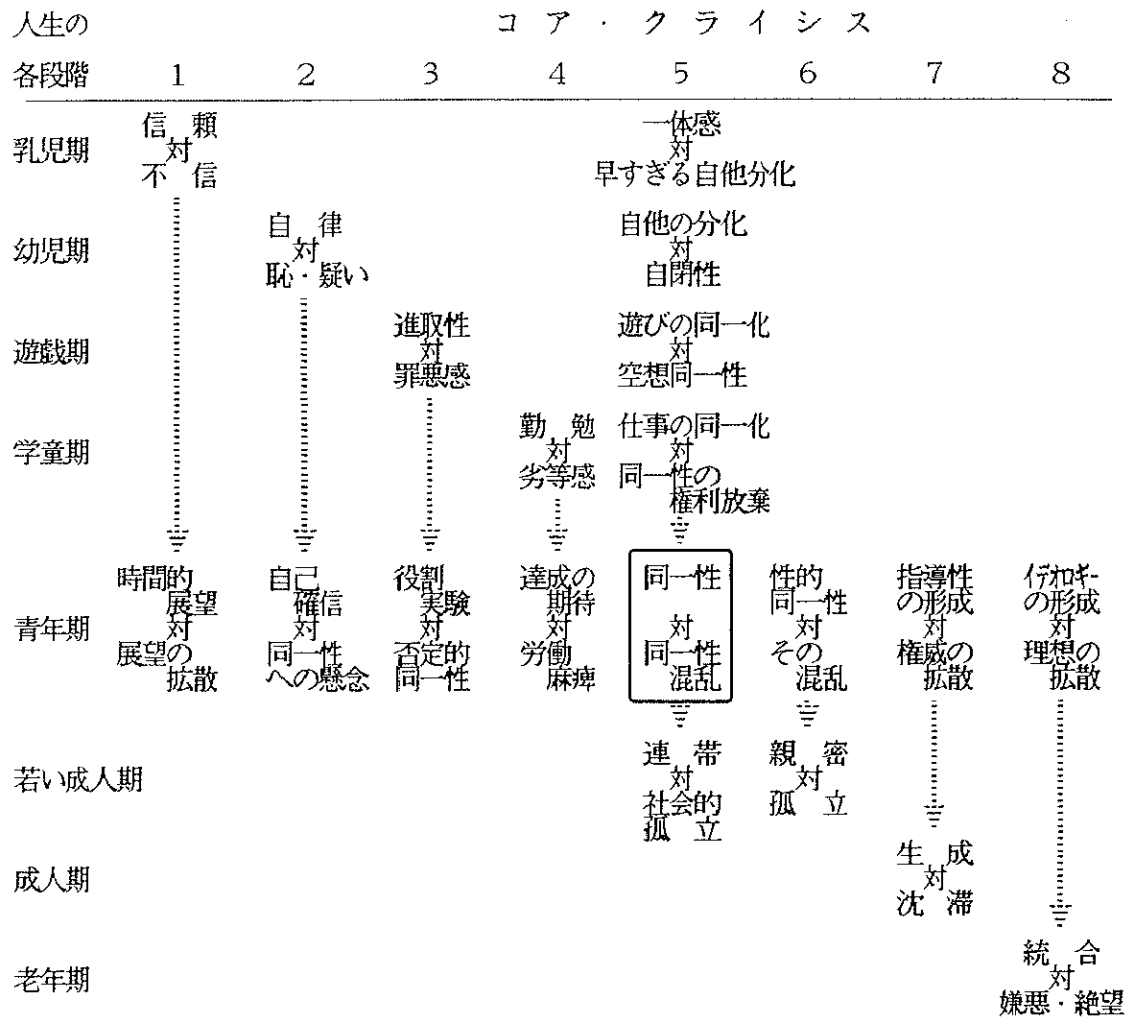
前節の(3)で言及したコア・クライシスならびに基本的強さ・中心的病状の各発達段階間での相互影響性からも明らかなように、青年期における“同一性”対“同一性混乱”のコア・クライシスの過程は、青年期において初めて始まるわけではなく、また青年期の終了とともに終わるわけでもない。“同一性”の体験は、図 1-1 にその一部が示されているように、幼児期における自己-対象分化 (self-object differentiation) にその端を発し、老年期における自己-人類統合 (self-mankind integration) によってその最終局面に到達すると考えられる生涯にわたる過程である。

にもかかわらず Erikson の人格発達理論においては“同一性”対“同一性混乱”のコア・クライシスは青年期の主題として位置づけられている。それは、図 1-1 に示した前兆-派生関係を基礎としつつ、両親や友人等とのやりとりや遊び、学校教育、マスメディア等を通して取り込んできた多くの同一化 (identifications) の取捨選択と統合を行い、成人期へと続く現実性ある自己の在り方を主体的に造り上げるのに必要な3条件、すなわち

- ① 身体的発達と成熟 (大人の体格・筋力等の獲得と第二性徴の完了)
- ② 認知的能力の成熟 (形式操作の獲得と知識・情報・経験の蓄積)
- ③ 社会的期待

が初めて整うのが青年期、とりわけその後期においてだからであろう。

同時に、青年期における“同一性混乱”に対する“同一性”のより優位な体験によって、図 1-1 に示した同一性の肯定的側面である性的同一性、指導性、イデオロギーの各々が獲得・形成され、その後の発達段階における“親密”、“生成”、“統合”の各体験の基礎となることが



(Erikson, 1959 p.120)

図 1- 1 “同一性” 対 “同一性混乱” のコア・クライシス
を中心とした人格形成の前兆-派生関係

期待される。

これらの特性は、グランドプランにおける“育てられる側”から“育てる側”への、より積極的かつ安定的な移行を促進するものである。この意味で、青年期における“同一性”は、（“若い成人期”における“親密”対“孤立”のコア・クライシスとともに）、グランドプランにおいてとりわけ重要な位置を占める転換点となっているといえよう。

2章

同一性概念の展開とその検討整理

1節 Erikson の同一性概念

1 Erikson 自身による定義

1章で試みた概説からもわかるように、Erikson による同一性概念の論述は示唆的かつ包括的なものである。これは彼の最初の職業志向が画家であったこと、また精神分析学者となった後の彼の主たる読者・聴衆が臨床家であったことによるのかもしれない。以下に Erikson 自身による最新の説明を引用してみよう。

・・・ 同一性形成の過程はゲシュタルトの展開であり、この構造体は、生まれ持った身体的特質、個人に固有のリビドー欲求、恵まれた才能、重要な同一化、有効な防衛、成功した昇華、一貫した役割等をしだいに統合していく。しかしながら、これらの全ては個人の様々な潜在力と技術的世界観と宗教的あるいは政治的イデオロギーの相互的調節を通してしか生じ得ない ・・・

《 the process of identity formation emerges as an evolving configuration — a configuration that gradually integrates constitutional givens, idiosyncratic libidinal needs, favored capacities, significant identifications, effective defenses, successful sublimations, and consistent roles. All these, however, can only emerge from a mutual adaptation of individual potentials, technological world views, and religious or political ideologies. 》 (1982 p. 74)

Erikson の同一性概念のこのような抽象性と包括性は、一方では他の理論家による新たな構成概念の展開を刺激し、様々な関連概念が提出されてきている。そこで本章では、それらのうちで青年心理学と関連の深いものについてその意味の検討と整理を行う。

2 同一性および同一性混乱概念の整理

Erikson の“同一性概念”を極めて単純化すると、2つの要点に集約できよう。つまり、第1に“(時間的および場面的な)自己の一貫性の感覚”、第2になんらかの“社会集団”との“有効なかわり合いの存在”であり、これらの(ともに抽象的ではあるが)2条件が満たされることによって“同一性”が体験されと考えられている。

他方、その拮抗体験である“同一性混乱”(identity confusion)[※]は、複数の自己像・役割が統合されことなく混在している状態であり、一貫性の感覚は失われ、社会集団と有効にかかわり合うこともできない。これは第1および第2の条件がいずれも満たされていない状態である。

上の理解に従うなら、Erikson 理論の中心概念の一つであり、本研究の出発点でもある“同一性”と“同一性混乱”の両概念は、最も基本的には、青年の自己像について、その“統合の水準”、すなわち“社会的文脈において自己の一貫性と有効性が体験される程度の高低”を意味する両極的構成概念として把握することができる。

注

Erikson は過去のいくつかの論文(1959, 等)では "diffusion" “拡散”を用いていたが、その後の著作では一貫して "confusion" を用いている。本論文では、“拡散”という用語は次節で論ずる Marcia の“同一性地位”の1つを指す用語としてのみ用いることとする。

3 同一性概念に内在する発展の可能性

“同一性”および“同一性混乱”の規定要因として前節で要約した2条件に関して注意すべき点は、“自己の一貫性の感覚”という第1の条件と“有効なかかわり合いの存在”という第2の条件とは必ずしも常に一致して生ずるものではなく、従ってこの2条件によって規定されうる状態は、表 2- 1 に示したように、論理的には他にもう2つ存在しうるという点である。すなわち、“自己の一貫性の感覚はあるが社会との有効なかかわり合いが存在しない状態”、および“複数の自己像が混在していながら社会との有効なかかわり合いがなされている状態”である。

Erikson の同一性概念に内在していたとも考えられるこれらの可能性については、その後 Marcia らによって展開される新たな研究分野である“同一性地位アプローチ”において、前者は“疎外された同一性達成”(alienated achievement)等として、また後者は“プロテウスの人間”(Protean man)等として検討されていくことになるが、これらの理論的展開についての検討に進む前に、同一性の“内容”等に関して提唱された諸概念のうちで青年心理学と深く関連すると考えられるものについてその概要を整理しておくこととする。

表 2- 1 Erikson の“同一性”概念に内在する発展の可能性

“社会”との有効な かかわり合い	自己の一貫性の感覚	
	ある	ない
ある	同一性	プロテウスの人間
ない	疎外された達成	同一性混乱

4 同一性の内容等に関する展開

同一性の内容等については、Erikson(1958, 1969)、福島章(1979)等によって以下に示したような概念的展開が試みられている。

1. 否定的同一性(negative identity)

社会的規範と相容れない“望ましくない”在り方を内容とし、その否定的価値を強調することによって成立する同一性。犯罪者や非行少年のそれのように、反社会的下位文化・集団を拠り所とする場合と、神経症的・精神病的な場合とがある。

2. 対抗同一性(counter identity)

ある社会・時代の体制からは否定的に評価されながらも、既存の社会規範や価値に対抗し、それらに取って代わるべき規範や価値を主張する同一性の在り方。自分は“正しく、良い”存在であり、社会はそれを認めるべきだと確信している点で、否定的同一性とは異なる。

その内容・主張に普遍的な人間的価値が存在する場合（ローマ帝国の支配に対する Christ 、カトリック教会に対する Luther 、大英帝国の支配に対する Gandhi 等）には、超越的同一性(transcendental identity) と呼ぶこともある。

3. 過渡的同一性(transitional identity)

本来の同一性に到るワンステップ・前段階として仮に形成され受容・肯定される同一性。例えば“受験生である私”等。

1の“否定的同一性”と2の“対抗同一性”とは同一性の内容に関する概念、そして3の“過渡的同一性”は同一性の機能の観点からの分類であると言えよう。

2節 Marciaによる同一性地位(identity status) 概念の導入

1 Marcia自身による定義

Erikson の“同一性”と“同一性混乱”は、ともにある特定の体験を記述する概念であり、それらを規定する条件は、上述のとおり抽象的かつ包括的に示唆されてはいるものの、具体的・特定の示されているとはいえない。Marcia(1966)はこのような状況に飽き足らず、Erikson の同一性概念からより操作的な構成概念を導き出すことを意図して、同一性研究への新たなアプローチである同一性地位理論を提唱した。

Marcia自身は、自らの試みについて以下のように説明している。

・・・ 同一性地位とは、青年期後期に特徴的な同一性の問題（課題）への4つの対処の様式であり、（中略） それらは仕事および思想の2領域における意思決定期間(crisis: 探索・危機)の有無と個人的投資(commitment: 自己投入)の程度とによって定義される・・・

《 the identity statuses are four modes of dealing with the identity issue characteristic of late adolescents. （中略） Those classified by these modes are defined in terms of the presence or absence of a decision-making period (crisis) and the extent of personal investment (commitment) in two areas: occupation and ideology. 》 (Marcia, 1980, p. 161)

Marciaが同一性地位の規定要因として用いている " crisis " が、対をなす拮抗的体験を意味するErikson の "コア・クライシス "とは異なる概念である点に注意が必要である。以下の引用にも示されているように、Marciaの " crisis " 概念の意味は、ある程度の不安定さを含みながらも、より主体的・積極的で建設的なものである。

・・・ “crisis” は青年が複数の有意味な選択肢の中からいずれかを選択することに専念する時期をさし、“commitment” は彼が行う個人的投資の程度をさす ・・・ (Marcia, 1966 p.551)

《 crisis refers to the adolescent's period of engagement in choosing among meaningful alternatives; commitment refers to the degree of personal investment the individual exhibits. 》

そこで、本論文では、従来やはり“危機”と訳されることの多かった Marcia の “ crisis ” の訳語として、“探索・危機”を用いることとした。なお、同様の指摘は Matteson(1977) においてもなされており、彼は “ exploration ” を “ crisis ” と同義の用語として用いている。

2 同一性地位アプローチの特徴

このアプローチの要点は、Erikson の抽象的かつ包括的な2条件、すなわち“自己の一貫性の感覚”と“社会との有効なかかわり合いの存在”に代えて、より具体的な下記の2仮定をその基礎としている点である。

1. “仕事” (occupation) と “思想” (ideology) の2領域における “自己投入” (commitment) の存在が “同一性” を体験させる
2. “同一性” 体験には “探索・危機” (crisis) を経た主体的なものと経ていない受動的なものがある

つまり Marcia の理論においては、

- ① “自己投入” および “探索・危機” という、より具体的かつ行動的な特徴について検討する、
- ② “仕事” と “思想” の2領域のみについて検討する、
- ③ (誕生以来の経験の総体ではなく) “現在および近い過去” というより狭いタイムスパンについてのみ検討する、

という単純化が行われ、他方 “探索・危機” を経ること無く “同一性” を体験する可能性が考慮されているのである。

3 各同一性地位の定義

具体的には、Marcia の同一性地位理論においては、仕事と思想の2領域における“自己投入”の水準と“探索・危機”の有無の組合せによって、表 2-2 に示したように下記の4つの同一性地位、すなわち“同一性の体験という青年期の課題への質的に異なる対処の諸様相”が定義されている。

① 同一性達成地位(identity achievement status)

主体的な検討と選択を行う“探索・危機”の期間を経て、仕事および思想上の目標を定め、それらの実現のために“自己投入”している状態。

② 権威受容地位(foreclosure status)

“探索・危機”を経ることなく、両親の考えや社会通念等を受け入れ、それらに“自己投入”している状態。

③ 積極的モラトリアム地位(moratorium status)

自らを賭けるにたる仕事および思想上の明確な“自己投入”の対象を求めて、“探索・危機”の最中にいる状態。

④ 同一性拡散地位(identity diffusion)

仕事および思想上の“自己投入”を行っていない状態。

②の“権威受容”の原語である“foreclosure”は、元来は担保物の請け戻し権の喪失（抵当流れ）を意味する法律用語である。早期完了、早産等とも訳されているが（村瀬、1972、無藤、1979、鑑・山本・宮下、1984）、主体的な“探索”を放棄し、両親の考えや社会通念等の“権威”を受容することによって成立するため、本研究では“権威受容”という訳語を用いた。

表 2-2 Marcia による同一性地位の基準

同 一 性 地 位				
仕事と思想 に関する	同一性達成	権威受容	積極的モラトリアム	同一性拡散
探索・危機 (crisis)	経験した (present)	経験していない (absent)	経験しつつある (in crisis)	経験／未経験を 問わない (present or absent)
自己投入 (commitment)	している (present)	している (present)	ある程度している (present but vague)	していない (absent)

(Marcia, 1980 p.162)

③の“積極的モラトリアム”の原語である“moratorium”は、本来は戦争・天災などの非常事態において、国家が法令によって債務の履行を一定期間延期し、猶予する措置を意味する経済用語である。Marciaの主要な意図が“猶予”にではなく“その間になされるべき努力と準備”にあることは、上の③の定義によっても、また彼自身の

・・・ 積極的モラトリアムは、その自己投入を求めている努力によって同一性拡散とは区別される。・・・ (Marcia, 1966 p.552)

《 the moratorium subject is distinguished from the identity diffusion subject by the appearance of an active struggle to make commitments. 》

との記述によっても明らかであり、また次節で触れる小此木(1978)の用語との混同を避けるためにも、“積極的モラトリアム”という訳語を用いた。

3節 同一性地位概念とEriksonの“同一性”概念との関連

Marciaの同一性地位概念はEriksonの同一性概念をふまえたものではあるが、前節で検討したように独自の仮定と理論的枠組みとを持つ別個の構成概念である。そして、先に触れた“crisis”もその一例であるが、同じ用語を異なった意味で使用しているため、混乱を招きやすい。

そこで以下に、Marciaの定義した各同一性地位とEriksonの理論における“同一性”対“同一性混乱”のコア・クライシス体験との関係の整理を試みる。

ここで重要なのは、Marciaの“同一性地位アプローチ”においては、Erikson理論における総体的な“同一性”の定義を試みるのではなく、“同一性を体験すること”を青年期の主要な課題とみなし、その課題に対する青年の“対処の様式・取組みかた”を（仕事と思想の2領域における“自己投入”と“探索・危機”とによって）定義するモデルを仮定して、そこから論理的に可能な類型的諸対処様式を導き出すことが試みられている点の理解である。

この理解をふまえて、各“同一性地位”と“同一性あるいはその混乱の体験”との関連の図示を試みたのが図2-1であり、各々の“同一性地位”における“同一性の体験”の状態は以下のように把握することができよう。

1. “同一性達成地位”は、仕事と思想の2領域における様々な可能性の考慮・検討と選択を経て、自らを賭けるに足る目標を見いだし、その目標のために積極的に努力している対処と解決の様式である。従って、その過程において、かなりの“同一性混乱”の体験とそれを凌ぐ“同一性”の体験とを持っているはずである。

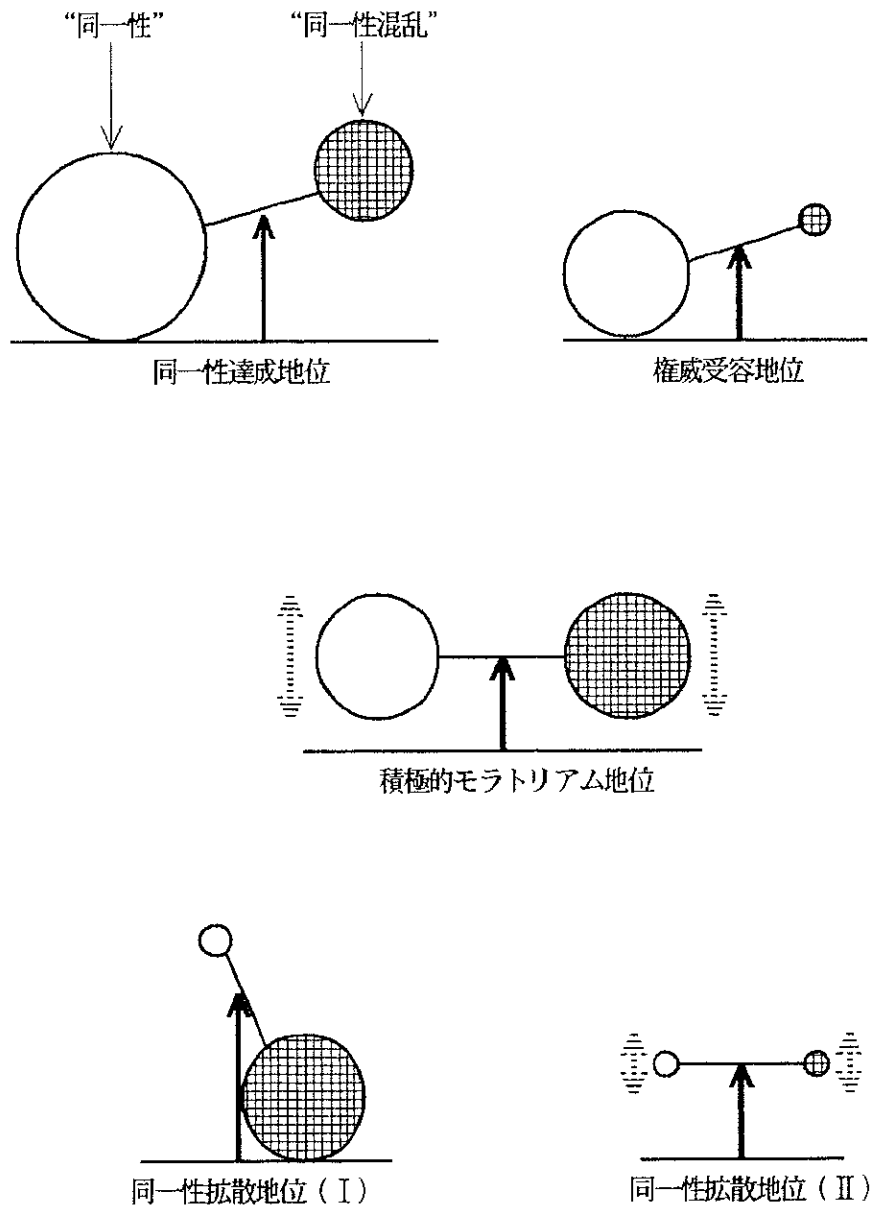


図 2-1 各同一性地位における“同一性”対“同一性混乱”の
コア・クライシス体験の状況の図示の試み

2. “権威受容地位”は、様々な可能性の主体的な考慮・検討や選択を行うことなく、かわりに社会通念や親の価値観等を受容し、それを目標として積極的に努力している対処と解決の様式である。
従って、“同一性”の体験はかなり持っているが、“同一性混乱”の体験はほとんど持っていない、より小振りな安定状態であると考えられる。
全体のスケールが小さいため、ショックに対してはより動揺しやすいことが予想される。
3. “積極的モラトリウム地位”は、仕事と思想の2領域における様々な可能性の考慮・検討と選択とを現在行いつつある、積極的な対処の様式である。
従って、その“同一性”と“同一性混乱”の体験はともに“現在なされつつ”あり、ある時は一方が他方に勝り、またある時はその逆というように、拮抗しつつ揺れ動いている状態であろう。
4. “同一性拡散地位”は、仕事と思想の2領域における目標の実現をめざす努力をしておらず、また可能性の検討や選択も行っていないという消極的な対処（あるいは対処の放棄）の様式である。
“社会との有効なかかわり合い”が無いため“同一性”は体験できない。
過去に“探索”を経験したが目標を見いだせなかった場合（Ⅰ）は“同一性混乱”の体験は持っているが、経験していない場合（Ⅱ）には“同一性混乱”の体験も乏しい。

4節 Marcia の同一性地位概念の展開

Marcia の提唱した同一性地位アプローチにおいても、その後、多様な概念的展開がなされてきている。そこで本節では、その主要なものに関する検討と整理を行う。

1. “探索・危機以前の同一性拡散”と“探索・危機以後の同一性拡散”

Marcia 自身はその著書(1980)のなかで、同一性地位を表 2- 2 に示した基準表で説明しているが、この表では“自己投入”は全て現在におけるそれであるのに対して、“探索・危機”については過去のそれと現在のそれとが混在している。この点に関してより適切な表現を行っているとと思われるのが表 2- 3 に示した Waterman (1985)の表である。

この表においては“探索・危機”以前の同一性拡散(前節の4のⅡ)と“探索・危機”以後の同一性拡散(前節の4のⅠ)とが明確に区分されている。Marcia の研究においても指摘されている両者ではあるが、前者は“発達的に未成熟、あるいは心理的に不安定なため、仕事および思想について主体的探索・検討を行えない状態”、また後者は“仕事および思想に関する主体的探索・検討を行ったものの、自己投入するにたる対象を見いださず、検討の続行を放棄した状態”と考えられる。

2. “プロテウスの人間”

また Waterman は、この表に―――のセル、すなわち“自己投入を行いながら、同時に探索も行っている状態”の存在を示唆している。

Waterman 自身は本文中ではなんらの解説も行っていないが、この状態は先に3節で触れた“プロテウスの人間”(Protean man)に対応すると考えられる。“プロテウスの人間”とは、変幻自在の変身力と予言力を有するギリシャ神話の海神プロテウスに因んだ Lifton (1967)の用語

表 2- 3 Waterman による同一性地位の定義

		探索・危機		
		経験あり	経験中	経験なし
自己投入	している	同一性達成	-----	権威受容
	していない	同一性拡散	積極的モラトリアム	同一性拡散

(Waterman, 1985 p.12)

で、その時々を自己を常に暫定的・一時的な存在とみなし、次々と新たな役割を取りながらそのいずれにも固執せず、新たな可能性を常に探索し続ける個人の在り方を意味する。変動の激しい現代社会において有効な“アイデンティティ・フリー”の状態ともいえる一方で、自己決定を回避し、傾倒しないことに傾倒するのみで、何者にもなりえない単なる成熟拒否や同一性混乱に終わる危険性もあろう。小此木(1978)の“モロトリアム人間”と近似の概念である。

したがって、同一性地位における“プロテウスの”状態とは、

- 次々と展開される新たな目標への自己投入に発展的な一貫性があり、かつその自己投入によって“社会”との豊かなかかわり合いもなされる最も柔軟かつ生産的な“プロテウスの同一性達成地位”、ならびに
- 目標・自己投入の展開に脈絡がなく、かつ“社会”との豊かなかかわり合いもなしえない“プロテウスの同一性拡散地位”(無藤、1979)、を両極とする連続体をなしていると考えるのが妥当であろう。

3. “疎外された同一性達成”

“疎外された同一性達成”(alienated achievement)も新たな概念的展開の一つである。Marciaの同一性地位理論においては、探索・危機と自己投入の領域として“仕事”と“思想”の2領域が重視されているが、この“疎外された同一性達成地位”は、従来重視されてきた“仕事”や“思想”には自己投入せず、“大きな社会”から自己を遠ざけながら、一方“対人関係”への自己投入によってその同一性を達成している状態である(Orlofsky, Marcia, and Lesser, 1973)。この概念は、探索・危機と自己投入における“重要な領域”の再検討の必要性を示唆するとともに、Erikson 理論における同一性と“親密”の順序性についても、さらなる検討の必要性を提起するものといえよう。

5節 本研究で実証的測定を試みる同一性概念

本章で展望してきたように、“同一性”の概念化には

① “同一性”対“同一性混乱”という“両極的次元”としてとらえる
“同一性次元アプローチ”、ならびに

② 同一性体験という課題への“類型的対処様式”としてとらえる
“同一性地位アプローチ”、

の主要な2アプローチがあり、その各々において様々な概念的展開がなされてきている。

両アプローチにはそれぞれ固有の意義と特徴があり、青年期における同一性の総体的把握のためにはともに欠かせない観点であると思われる。その一方で、質的に異なる様々な派生的同一性概念の多くを尺度に取り込むことは、実際的には困難である。そこで、青年期における同一性発達の基本的かつ総合的な検討を目的とする本研究においては、

① “同一性”と“同一性混乱”を両極とし、その次元上の位置によって両体験の拮抗点を把握する“両極的同一性次元”、および、

② “自己投入”と“探索・危機”の両要因によって構成されるモデルから導き出される“類型的同一性地位”のうちの基本的なもの、

についてその尺度化を試みることとし、内容等に関する諸派生概念については付随的に考察することとした。

3章

青年期における同一性に関する研究の現状と問題点

1節 本研究であつかう同一性研究の領域

本章では、青年を対象とする同一性研究の諸領域における研究の現状を展望するとともにその問題点を指摘し、それらに対して本研究が試みる検討の位置づけを行う。

青年を対象とした同一性研究の領域は多岐にわたるが、青年期における同一性発達の全体像を実証的に検討すること意図する本研究としては、最も基本的と考えられる以下の4問題をその主要な研究内容として取り上げることとする。

- | | |
|------------|-------------|
| ① 同一性の測定 | ② 同一性の主要な領域 |
| ③ 同一性の発達過程 | ④ 同一性と社会的適応 |

2節 同一性の測定に関する研究

1 同一性の測定における2アプローチ

2章で論じた“同一性の概念化”における2アプローチに対応して、同一性概念の操作的測定においても主要な2通りの様式が並存している。すなわち、①“同一性次元上での拮抗体験の均衡点の測定”を目指す諸技法、ならびに②“質的に異なる同一性地位の判定”を目指す諸技法であり、その各々において質問紙法、面接法等を用いた様々な試みがなされてきている。以下に両アプローチの各々について、主要な先行研究を概観しつつその問題点を指摘し、本研究における試みの目指すべき方向とその意義を明らかにする。

2 同一性次元概念の測定を目指すアプローチ

同一性概念を“同一性”対“同一性の混乱”として両極的次元とみなすこのアプローチにおいては、面接法(Bronson, 1959)、Q分類技法(Gruen, 1960)、質問紙法(Rasmussen, 1964; Dignan, 1965 ; 砂田 1979; 遠藤, 1981)等の試みがなされてきている。

Bronson (1959)の研究は、同一性混乱の下位概念と想定された①過去の自己と現在の自己との関連性についての確信の低さ、②内面的緊張・不安の高さ、③顕著な個人的特質に関する確信の低さ、④自己に関する感情に一貫性の低さ、の4特徴間の相関関係を実証することによって、“同一性次元”概念の構成概念妥当性を実証しようとする試みであった。①と②については半構造化された面接、③と④についてはSD法による測定が行われ、4特徴間には中程度の相関が認められた。Bronson はこれらの結果によって同一性次元の存在が支持されたとしている。しかしながら、上記の4特徴は恣意的に選択されたものであり、その妥当性、網羅性には疑問の余地がある。また、“過去との連続性”および“内面的緊張・不安”の測定は面接内容を6件法尺度に評定することによってなされており、その客観性は高いとはいえない。

Gruen (1960)は、大学生に“理想自己”および“現実自己”に関するQ分類(100 項目)を求め、その不一致度(discrepancy) の程度と自己のパーソナリティーに関する偽の描写を受容する程度との間に有意な正の相関を得ている。Q分類を用いた同一性研究としては、他に Block (1961)、Hauser (1972) 等があるが、本来この技法は“自己概念”の測定を目的とするものであり、より動的で“心理社会的相互性”等の特徴も併せ持つ同一性概念の指標として適切であるとは考えにくい。

Rasmussen (1964)は、Erikson の心理社会的発達段階のうち乳児期～若い成人期の6段階についてその発達のクライシス (developmental crisis)の解決の程度を測定する72項目からなる2件法の質問紙を作成している。この尺度の得点は、海軍の新規採用兵のうち同輩から高い評価を得ている群と低い評価を得ている群とを判別できるものであったが、その質問内容は6つの発達段階にわたる広範なものであり、“同一性”対“同一性の混乱”として限定的に定義される両極的同一性次元概念の測度というよりは、むしろ総合的な適応状態、社会的コンピテンス、自尊感情等の測度とみなすほうが妥当と考えられる。

Dignan (1965) の尺度は、文献的・理論的検討に基づく多面的・網羅的な項目選択を行った点で注目される。彼女は Erikson自身の著作およびいくつかの関連論文を検討した上で、①自己の感覚(sense of self)、②独自性 (uniqueness)、③自己受容(self-acceptance)、④役割期待 (role expectations)、⑤安定性(stability)、⑥目標指向性(goal-directedness)、⑦対人関係(interpersonal relations)の7つの成分を抽出し、各成分を測定することが期待される 163項目について“同一性”の評定項目としての適切性の評価を5人の専門家に依頼し、4人以上の同意が得られた50項目によって質問紙を作成している。

本邦においても、TPI-J(中・高校生用東大式パーソナリティ検査) から項目を抽出した古沢(1968)の尺度、75項目の形容詞における“自己らしさ”と“青年らしさ”の評定値の一致度によって同一性を測定しようとする西平(1970)の質問紙等の初期の研究を経て、いくつかの注目すべき試みが行われている。

砂田 (1979) は、より臨床的な観点から、Erikson の“部分症候”の概念に基づく“同一性混乱尺度”の作成を行っている。彼は“同一性混乱”を①時間的展望の混乱、②自意識過剰、③役割固着、④労働麻痺、⑤同一性混乱、⑥両性的混乱、⑦権威混乱、⑧価値混乱の8下位概念で定義し、下位尺度ごとに6項目ずつ作成した計48項目をGP分析および“どちらでもない”反応の比率の2つの基準で選択して、34項目からなる尺度を作成した。しかしながら、この尺度はその名の示すとおり“同一性混乱”の測定を意図するものであり、34項目中28項目が“部分症候”を記述した否定的・消極的な内容からなっている点で、青年一般における同一性の全体像を把握するために適切な指標とはいえない。

遠藤ら (1981) は、Erikson の著作から同一性および同一性混乱の特徴を記述した文章を抽出し、19項目からなる尺度を構成している。この尺度は男女各 200名以上の大学生に実施され、その信頼性が検討されるとともに、22名の大学生女子を対象としてYG性格検査のプロフィールならびにQ分類の理想自己-現実自己相関係数を基準として、その妥当性を支持する結果が得られている。しかしながら、各項目の表現は全体的に翻訳調で、“私は一定程度の自己選択にたいする確信を養育されてきた過程の中で一貫してもちつづけている”、“自分たちの団結のために、私は一時的にせよあたかも自分が党派や群衆の英雄であるかのごとく、自分を過剰にまねさせてしまったことがある”、“国籍や文化的背景、趣味や才能、時にはグループの所属などを区別するために、一定の洋服やしぐさなどをするし(サイン)として用い、メンバー以外の者はこれを排除しなければならないと信じている”(項目 6、15、18)等、日本語としてその意味するところがわかりにくい項目も散見される。

以上、同一性次元アプローチについて、主要と考えられる内外の尺度化の試みを概観した。Dignan(1965)の尺度は文献的理論的検討に基づく多面的・網羅的な項目選択を行っている点で、また Rasmussen(1964)の尺度はその妥当性の検証に“他者からの評定”という客観的な基準を用いている点で評価されるが、国内においては①同一性概念の理論的分析検討を踏まえた包括性、②肯定的-否定的のバランスのとれた項目構成、③十分簡明な表現による記述、④一定水準の信頼性と妥当性の検証、等の要件を満たす尺度は見当たらない。したがって、上記の基準をみたす同一性次元尺度を構成することは、青年期における同一性の様相の適切な把握の第1条件として重要であるといえる。

3 同一性地位概念の測定を目指すアプローチ

同一性概念を“自己の同一性の体験”という青年期の課題に対する質的に相異なる対処様式として理解するこのアプローチでは、その提唱者 Marcia (1966)の方法に倣った半構造化面接法による同一性地位の判定がその主要な測定法として広く用いられてきており(Marcia, 1967 ; Marcia & Friedman, 1970 ; Waterman & Waterman, 1971 ; Orlofsky, Marcia, & Lesser, 1973 ; Matteson, 1977 ; Grotevant, Thorbecke, & Meyer, 1982 等)、本邦でも無藤(1979)が大学生男子を対象として、Marciaの測定法の妥当性の検討とその修正を試みている。質問紙法等によって同様の判定を行おうとする試みもなされているものの(Simmons, 1970 ; Adams, Shea, & Fitch, 1979等)、その数は少ない。

Marciaによる同一性地位の判定の手順の概略は、以下の通りである。

- ①学年、出身地等から始まり、将来の職業ならびに宗教、政治に関する関心と指向等についての20ほどの質問を半構造化面接（所要時間は15～30分程度）によって行う、
- ②その回答から“職業”と“イデオロギー”（“政治”と“宗教”の2下位領域を含む）の各領域に関する被面接者の“探索・危機”および“自己投入”の水準を把握する、
- ③評定マニュアル（Marcia, 1964）に従って、各領域ごとの同一性地位を複数の判定者が判定し、それを総括して全体的同一性地位の判定を行う。

この方法においては、判定者間の一致率は80%程度とかなり高いことが報告されている（Marcia, 1980）。

半構造化面接による同一性地位判定というこの測定法は多くの研究者の注目を集め、Bourne(1978)や Marcia (1980)、鑑ら(1984)も展望しているように、同一性地位の標準的な判定方法として広く用いられているのが現状である。

しかしながら、高橋(1984)も指摘しているように、①面接場面での、“社会的望ましさ”による回答内容の偏りの危険性、②短時間かつ1回のみの面接におけるラポール確保の難しさ、③被面接者の言語応答の明瞭さによる評定の偏り等の問題は解決されていない。また、加藤(1983)が指摘しているように、④探索・危機および自己投入に関する評定方法が“有る”か“無い”かという大まかな2分割である点、⑤“個別面接”という方法では判定しうる対象者の数に一定の限界があり、より一般性ある結論を導くのに必要な数百人のサイズのサンプルを測定することは事実上困難である点等も、この測定法の一層の精緻化と客観化、簡便化の必要性を示すものといえよう。

したがって、このアプローチの特性をいかしながら①“探索・危機”

ならびに“自己投入”の評定におけるラポールの欠如等の要因による偏りがより小さく、②“探索・危機”ならびに“自己投入”等について3分割以上のより詳細な評定が可能であり、また③多数者を対象とした判定がより容易に実施できるような同一性地位の測定法の開発は意味のある試みと考えれる。

4 両アプローチの関連に関する研究

前章で述べたように、Marciaの同一性地位は Eriksonの包括的同一性概念に関して Bourne (1978)の指摘した7側面のうちの主観的自己体験、心理社会的相互性の類型、実存的姿勢の3側面をその主たる内容とするより限定的なアプローチであると考えられる。したがって、より包括的・多面的な同一性次元概念を代替するものというよりはむしろ、相補的な概念としてその差異と特徴とを考慮しつつ、研究の目的に応じて使い分けられるべきものであろう。しかしながらそのためにまず必要な併存的妥当性の検証、ならびに両概念間の関連性と差異を検討する研究の現状は十分なものではない。

Marcia(1966)では、面接法によって判定された各同一性地位間で文章完成法(Marcia's Ego Identity Incomplete Sentence Blank)を用いて測定された一次元的な同一性得点の比較が行われたが、同一性拡散地位を除く他の3典型地位間には有意な差は認められなかった。

Simmons (1970)では、Marcia(1966)の文章完成法に基づいて作成された二者択一式の“同一性達成地位尺度”の得点と同一性地位面接の結果との比較が試みられたが、同一性地位面接によって得られた“探索・危機”および“自己投入”に関する7件法による評定を合計して中央値で2分割するという不適切な分類を行っているため、権威受容、積極的モ

ラトリウム等の地位は無視され、各同一性地位間の適切な比較はなされていない。

Adams, Shea, & Fitch(1979)では、質問紙法によって測定された同一性地位間で Marcia の文章完成法による同一性得点の比較が行われているが、有意な差は同一性達成地位と同一性拡散地位との間に認められたにすぎない。また同一性地位の判定においてア・プリオリな基準ではなく、サンプルごとに変動する標準偏差を用いている点も問題である。

Marciaの提唱した各同一性地位については、その弁別的妥当性および構成概念妥当性を指示する結果も蓄積されつつあるが(Marcia, 1967 ; Marcia, 1976 ; 加藤, 1983、等)、このような状況を考慮するなら各論的研究の前提として、同一性次元の測度と同一性地位の測度とをかなり大きくかつ多様性あるサンプルからなる対象に実施して、両概念の併存的妥当性ならびに両概念の差異と特徴を検証する基礎的研究が必要であると考えられる。

3節 同一性の主要な領域・側面に関する研究

前節でも触れたように、従来の研究では“職業”、“政治イデオロギー”、“宗教イデオロギー”の各領域が、青年期における同一性体験の主要な領域とされてきている(Erikson, 1963 ; Marcia, 1980)。

しかし、青年期の同一性体験においては“性役割”、“対人関係”、“価値観”等の諸領域もかなりの重要性を持つことが予想され、他方、宗教的イデオロギーは本邦の青年においてはさほど重要な領域ではないことを示す研究結果も得られている(無藤, 1979)。諸外国においても、Matteson(1977)はデンマークの青年の同一性において“価値観”と“性役割”の重要性を示す結果を得ており、また Grotevant, Thorbecke, & Meyer(1982) はアメリカ人の青年を対象として、“友人関係(friendships)”、“異性関係(dating)”、“性役割”といった領域に関する質問も含めた同一性地位面接を行っている。

前節でも触れたように、同一性地位面接を用いるアプローチにおいては各領域ごとの同一性地位を総括して全体的同一性地位の判定が行われるのであるが、上に述べたように同一性体験における各領域の重要性に関しては、研究者の関心の所在や研究対象の特徴に応じて、領域の追加と削除がなされているのが国内外の現状である。したがって、全体的同一性地位を各領域ごとの同一性地位とは別個に把握し、前者との関連の強さを基準として様々な領域の重要性を評価するといった包括的・実証的な研究を行うことが必要であろう。

4節 同一性の発達過程に関する研究

Erikson 理論、Marciaモデルのいずれにおいても“同一性”は青年期における“主要課題”の位置を占める発達的概念として位置づけられている。したがって、青年期の進行に伴って、未分化で無自覚的な状態からより分化し統合された状態への同一性の発達が大多数の青年において観察されることが期待される。

この仮説を支持する結果は、横断的方法を用いたいくつかの研究によって得られている。Stark & Traxler(1974) および Protinsky(1975)は同一性次元の観点から、青年期から若い成人期にかけての同一性次元得点の上昇を示唆する結果を報告している。また、Meilman(1979) は同一性地位面接を用いて、10代半ばから20代半ばにかけての同一性達成地位の増加と権威受容地位および同一性拡散地位の減少を示唆する結果を得ている。

しかし厳密には、これらの結果は異年齢集団間の差を明らかにしているに過ぎず、青年期における同一性の発達過程を同一集団を対象とする追跡研究によって縦断的に検討した研究は、ケーススタディを除くと、同一性次元に関しては見当らず、同一性地位に関してもわずかに5つを数えるのみである(Fitch & Adams, 1983 ; Marcia, 1976 ; Waterman, Geaery, & Waterman, 1974 ; Waterman & Goldman, 1976 ; Waterman & Waterman, 1971)。

これらの研究は確かに縦断的方法を用いているものの、いずれもその方法・対象等に問題点を持っており、同一性の発達の実証的・包括的な縦断研究とはみなしにくい。具体的には、Waterman & Waterman(1971)ではその追跡期間はわずか半年に過ぎず、また Fitch & Adams(1983)の

追跡期間も1年間に過ぎない。したがって、両研究は同一性地位の発達過程の研究というよりはむしろ、その安定性の研究であるとみなすべきであろう。Waterman et al. (1974) および Waterman & Goldman (1976) においては大学1年次と4年次、Marcia(1976) においては大学在学時とその6～7年後の同一性地位が比較されており、より長期間にわたる発達的变化の把握が可能となっているが、いずれの研究においても同一性地位の測定は追跡期間の前後2回のみで、その間の経過は全く明らかにされていない。さらに Fitch & Adams(1983)は地位の安定性における性差の存在を示唆しているが、他の4研究はいずれも男性のみをその対象としている。

したがって、青年期から若い成人期への移行期と考えられる10代後半から20代半ばにかけての数年間にわたる期間について、比較的多数の男女を対象としてその同一性の状態とそれに関連すると考えられる諸要因とを、一定のインターバルごとに反復測定するといった研究が、実施における多大の困難にもかかわらず必要とされているといえる。

5節 青年期における同一性と社会的適応に関する研究

1 同一性発達と社会的相互作用

Erikson の人格発達理論では、“ある個人の課題達成とその個人にとっての重要な他者の課題達成とは、あたかも噛み合った歯車のように相補的に進行する”という“相互性”(mutuality)の重要性が強調されている。また Bourne (1978)も、“個人の自己定義は身近な他者や社会からの承認なしには真の意味を持ちえない”という“心理社会的相互性”(psychosocial reciprocity)という特徴を、同一性概念の主要な側面の1つとして指摘している。

これらの指摘は、同一性発達が“過去から将来への時間的展望の中で、さまざまな自己像を吟味し取捨選択する”といった“個人内の認知過程”のみによって進行しうるものではなく、身近な他者、集団等との間に成り立つ役割実験や成功・失敗体験等の“社会的相互作用過程”と“個人内の認知過程”との循環が相俟って、初めて漸進的に進行しうる過程であることを示している。したがって、より発達し成熟した同一性の状態、すなわち同一性次元アプローチでは“同一性混乱の体験に対する同一性体験の優位”、そして同一性地位アプローチでは“同一性達成地位”への到達を獲得するためには、他者や所属集団等との有効な“相互作用経験”が不可欠であり、また同時に、より発達した同一性の状態を呈する個人は、他者や所属集団等との間により適応的な関係を構築していることが期待される。

2 同一性と対人関係

このような理論的背景から、青年における同一性の様相と社会的適応・対人関係の状態との関連は、これまでにいくつかの研究によって検討されてきている。

Rasmussen (1964)は、海軍の新規採用兵を対象として、他者評定（同僚からの指名）によって適応良好と評定された群は適応不良と評定された群よりも有意に高い同一性得点を示すとの結果を、自作尺度を用いて示している。この研究は、適応水準の測定に“指名法による他者評定”という客観的指標を用いている点で注目されるが、前章でも述べたとおりその質問紙の内容は Eriksonの発達段階の乳児期から若い成人期までの6段階にわたっており、“同一性の体験”対“同一性の混乱”のより限定的な測度ではない。

Orlofsky, Marcia, & Lesser(1973)は、大学生男子の各同一性地位間で、Erikson の人格発達理論における“若い成人期”の課題である“親密性”(intimacy)の水準を比較している。その結果、同一性達成地位(Alienated achievementを含む)および積極的モラトリウム地位の多くがより成熟した“親密性”の段階にいるのとは対照的に、権威受容地位と同一性拡散地位のほとんどが“定型的・表面的な親密性”か“孤立”の段階にすることが示された。また、大学卒業後数年を経た男子を対象とした Marcia(1976)においても、同様の結果が得られている。これらの結果は、同一性地位と異性関係との正の対応関係を実証するものであるが、①異性関係は社会的適応および対人関係の1側面に過ぎず、②両研究ともその対象者が男子のみである、という限定付きの知見である。

本邦では遠藤ら(1981)が、大学生を対象として自作の同一性尺度得点の高低2群のYG性格検査プロフィールを比較しているが、対象者が女子のみであり人数も22名に過ぎないため、結果の一般化は困難である。

このような研究の現状をふまえると、次元・地位の両面から把握した同一性の様相と社会的適応状態との対応関係を、多数の男女青年を対象として検討することは、第1に同一性発達における“社会的相互作用過程”の重要性の検証の試みとして、また第2に“社会的適応”という重要な指標を外的基準とした“同一性次元”ならびに“同一性地位”構成概念の妥当性検証の試みとして、意義あるものと考えられる。

3 同一性と社会態度

青年、とりわけ成人期に近い青年における社会的適応を論ずる場合、単に具体的・直接的な対人関係のみを扱うだけでは不十分であり、より抽象的・観念的なその社会観・社会態度等についても検討を加える必要があろう。しかし、諸外国においては“民族同一性”を扱った研究は数多くあるものの(Masuda, Matsumoto, & Meredith, 1970 ; Driedger, 1976; Rebaudière-Paty, 1987, 等)、青年期における社会観や社会態度を対象とした研究はほとんど見当たらないようである(鑑ら, 1984 : Tabouret-Keller, 1987)。

本邦でも、大学生男子を対象として“社会的規範と自己の規範との不一致”の程度と同一性の混乱の程度との間に正の対応を見出だした砂田(1979)の研究のほかには、同一性とよりマクロ的な社会的適応との関係を検討した研究は見当たらない。さらに、砂田(1979)においても“社会的規範と自己の規範との不一致”の程度は、例えば“世間の人から望まれている私”と“世間の人からみた私”といった理想自己と現実自己と

の不一致として測定されており、社会観の具体的な内容の特徴等を直接に検討しているものではない。

したがって、“個人的な水準における社会的適応”の指標の一つと考えられる“具体的な対人関係”とともに、より広い視野における社会的適応の指標として、肯定的・積極的な“社会態度”等の尺度を用いて同一性の様相との関連を検討することは、同一性概念の意義をより広い観点から評価するためにも、また様々な同一性の様相の特徴を明らかにするためにも、意味ある試みであるといえよう。

第二部： 実証的検討

4章

同一性次元尺度ならびに同一性地位尺度の構成 [研究1]

1節 問題と目的

本研究の全体的目的は、青年期における同一性の様相を多数の青年を対象とした実証的調査によって総合的に把握・検討することであり、そのためには多数者への実施が容易で、かつ同一性の状態を適切に把握しうる測度が必要である。しかしながら、前章で展望したように、同一性概念の測定への主要な2アプローチである“同一性次元アプローチ”と“同一性地位アプローチ”のいずれにおいても、この目的にかなった適切な尺度は本邦においては作成されていないのが現状である。

そこで研究の第1ステップとして、両アプローチの各々について、概念分析をふまえた質問紙尺度の構成を行うこととした。

2節 同一性次元尺度の構成

1 項目作成の枠組みと回答法

前節でも述べたように、広範な内容を持つ同一性次元概念の尺度化にあたっては、その“包括性”と“網羅性”を確保しうる項目を選択するための枠組みとなる同一性概念の理論的分析・整理が不可欠である。

そこで本研究では、同一性次元の尺度化にあたって Bourne(1978) による同一性概念の理論的分析検討をその基礎的枠組みとし、そこで指摘された諸側面を網羅することによって内容的妥当性を満たしうる尺度構成を試みることにした。

Bourne(1978)はその理論的・文献的な展望において、Erikson の“同一性”概念が、a. 発生的、b. 適応的、c. 構造的、d. 力動的、e. 主観的、f. 心理社会的相互性、g. 実存的という7つの特質・側面を持つことを指摘している。そこで Erikson(1959)、Bourne(1978)の記述ならびに遠藤ら(1981)の質問項目を参考にしつつ“同一性体験”および“同一性混乱体験”の各々についてほぼ同数ずつ作成した項目群から、上記の諸特質に対応するものを各2〜3項目選抜し、各特質を網羅する全18項目からなる予備尺度を作成した。

回答法は、曖昧な反応を認めず、同時に十分に細かい選択肢を与えることを目的として、

“まったくそのとおりだ”	
“かなりそうだ”	
“どちらかといえばそうだ”	
“どちらかといえばそうではない”	
“そうではない”	
“全然そうではない”	の6件法とした。

また、同一性次元の両極性をより適切に反映するため、合計得点がゼロを中心としてプラス・マイナスの両方向に分布するように、各選択肢は“同一性体験”から“同一性混乱体験”の方向にそれぞれ 2.5, 1.5, 0.5, -0.5, -1.5, -2.5 点として両極的に得点化した。

2 項目分析

全18項目からなる予備尺度を、国立T大学の学生 109名（男子69名、女子40名、1年生 7名、2年生61名、3年生30名、4年生11名）を対象として1982年5月に実施したデータに基づいて項目分析を行った。

尺度の内的整合性を高めるためI-T（項目-合計）相関分析を行い、合計得点との相関係数が.50に満たない項目等を削除し、表4-1に示した14項目を同一性次元尺度の項目として採択した。

表 4-1 同一性次元尺度の項目と因子分析の結果（主因子解）

項 目	対応する ¹ 特徴・側面	因子負荷量		
		I	II	II
1. 私はこれまで、たくさんの大切なことを学び 身につけてきた	a	.597	-.591	-.156
2. これまで身につけてきたことは、無意味なこと ばかりだ (R) ²	a	-.582	.375	.019
3. 私は、未来にむかってしっかりと歩いてきている	a	.670	-.156	.014
4. 子供のころから身につけてきたことを、今の 生き方にどう役だてたらいいのかわからない (R)	a	-.683	-.037	-.025
5. 自分の行いを決めるよりどころがない (R)	c,g	-.711	-.039	-.121
6. 私には、自分がどんな人間なのかよくわかっている	c	.546	.428	-.580
7. あまりに多くのことが変わり続けているので、 自分がだれなのかわからない (R)	c	-.640	-.309	.048
8. やらなければならないこと、やりたいこと、 できることが、自分の中でまとまらない (R)	c,d	-.674	-.203	-.003
9. 私は、現実の社会の中に生きがいを見つけ出す ことができるだろう	f,g	.505	-.242	.004
10. 私には『理想の自分』がいくつもあって、どれが 本当の『なりたい自分』なのかわからない (R)	c,d	-.440	-.178	-.210
11. 自分にとっての『私』が、まわりの人の見る 『私』とズレている (R)	c,f	-.465	-.240	-.268
12. 人と話していると自分がわからなくなる (R)	c,f	-.564	-.125	.312
13. 私は、まわりの人や社会の役にたつような生きがい を持っている	f,g	.428	-.246	-.086
14. 私は、まわりの人や社会にどう働きかけたらいい のかわからない (R)	f,g	-.594	-.036	.035
固 有 値		4.80	1.06	.60
寄 与 率 (%)		34.29	7.59	4.29

1 特質b（適応的）および特質e（主観的）は全項目にあてはまる

2 (R)：逆転項目（同一性混乱の特徴）

3 基準連関妥当性の検討

同一性混乱に陥った青年が、選択の回避と空虚感、勤勉さと時間的展望の拡散等のアパシー状態を呈することは、臨床的に広く認められている（Erikson, 1956、等）。そこで国立T大学保健管理センターの協力を得て、アパシー状態を訴えて来談していたクライアント（大学生）に本尺度を実施し、その結果を一般学生のサンプルにおける結果と比較することによって本尺度の基準連関妥当性の検討を試みた。

アパシー群は担当カウンセラーによってスチューデントアパシー状態と判断されたクライアント計6名（全て男子）であり、その年齢は20歳～23歳であった。対照群の一般学生としては、研究2（第5章の横断研究）の調査対象者のうち年齢的に対応する20歳～23歳の国立T大学および国立Y大学の学生 233名からなる群を用いた。

一般学生群における同一性次元得点の平均値と標準偏差が、男女を併合した全体（ $n = 233$ ）で $+8.4$ ($SD = 9.6$)、男子のみ（ $n = 115$ ）で $+8.5$ ($SD = 9.9$) であったのに対し、アパシー群の得点は $-10 \sim -2$ と全員がマイナス側に分布しており、その平均値も -4.7 ($SD = 3.1$) と対照群のそれを1標準偏差以上下回っていた。また、一般学生全体とアパシー群、ならびに一般学生男子とアパシー群との平均値の差の検定（ウェルチの法）を行ったところ前者では $t = 9.3$ ($df = 7.8$)、後者では $t = 8.4$ ($df = 11.7$) で、ともに1%水準で有意な差が認められた。

同一性次元本尺度の得点と臨床診断との間に認められた明確な対応は、本尺度の基準連関妥当性を支持するものである。

4 因子構造ならびに信頼性係数の検討

国立T大学ならびにY大学の学生 296名（男子 161名、女子 135名、1年生89名、2年生91名、3年生 116名）のデータを用いて、本尺度の因子構造と信頼性係数の検討を行った。

主因子法を用いて第3因子まで求めた場合の各項目への因子負荷量は表 4- 1 に示したとおりであった。第1因子は全項目に高く負荷しており、その寄与率も34.3%と高い。他方、第2因子以降は.40以上の負荷量を呈する項目は1～2項目に過ぎず、その寄与率も数%に過ぎない。I-T相関分析による項目選択を経た尺度として予想される結果ではあるものの、同一性次元尺度が単一因子の1次元構造を持つ尺度となっていることが示されている。

また、本尺度の信頼性係数 α を求めたところ、.895と十分に高い値が得られた。

5 分布ならびに性差の検討

上の分析と同一対象（大学生 296名：1年生89名、2年生91名、3年生 116名）における同一性次元得点の分布は、表 4- 2 ならびに図 4- 1 に示したようにほぼ左右対称の単峰分布を示し、その平均値と中央値は7.4と7.5、標準偏差は9.1、最小値は-20、最大値は34であった。

6つの選択肢の各々の意味から考えて同一性が平均して“かなり”以上成立していると考えられる者（上位群：21点以上）が全体に占める割合は6.8%、“どちらかといえば成立している”と考えられる者（中上位群：7～20点）の割合は50.3%、“どちらともいえない”者（中位群：-6～6点）は35.1%、“どちらかといえば混乱している”者（中下位群：-20～-7点）の割合は7.8%であり、“かなり”以上の混乱に該

表 4-2 大学1～3年生 296名における同一性次元尺度の得点分布

階 級	度数	累積度数	%	累積%
28 ～	3	3	1.01	1.01
22 ～ 27	10	13	3.38	4.39
16 ～ 21	47	60	15.88	20.27
10 ～ 15	69	129	23.31	43.58
4 ～ 9	73	202	24.66	68.24
- 2 ～ 3	53	255	17.91	86.15
- 8 ～ - 3	26	281	8.78	94.93
-14 ～ - 9	10	291	3.38	98.31
～ -15	5	296	1.69	100.00

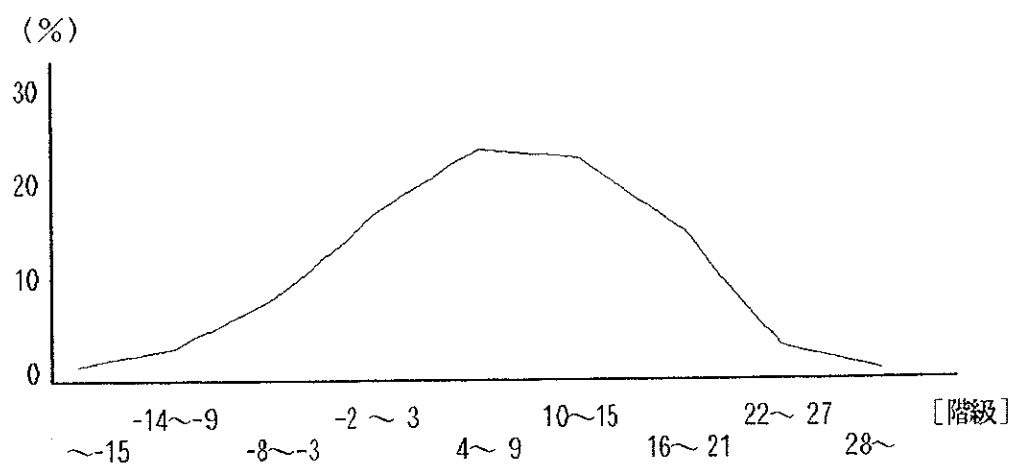


図 4-1 大学1～3年生 296名における同一性次元得点の分布

当する者（下位群：-21点以下）は認められなかった。

この結果は、大学1～3年生における同一性の状況が、平均値的には“どちらかといえば成立”と“どちらともいえない”の境界付近にあり、またその分布には大きな個人差が存在することを示すものである。なお、男子 161名、女子 135名の各々における同一性次元得点の平均値は、前者が 7.9点、後者が 7.1点とほぼ等しく、性差は認められなかった。

3節 同一性地位尺度の構成

1 尺度化の指針

“探索・危機”と“自己投入”の2要因の組合せによって同一性地位を定義する Marcia の理論的枠組みの長所については2章で、また現在広く行われている面接法の問題点については3章で述べたとおりである。

本研究ではそれらの諸点をふまえ、以下の指針の下に従来の問題点の克服が期待できる質問紙尺度の構成を試みることにした。

- ①諸領域の重要性を検討する基準となりうるように、領域を特定しない一般的な“探索・危機”ならびに“自己投入”の水準によって、全体的な同一性地位を直接的に判定する。
- ②本来は量的な変数である“探索・危機”ならびに“自己投入”を、“有”か“無”かの2カテゴリーではなく、より詳細な“高”“中”“低”の3水準にカテゴライズして各同一性地位を定義する。
- ③従来の4典型同一性地位以外の中間的同一性地位についても考慮する。
- ④同一性達成地位と権威受容地位が“過去の探索・危機”の有無で判別される一方で、積極的モラトリウム地位は将来の自己投入を求めている“現在の探索・危機”によって定義される、という問題点を整理するため、“過去の探索・危機”と“現在の探索・危機”とを別個に扱う。
- ⑤積極的モラトリウム地位を特徴づける“現在の探索・危機”については、神経症的なものではなく、より積極的・活動的な将来への展望をとったものとするため、“将来の自己投入の希求”として定義する。

より具体的には、以下の3変数を測定し、その水準のパターンによって諸同一性地位の定義が試みられた。

- ①一般的な（領域を特定しない）“現在の自己投入”の水準、
- ②一般的な（領域を特定しない）“過去の探索・危機”の水準、
- ③一般的な（領域を特定しない）“将来の自己投入の希求”の水準。

いずれも“一般的な（領域を特定しない）”としたのは、指針の①で述べたように、この尺度では全体的同一性地位を直接判定し、その結果を別の質問紙によって測定される特定領域の“探索・危機”ならびに“自己投入”の水準と関連づけることによって、前章で論じた同一性の発達における諸領域の重要性の問題を実証的に検討するためである。

2 項目作成と回答法

Marciaの記述(1966, 1980)を参考にしつつ、“現在の自己投入”については現在の時点における目標の自覚と努力の程度を、“過去の探索・危機”については過去の時点における主体的な疑問・検討と選択の体験の有無を、そして“将来の自己投入の希求”については将来への意欲と主体的な探索をその内容とする項目群を作成し、青年心理学専攻の大学院生等の協力を得て各項目の表現等の検討・修正を行い、各4項目、計12項目からなる予備尺度を構成した。

回答法は、同一性次元尺度と同じ6件法（“まったくそのとおりだ”から“全然そうではない”まで）とし、各変数の最も高い水準に対応する反応を6点、最も低い水準に対応する反応を1点として得点化した4項目の合計を各変数の値とすることとした。

3 項目分析

国立T大学ならびにY大学の学生 310名（男子 170名、女子 140名、1年生89名、2年生91名、3年生 116名、4年生14名）を対象として、1982年5月～10月に実施した調査のデータを用いて項目分析を行った。

まず各下位尺度の内的整合性を検証するために、各下位尺度の合計点と各項目得点との相関係数を求めたところ、表 4-3 に示したように、どの下位尺度においても $+0.82 \sim +0.52$ とかなり高い値が得られた。

次に、各下位尺度の合計点間の相関係数を求めたところ、“現在の自己投入”と“過去の探索・危機”が $+0.18$ 、“現在の自己投入”と“将来の自己投入の希求”が $+0.33$ 、“過去の探索・危機”と“将来の自己投入の希求”が $+0.25$ であり、いずれの対においてもその相関は中程度以下の弱いものであった。

これらの結果は、各下位尺度を構成する項目の内的一貫性ならびに各下位尺度の相対的独立性を支持するものである。そこで、項目の修正・削除等を行わず、全12項目からなるこの尺度を同一性地位尺度として用いることとした。

4 同一性地位判定の基準

本研究では Marcia の分類基準に本節1の論点を加味して、図 4-2 に示した流れ図に従って下記の6つの同一性地位（4典型地位ならびに2中間地位）を定義した。

- (a) 同一性達成（Identity Achievement）地位： 高い水準の探索・危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
- (b) 権威受容（Foreclosure）地位： 現在、高い水準の自己投入を行っているが、過去に探索・危機をほとんど経験していない者

表 4-3 同一性地位尺度の項目、および各下位尺度得点との相関係数

項 目	“下位尺度”	相関係数
I “現在の自己投入”		
1. 私は今、自分の目標をなしとげるために努力している		.74
2. 私には、特にうちこむものはない (R)		.75
3. 私は、自分がどんな人間で何を望みおこなおうしているのかを知っている		.74
4. 私は、『こんなことがしたい』という確かなイメージを持っていない (R)		.82

II “過去の探索・危機”		
5. 私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない (R)		.59
6. 私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということがかつて真剣に迷い考えたことがある		.70
7. 私は、親やまわりの人の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない (R)		.58
8. 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある		.62

III “将来の自己投入の希求”		
9. 私は、一生懸命にうちこめるものを積極的に探し求めている		.71
10. 私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない (R)		.52
11. 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている		.67
12. 私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない (R)		.66

(R) は「全々そうではない」のとき6点、他は「まったくそのとおりだ」のとき6点

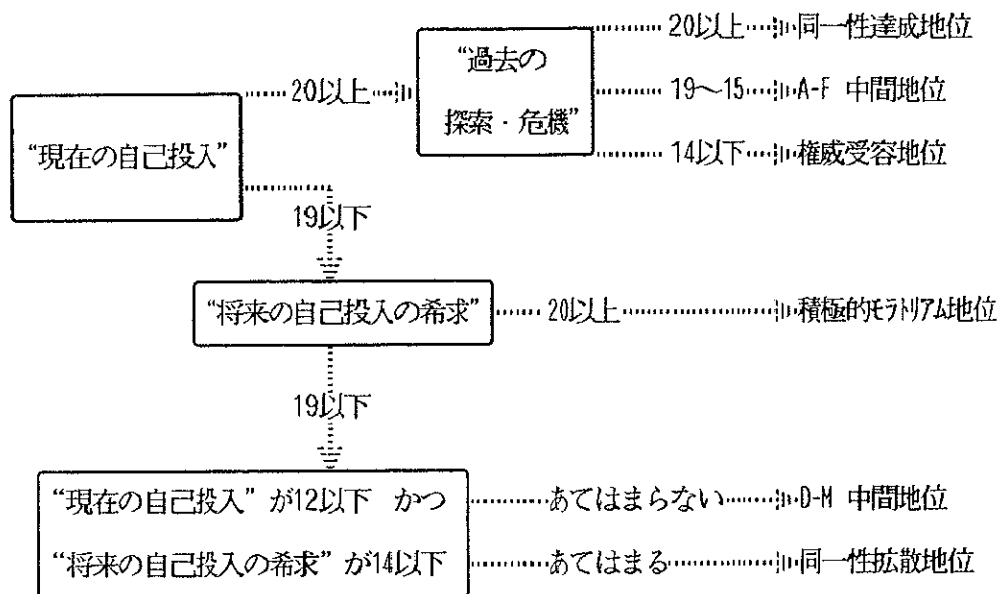


図 4-2 各同一性地位への分類の流れ図

- (c) A－F（達成－権威受容）中間地位： 中程度の探索・危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っている者
- (d) 積極的モラトリアム（Moratorium）地位： 現在の自己投入の水準は高くはないが、将来の自己投入を強く求めている者
- (e) 同一性拡散（Identity Diffusion）地位： 現在の自己投入の水準が低く、かつ将来の自己投入の希求も弱い者
- (f) D－M（拡散－積極的モラトリアム）中間地位： 現在の自己投入も将来の自己投入の希求もともに中程度である者

なお、分類の基準点として20点、14点、12点を用いた根拠は以下のとおりである。

- 20点：各項目に平均して5点〔“かなりそうだ”（逆転項目では“そうではない”）〕で反応した場合に対応する値であり、積極的肯定反応の下限とみなしうる
- 14点：半数の項目に4点〔“どちらかといえばそうだ”（逆転項目では“どちらかといえばそうではない”）〕、他の半数の項目に3点〔“どちらかといえばそうではない”（逆転項目では“どちらかといえばそうだ”）〕で反応した場合に対応する値であり、中間的反応である
- 12点：各項目に平均して3点で〔“どちらかといえばそうではない”（逆転項目では“どちらかといえばそうだ”）〕反応した場合に対応する値であり、否定的反応の上限とみなしうる

5 基準連関妥当性の検討

同一性次元尺度の場合と同様、国立T大学保健管理センターの協力を得て、アパシー状態を呈するクライアント（大学生）6名と一般学生との同一性地位の比較を行った。アパシー群ならびに一般学生群は同一性次元尺度の場合の両群と同一である。

一般学生群における同一性拡散地位の割合は、男女を併合した全体 ($n = 233$) では 3.0%、男子のみ ($n = 115$) でも 5.2%に過ぎないのに対し、アパシー群ではその50%を同一性拡散地位が占めており、その他も全て D-M 中間地位であった。同一性拡散地位が全体に占める比率の差を一般学生全体とアパシー群、ならびに一般学生男子とアパシー群の両者についてフィッシャーの直接確率法で検定したところ、前者では $p = .0005$ 、後者では $p = .0026$ （ともに片側検定）で、その差はいずれも 1%水準で有意であった。このように、臨床診断と本尺度の判定との間には、明瞭な対応関係が認められ、本尺度の基準連関妥当性を支持する結果が得られた。

6 各同一性地位の分布ならびに性差の検討

同一性次元尺度の項目分析の場合と同一の対象（国立T大学ならびにY大学の学生 310名：男子 170名、女子 140名、1年生89名、2年生91名、3年生 116名、4年生14名）における“現在の自己投入”、“過去の探索・危機”、“将来の自己投入の希求”の各変数の平均値と(SD)は、順に 17.2(3.3)、17.8(3.1)、17.5(3.1) であり、これらの値から調査対象集団における“平均的”同一性地位を判定すると、D-M中間地位になる。

大学生 310名における各同一性地位の分布は、図 4- 3 に示したとおりであった。4 典型地位については、同一性達成地位が11.6%、積極的モラトリアム地位が15.2%で、ともにある程度の割合を占めているが、権威受容地位と同一性拡散地位はともに 3.9%とその割合は小さい。

本研究で新たに定義された2つの中間地位については、A-F中間地位（現在かなり高い水準の自己投入を行っているが、経験した探索・危機の水準が中程度であった者）が12.3%、また D-M中間地位（“現在の自己投入”と“将来の自己投入の希求”の両変数において中間的な者）が53.1%を占めている。なお、男子に権威受容地位が多い等の若干の傾向は認められたものの、同一性地位の分布には有意な性差は認められなかった（ $\chi^2 = 6.4, df = 5, n. s.$ ）。

この結果に基づいて1年生から4年生にわたる大学生における同一性地位の現状をみると、同一性達成地位に A-F中間地位も含めた“同一性達成的”な者が約24%で4人に1人、将来の自己投入を求めて努力している者が約15%で7人に1人、そして小此木流の“消極的モラトリアム”に相当する D-M中間的な者が約半数と最も多く、権威受容的あるいは同一性拡散的な者はかなり少数で、ともに 4%程度という状態が示されている。

この概況は日常の大学生との接触に照らしてかなり妥当と思われるものであり、判定基準の3変数の得点を選択肢の意味に基づく値でそれぞれ3分割することによって、現状を適切に反映する同一性地位の測定がなされたといえよう。

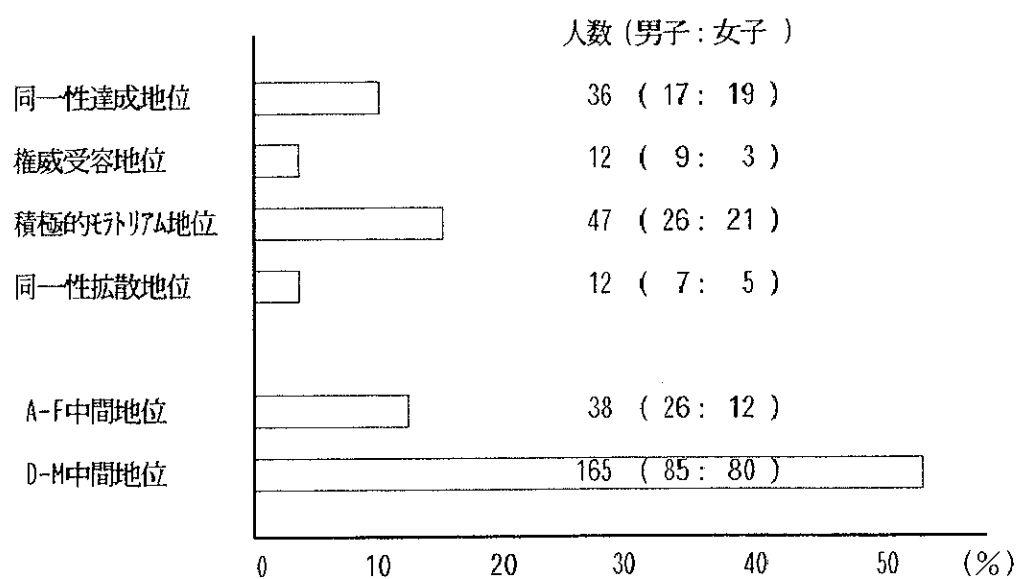


図 4- 3 大学1～4年生 310名における各同一性地位の分布

4節 同一性次元と同一性地位との関連の検討

1 両アプローチの関連についての2つの問題点

2章で述べたように、同一性地位アプローチは“探索・危機”および“自己投入”（本研究では“現在の自己投入”、“過去の探索・危機”、“将来の自己投入の希求”の3変数）というより限定的な変数によって、広範な Eriksonの同一性概念の主要な部分を把握しようとする試みである。そして、その把握が適切になされているならば、より包括的・多面的な同一性次元尺度の得点は、各同一性地位間で有意に異なっていることが期待される。しかしながら、3章で展望したように、この併存的妥当性の検証に関する十分な結果は得られていないのが現状である。

また、単なる併存的妥当性の検証に留まらず、“より詳細な質的分析が可能”という同一性地位アプローチの長所を実証するためには、同一性地位アプローチによってのみ判別されうる諸同一性地位（同一性達成地位に対する権威受容地位、D-M中間地位に対する積極的モラトリウム地位、等）が、同一性次元尺度によっては区別しえないことを示すことが必要である。

前者は同一性次元尺度を基準とした同一性地位尺度の併存的妥当性の検証であり、後者は同一性地位概念の独自の意義の検証の試みである。そして、本研究で試みた質問紙法による両尺度の構成が、十分に大きいサンプルを対象としたこれらの問題点の実証的な検討を可能としている。

2 分析対象と結果

高校2年生、大学1～4年生、および大学卒業後1年目と6年目の計607名からなる男女ほぼ半々（男子 333名、女子 274名）の集団〔研究2（第5章）の横断研究の対象者、より詳細な内訳は表 5- 1 参照〕、

およびその内の大学生のみ 352名について、各同一性地位群間で同一性次元得点の平均値の水準の比較を行った。

表 4-4 に示したように、高校生～20代後半、大学生のみのいずれの場合も、同一性地位の主効果は有意 ($p < .01$) であった。この結果は本研究で作成した同一性地位尺度の併存的妥当性を支持するものであるのみならず、より一般的に、同一性次元アプローチを基準とした同一性地位アプローチの併存的妥当性を支持する結果であるともいえる。

また、多重比較 (ダンカンの多範囲検定) の結果、同一性達成、A-F 中間、権威受容の3地位が同質の同一性次元高得点群を形成し、積極的モラトリウムと D-M 中間の2地位が同質の同一性次元中得点群を形成した。なお、同一性拡散地位の同一性次元得点は他のどの地位と比較しても有意に低いものであった。

“過去の探索・危機”の水準が異なる同一性達成、A-F 中間、権威受容の各同一性地位、および“将来の自己投入の希求”の水準が異なる積極的モラトリウムと D-M 中間の両同一性地位が、同一性次元得点によっては弁別しえないというこの結果は、“より詳細な質的分析の可能性”という同一性地位概念の独自の意義を大学生を対象として検証した加藤 (1983, 1986) の結果を、より広範なサンプルを対象として重ねて支持するものである。

表 4-4 各同一性地位群における同一性次元得点と多重比較の結果

高校2年生～大学卒業後6年目 全員 607名									
同一性地位	n	平均	SD	D	D-M	M	F	A-F	
同一性達成 (A)	78	16.1	10.1	**	**	**	n. s.	n. s.	
A-F中間 (A-F)	83	13.6	6.8	**	**	**	n. s.		
権威受容 (F)	23	15.3	8.5	**	**	**			
積極的モトリウム (M)	81	5.1	9.8	**	n. s.				
D-M中間 (D-M)	320	5.9	8.5	**					
同一性拡散 (D)	22	-4.3	7.4						
一元配置分散分析の結果		F(5/601)=37.9		p < .01		(** p < .01)			

大学1年生～大学4年生 全員 352名									
同一性地位	n	平均	SD	D	D-M	M	F	A-F	
同一性達成 (A)	44	14.2	9.7	**	**	**	n. s.	n. s.	
A-F中間 (A-F)	48	14.2	6.6	**	**	**	n. s.		
権威受容 (F)	14	15.6	9.1	**	**	**			
積極的モトリウム (M)	53	6.1	8.3	**	n. s.				
D-M中間 (D-M)	181	5.9	8.1	**					
同一性拡散 (D)	12	-6.3	5.7						
一元配置分散分析の結果		F(5/346)=23.4		p < .01]		(** p < .01)			

5章

高校生、大学生、および若い成人における同一性の様相と
その差異に関連する要因の横断的検討 [研究2]

1節 問題と目的

前章で作成した同一性次元ならびに同一性地位の両質問紙尺度を用いて、10代後半から20代後半にわたる幅広い年齢層の多数の青年および若い成人を対象として横断的調査を行い、その資料から以下の諸点を実証的に検討することが本研究の目的である。

- ① 同一性次元および同一性地位の青年期中期から初期成人期にかけての各年齢段階における様相
- ② 同一性次元および同一性地位の状態との関連における“重要な領域・要因”ならびにその性差

2節 調査対象、調査方法・時期および質問紙

高校生を対象とする調査は、関東地方の私立普通高校1校で1982年9月、公立普通高校1校で1985年10月に、ともに2年生を対象として授業中に無記名で実施した。

大学生については、関東地方の国立T大学ならびに国立Y大学の心理学概論および青年心理学の受講生を対象として1982年の5月と10月に、また国立T大学の心理学専攻生を対象として1985年6月に、講義・授業等の一環として、いずれも無記名で実施した。

大学卒業生を対象とする調査は、国立T大学の人間科学系学部を卒業後1年目と6年目にあたる卒業生のうち、住所が把握しえた者を対象として、1986年11月に郵送法によって無記名で実施した。

各群の内訳は、表 5- 1 に示したとおりである。

同一性次元尺度と同一性地位尺度は、前章で作成したものをを用いた。また、同一性次元および同一性地位の発達に関連する要因を検討することを目的として、表 5- 2 に示した具体的な11の領域における“探索・危機”および“自己投入”の水準を測定する質問紙（加藤、1983）もあわせて実施した。

3節 同一性次元得点の発達的变化

1 平均値の発達的变化

各学年（年齢）段階における同一性次元得点の平均値と標準偏差は、表 5- 1 に示したとおりであった。また、平均値を男女別に図示したのが図 5- 1 である。

大学2～3年にかけて、男女ともに若干の変動が認められるものの、巨視的には高校2年生の段階から大学卒業後1年目にかけては、男女ともにその同一性次元得点の平均値はほぼ直線的に上昇している。他方、卒業後1年目の群と6年目の群とを比較すると、男子ではやや弱まりながらも上昇が持続しているのに対し、女子では上昇傾向はほぼ止まり、プラトー的な状態を呈している。

各学年（年齢）段階ごとに男女間で平均値の差の検定を行ったところ、いずれの段階においても性差は有意ではなかった。また、学年段階と性別を独立変数とする 7×2 の2要因分散分析でも、学年（年齢）段階の主効果のみ認められ $[F(6/593) = 15.0, p < .01]$ 、性差および学年 \times 性別の交互作用は有意ではなかった ($F < 1.0$)。

表 5-1 研究2の対象者、調査方法等と各群における同一性次元得点

		高校 2年生	大学 1年生	大学 2年生	大学 3年生	大学 4年生	卒業後 1年目	卒業後 6年目	全体
男子	n	106	55	49	57	23	13	30	333
	平均	3.7	6.9	8.8	8.0	10.6	12.2	16.6	7.7
	(SD)	(10.3)	(8.6)	(8.7)	(9.4)	(11.5)	(9.8)	(9.0)	(10.2)
女子	n	54	34	42	59	33	21	31	274
	平均	4.9	6.5	5.5	8.2	12.2	15.1	15.4	8.7
	(SD)	(9.0)	(9.0)	(11.7)	(7.6)	(8.9)	(6.1)	(6.9)	(9.5)
全体	n	160	89	91	116	56	34	61	607
	平均	4.1	6.7	7.2	8.1	11.5	14.0	16.0	8.2
	(SD)	(9.9)	(8.7)	(10.2)	(8.5)	(10.0)	(7.7)	(8.0)	(9.9)
調査 方法	授業中に 実施・回収	同左	同左	同左	同左	同左	郵送法 58.9%	郵送法 54.1%	(有効回収率)

表 5-2 具体的な11領域における“探索・危機”および“自己投入”の水準に関する質問紙

以下の左に示されていることについて、現在あなたはどの程度迷ったり考えたりしていますか。
また、右に示されていることは、現在のあなたにとってどれだけ重要な生きがい、あるいは
努力の対象になっていますか。
あてはまる程度を以下の選択肢から選んで、数字を（ ）に記入してください。

A. 迷ったり考えたりしている程度：

非常に考え迷っている-----3
かなり考え迷っている-----2
すこし考え迷っている-----1
特に迷いも考えもしていない-----0

- a. 自分と両親等との関係-----（ ）
b. 同性の友人との関係-----（ ）
c. 異性の友人等との関係-----（ ）
d. 男らしい生き方；女らしい生き方（ ）
e. 勉強-----（ ）
f. 現在あるいは将来の仕事-----（ ）
g. 自分にふさわしい趣味-----（ ）
h. 政治に対する自分の態度-----（ ）
i. 社会問題に対する自分の態度-----（ ）
j. 宗教に対する自分の態度-----（ ）
k. 自分がめざすべき生き方や価値-----（ ）

B. 生きがいあるいは努力の対象となっている程度：

非常に重要な生きがい／たいへん努力している---3
かなり重要な生きがい／かなり努力している---2
やや重要な生きがい／少しは努力している---1
特に重要ではなく努力もしていない-----0

[重要さと努力の程度とが一致しない場合には、
高い方の点を記入してください。
例えば、かなり重要（2）だがほとんど努力し
ていない（0）場合には（2）というように]

- a. 自分と両親等との関係-----（ ）
b. 同性の友人との関係-----（ ）
c. 異性の友人等との関係-----（ ）
d. 男らしい自分；女らしい自分（ ）
e. 勉強-----（ ）
f. 現在あるいは将来の仕事-----（ ）
g. 個人的趣味-----（ ）
h. 政治的活動-----（ ）
i. 社会的活動-----（ ）
j. 宗教的活動-----（ ）
k. 望ましい生き方や価値の追求（ ）

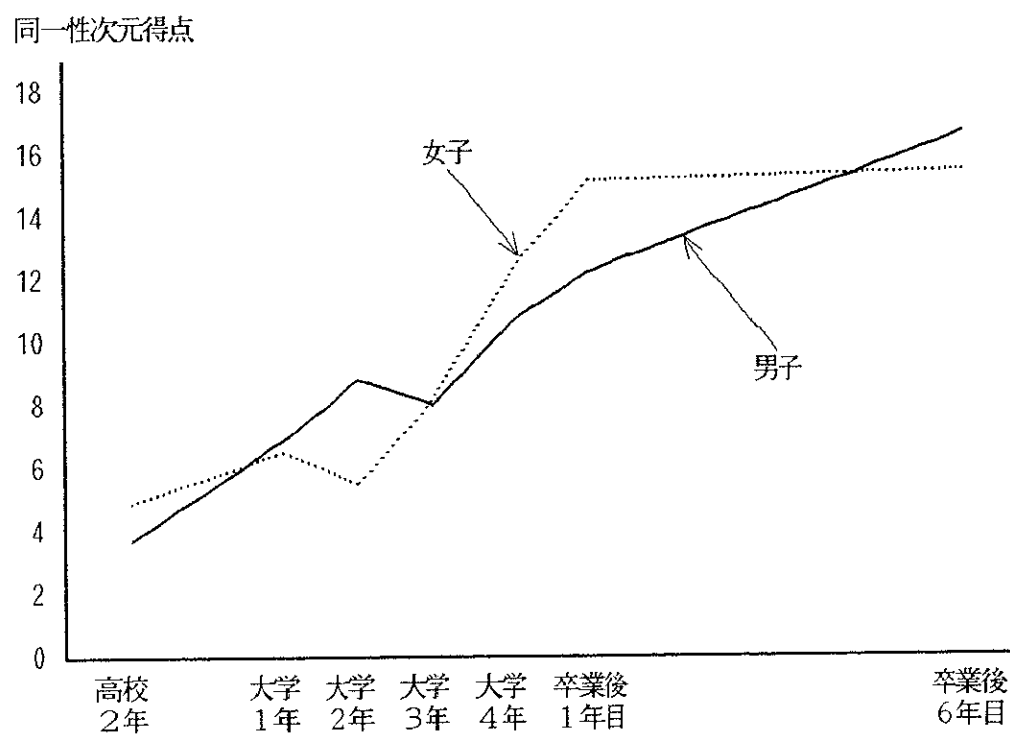


図 5-1 高校2年生、大学の各学年、および大学卒業者における
同一性次元得点の平均値

これらの結果から、本研究の調査対象である高校生、大学生、および大学卒業生の同一性次元の発達について、以下の諸点が指摘できよう。

- ①高校2年生～大学卒業後数年目にかけては、同一性次元得点の水準に有意な性差は認められない。
- ②同一性次元得点の水準は、巨視的には、高校2年生から大学卒業後1年目にかけて、男女ともにほぼ一貫して“同一性”優位の方方向に移行する。
- ③大学2～3年の時点で、男女各々の同一性次元得点の推移に変動が認められる。しかしながら、この結果が、この時期が同一性次元の発達において重要な節目であることを意味するのか、あるいは単なる標本誤差であるのかは、横断研究である本研究のデータからは判断しきれない。
- ④同一性次元得点の上昇傾向は、男子では20代を通じて持続するが、女子では20代前半にほぼプラトーに達する。

2 分布の変化

各学年（年齢）段階における同一性次元得点の度数分布を表 5-3 に示した。いずれの段階においても性差は有意ではなかったため、男女を併合した分布が示されている。

高校2年生、大学1年生、大学3年生、ならびに大学卒業後6年目の各群における同一性次元得点の分布を示したのが図 5-2 である。同一性次元得点が負の値を示す者が高校2年生では全体の約30%、大学1年生でも約22%を占めているのに対し、大学3年生ではその割合は約15%となり、大学卒業後6年目ではわずか 1.6%に減少している。この結果は、先に集団の平均値を指標として示された同一性次元得点の上昇傾向を、各個人の得点分布においても重ねて示すものである。

表 5-3 各群における同一性次元得点の分布

得点階級	高校 2年生	大学 1年生	大学 2年生	大学 3年生	大学 4年生	卒業後 1年目	卒業後 6年目	全体
28～ 35	1.3	0.0	2.2	0.9	3.6	0.0	6.6	1.8
21～ 27	5.6	5.6	4.4	6.9	14.3	14.7	18.0	8.2
14～ 20	7.5	20.2	19.8	21.6	23.2	38.2	39.4	20.3
7～ 13	21.3	24.7	34.0	30.0	25.0	29.4	26.2	26.7
0～ 6	33.0	27.1	17.6	25.9	19.6	11.8	8.2	23.6
-7～ -1	22.5	19.1	9.9	11.2	12.5	5.9	1.6	14.0
-14～ -8	5.6	2.2	8.8	2.6	1.8	0.0	0.0	3.8
-21～ -15	1.9	1.1	3.3	0.9	0.0	0.0	0.0	1.3
-28～ -20	1.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3
% (n)	100.0 (160)	100.0 (89)	100.0 (91)	100.0 (116)	100.0 (56)	100.0 (34)	100.0 (61)	100.0 (607)

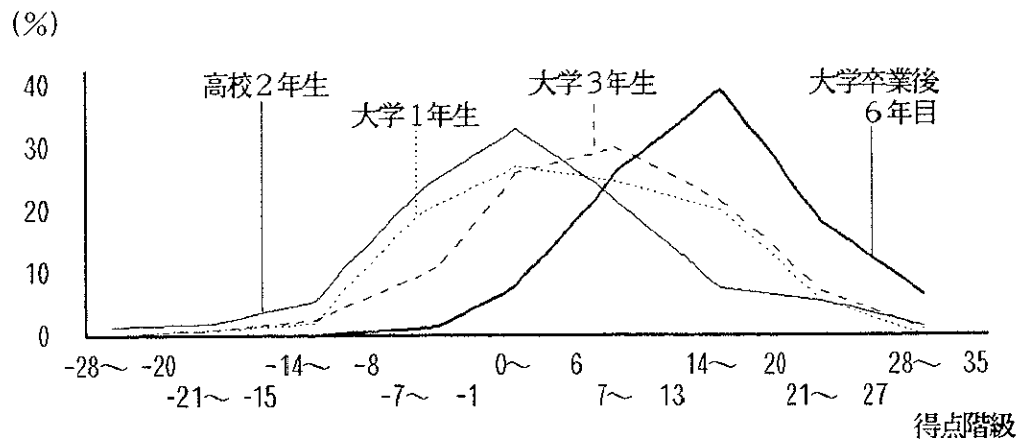


図 5-2 各群における同一性次元得点の分布

4節 同一性地位の発達的变化

3節と同一の対象者における、各学年（年齢）段階ごとの同一性地位の分布は表 5-4 と図 5-3 に示したとおりであった。なお、いずれの群においても同一性地位の分布には有意な性差は認められなかったため、男女を併合した全体における各同一性地位の比率が示されている。

高校2年生から大学3年生にかけて、および大学卒業後6年目の集団では約半数、あるいはそれ以上の者が D-M中間地位に分類されており、小此木流の“消極的モラトリウム”的な D-M中間地位状態がこの年代においてが支配的であることが示されている。しかしながら、大学4年次から卒業後1年目にかけては D-M中間地位の比率は4割弱にまで減少し、対照的に、大学3年次～卒業後1年目にかけて同一性達成ならびに A-F中間の両地位の比率が増加傾向を示している。

ある程度以上の“探索・危機”を経験した上で“自己投入”を行っているという点で“同一性達成”と“A-F中間”の両同一性地位の類似性は高いため、両者を併合した場合の比率を図 5-3 に一点鎖線（-----）で示してみた。この群が全体に占める比率は、大学3年生から卒業後1年目の期間に顕著に増加しており、大学4年および卒業後1年目の時点においては40～50%に達して D-M中間地位の比率を上回っている。

積極的モラトリウム地位の比率は大学2年次が最も高く、その後漸減傾向を示している。

同一性拡散地位ならびに権威受容地位については、その比率はともに5%程度以下と小さく、群間に明瞭な差異は認められない。

表 5-4 各群における同一性地位の分布

パーセント (人数)	高校 2年生	大学 1年生	大学 2年生	大学 3年生	大学 4年生	卒業後 1年目	卒業後 6年目	全体
同一性達成	6.9 (11)	10.1 (9)	19.8 (18)	6.0 (7)	17.9 (10)	29.4 (10)	21.3 (13)	12.9 (78)
A-f中間	13.2 (21)	11.2 (10)	5.5 (5)	17.2 (20)	23.2 (13)	20.6 (7)	11.5 (7)	13.7 (83)
権威受容	3.8 (6)	2.2 (2)	5.5 (5)	3.4 (4)	5.4 (3)	0.0 (0)	4.9 (3)	3.8 (23)
積極的対抗	13.8 (22)	15.7 (14)	17.6 (16)	12.9 (15)	14.3 (8)	8.8 (3)	4.9 (3)	13.3 (81)
D-M中間	57.3 (92)	56.3 (50)	48.3 (44)	57.1 (66)	37.4 (21)	38.3 (13)	55.8 (34)	52.7 (320)
同一性拡散	5.0 (8)	4.5 (4)	3.3 (3)	3.4 (4)	1.8 (1)	2.9 (1)	1.6 (1)	3.6 (22)
% (n)	100.0 (160)	100.0 (89)	100.0 (91)	100.0 (116)	100.0 (56)	100.0 (34)	100.0 (61)	100.0 (607)

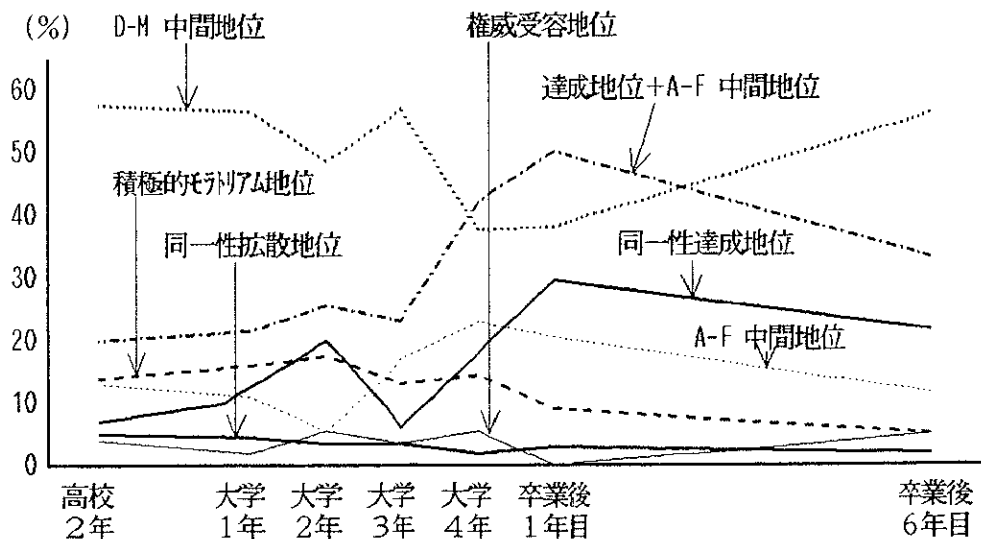


図 5-3 各群における同一性地位の分布

横断的に把握された各同一性地位の比率、ならびにその変遷に関するこれらの結果から、高校生から大学卒業後数年目にかけての同一性地位の発達について、以下の諸点が指摘できよう。

- ①（少なくとも本研究で調査対象とした“普通高校”の）高校2年生においては、積極的モラトリウム地位の比率は約14%とかなり高いものの、D-M中間地位が全体の6割弱を占めており、また同一性達成地位の比率は7%程度に過ぎない等、自己の同一性に関する意識は未分化な状態に留まっている。
- ②将来の自己投入の対象を求める積極的モラトリウム地位の比率は、大学2年生前後に最も高くなり約18%に達するが、その比率は大学卒業後には9～5%程度にまで低下する。
先に述べた、大学2～3年の時点における同一性次元得点の変動と考え合わせると、これらの結果は大学2～3年生が同一性次元・同一性地位の両面における変動の時期であることを示唆するものであるのかもしれない。
- ③ある程度以上の探索・危機を経て、個々の自己投入の対象を見出した同一性達成あるいはA-F中間地位の比率は、大学4年生から卒業後1年目にかけて最も高くなり、4～5割に達する。
- ④大学卒業後数年がたち20代後半になると、同一性達成地位ならびにA-F中間地位の比率は低下し、D-M中間地位の比率が増加する。これは、成人期の新たな諸課題に直面し、それらに意識・関心が向けられることによって、自己の同一性に関する意識は一種“解決済みの過去の課題”となることによるものであろう。

これらの知見は、Marciaの理論的枠組みにおける“同一性達成”が、青年期から成人期への移行の時期においてとりわけ大きな重要性を持ち、その意味で“青年期後期の発達課題”としての性格を持つことと一致するものである。

5節 同一性次元と同一性地位の特質に関する考察

3節で示したように、同一性次元上の得点が大学卒業後も上昇が持続し、あるいは少なくともプラトー的に推移するのに対し、4節でみたとおり A-F中間地位を含む同一性達成地位の比率は、大学4年次～卒業後1年目にかけて最大となるものの、その後20代後半にかけては漸減している。

同一の集団を対象としながら、両概念の発達の変遷に認められたこのような差異は、“同一性次元”と“同一性地位”の両概念の相違と特質について一定の考察を可能とするものである。この差異の理解において、第2章でふれた“同一性地位は Eriksonの同一性概念の全体像を網羅するものではなく、現実社会とかかわりあう具体的かつ実存的姿勢の形成という側面を主に検討する概念である”との Bourne の指摘が参考になると思われる。この指摘に沿うなら、“大学卒業後、20代の半ばから後半にかけて、同一性次元の水準はさらに上昇あるいは安定的に推移するのに対し、同一性達成および A-F中間地位は漸減し D-M中間地位が漸増する”との結果は、以下のように解釈することができよう。

すなわち、

- ① Marciaの同一性地位概念は、“様々な探索・危機を経て、自らの将来を賭けるに足り、かつ実現可能な自己投入の対象をみいだす”という（成人期への移行に直面する）青年期後期に特徴的な課題への対処の様相をその内容とする、より限定的な概念である。
- ② “青年期の後期”において（大学生の場合は卒業に臨んで）、Marcia的意味での同一性達成、すなわち“探索・危機”をへた“自己投入”について一定の決定をなし遂げた青年は、“成人期”へとより積極的に移行しうる基盤を得る。

- ③ “成人期”においては、先に選択された“自己投入”の具体化として“生成”(generativity)ならびに“親密性”(intimacy)の体験を現実になし遂げていくことがその主要な課題となる。
- ④他方、ある特定の“自己投入”の主体的選択をその内容とするMarcia的な意味での自己の“同一性”それ自体は“既に決定済み、あるいは達成済みの課題”であり、それに関する問題意識等は次第に稀薄化する。
- ⑤ “生成”、“親密性”等に関する新たな体験(主体的に選択し決定された自己の“同一性”の具体化としての仕事、およびその一環あるいは拡張としての恋愛・結婚、子供の誕生、等)によって、Erikson的な意味での総体的な同一性の体験は、平均的には、成人期以降も一層充実し豊かなものとなっていく。

また、上の結果から直接示唆されるものではないが、成人期以降において Marcia 的な“同一性地位”に関する意識が高まるとすれば、それは“生成”、“親密性”等の体験が順調に成しえないという問題が生じ、その基礎・青写真としての“自己投入”の内容自体に関する疑問が発生した場合であることが予想される。

6 節 諸領域における探索・危機ならびに自己投入の水準の検討

1 目的と対象

3章で論じたように、同一性体験における各領域の重要性に関しては総合的な検討はこれまでなされておらず、研究者の関心や対象の特性に応じて諸領域の追加と削除がなされているのが現状である。

そこで本節ではまず、包括的・網羅的と考えられる全11領域の各々における“探索・危機”と“自己投入”について、その水準と性差を検討し、続いて次節以降で、全体的な同一性次元得点の水準および同一性地位との対応関係を基準として各領域の重要性の検討を試みる。

本研究では、表 5- 4 に示した11領域（加藤, 1983）を“青年の生活空間における主要な領域”として取り上げた。また分析の対象者としては前節の結果をふまえて、青年期後期から成人期への移行期にあり、同一性の問題に最も意識的であることが期待される大学1～4年次および大学卒業後1年目の者（男子 197名、女子 189名、計 386名）を用いることとした。

2 諸領域における探索・危機および自己投入の水準とその性差

男女各々における探索・危機ならびに自己投入の水準の平均値、標準偏差、平均値の順位、および平均値の性差のt検定の結果は表 5- 5 に示した通りであった。平均値の高低を基準としてその順位によって判断した諸領域の重要性は、自己投入については男女間で全く同一であった。また、探索・危機についても、女子で“女らしい生き方”の重要性が高く、男子で“社会問題”の重要性が高い等の予想されうる差異を除き、ほぼ同様であった。

表 5- 5 諸領域における探索・危機および自己投入の水準等とその順位・性差
 [分析対象は大学1～4年生と大学卒業後1年目を併合した集団]

探索・危機	男子[n=197] 平均(SD)順位	女子[n=189] 平均(SD)順位	性差
自分と家族との関係77(.84) 8	.98(.93) 8	*
同性の友人との関係	.94(.95) 6	1.05(.91) 6	
異性の友人との関係	1.45(.99) 4	1.56(1.00) 4	
男(女)らしい生き方	.93(1.01) 7	1.13(1.02) 5	
勉強	1.49(.93) 3	1.71(.84) 3	*
将来の仕事	1.86(1.05) 1	2.13(.91) 1	**
自分にふさわしい趣味68(.84) 10	.74(.91) 9	
政治に対する自分の態度	.70(.84) 9	.62(.78) 10	
社会問題に対する自分の態度 . .	.95(.87) 5	1.04(.82) 7	
宗教に対する自分の態度	.28(.63) 11	.29(.66) 11	
自分がめざすべき生き方や価値 .	1.71(.96) 2	2.13(.90) 1	**

** $p < .01$, * $p < .05$

自己投入	男子[n=197] 平均(SD)順位	女子[n=189] 平均(SD)順位	性差
自分と家族との関係	1.26(.92) 7	1.59(.88) 7	**
同性の友人との関係	1.81(.94) 3	2.06(.79) 3	**
異性の友人との関係	1.71(1.00) 4	1.88(.91) 4	
男(女)らしい自分	1.21(1.04) 8	1.30(.95) 8	
勉強	1.69(.89) 5	1.80(.81) 5	
将来の仕事	2.04(.93) 1	2.29(.80) 1	**
個人的趣味	1.47(.98) 6	1.62(.95) 6	
政治的活動	.38(.63) 10	.29(.57) 10	
社会的活動65(.75) 9	.75(.82) 9	
宗教的活動	.20(.55) 11	.23(.63) 11	
望ましい生き方や価値の追求 . .	1.85(.97) 2	2.25(.82) 2	**

** $p < .01$, * $p < .05$

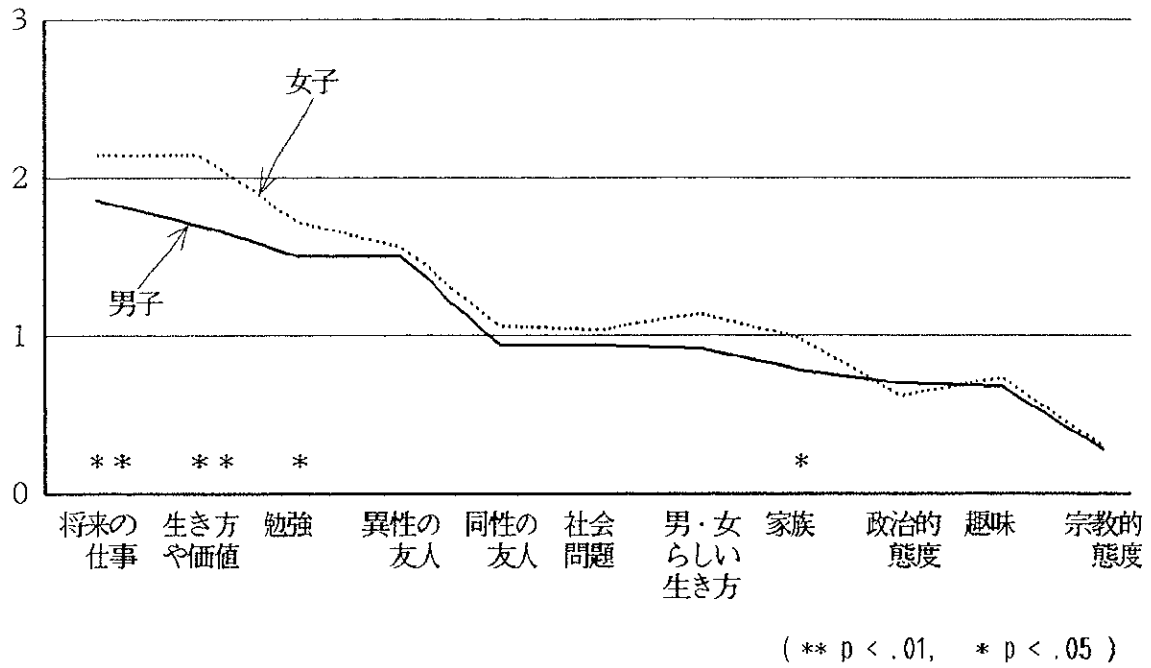
平均値の高い順に領域を並べ替え、男女各々について探索・危機および自己投入の水準のプロフィールを示したのが図 5-4 である。

探索・危機については、男女ともに“将来の仕事”と“生き方や価値”の領域における水準が最も高く、続いて“勉強”、“異性の友人”等になっており、これらの領域が青年期後期にあたる大学生らにとって主要な関心事であることを示している。他方、“政治的態度”の領域に関する探索・危機の水準は“趣味”と同程度であり、さらに“宗教的態度”に関する探索・危機の水準は、少なくとも平均値的には最も低い。

自己投入についても、男女ともに“将来の仕事”と“生き方や価値”の領域が最も高く、続いて、“同性の友人”、“異性の友人”、“勉強”等となっている。他方、探索・危機と同様に“宗教的活動”および“政治的活動”の両領域における自己投入の水準は男女ともに最も低く、これらの領域が大学生らにとっての主要な活動と努力の領域ではないことを示している。

これらの結果は、“探索・危機”ならびに“自己投入”の平均的水準の高低からみれば、本邦の青年、とりわけ大学生および卒業後1年目の大卒者においては、“政治”および“宗教”の領域の重要性は低く、思想・イデオロギー等の問題はむしろ“望ましい生き方や価値”という形で追求されを示すものと考えられる。これは、無藤(1979)の結果とも一致するものである。

探 索 ・ 危 機



自 己 投 入

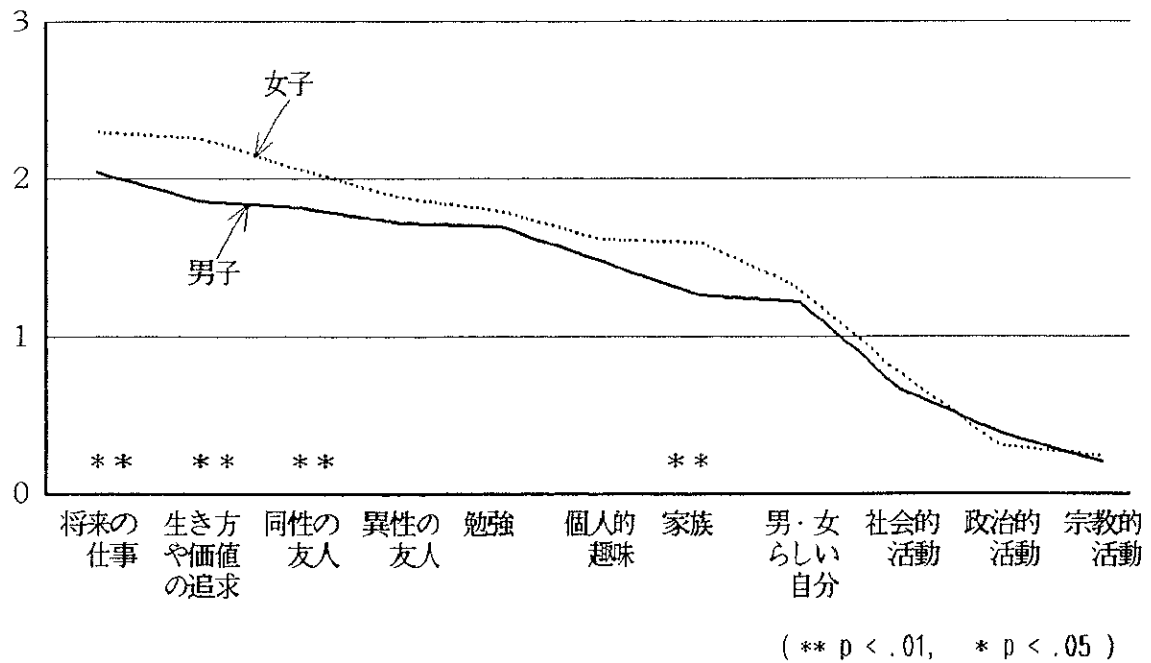


図 5-4 諸領域における探索・危機および自己投入の水準
(領域は平均値の高い順に並べ変えてある)

7節 同一性次元得点の水準との対応を基準とした諸領域における探索・危機ならびに自己投入の重要性の検討

領域を特定しない一般的な同一性次元尺度の得点の高低と、より具体的な特定領域における探索・危機あるいは自己投入との間に有意な対応が認められるなら、その領域はより包括的な同一性体験と密接に関連するものであると考えられる。そこで、同一性次元得点が負（-1点以下）の者を低得点群、0点以上13点以下の者を中得点群、14点以上の者を高得点群として、3群間で具体的な諸領域における探索・危機および自己投入の水準の比較を行った。低、中、高得点各群の人数は、順に男子が39名、94名、64名、女子が28名、103名、58名であった。なお、中得点群と高得点群との分割点とした14点は、尺度項目の半分に“かなり肯定的（同一性方向）”、他の半分に“どちらかといえば肯定的（同一性方向）”に反応した場合に期待される得点である。

諸領域における各群の探索・危機および自己投入の平均値ならびに分散分析の結果は表 5- 6 に示したとおりであった。男子では“家族との関係”と“将来の仕事”への自己投入に1%水準、“政治的態度”に関する探索・危機の水準に5%水準の有意差が認められ、男子の同一性体験におけるこれらの領域の重要性が示されている。また女子では“女らしい生き方”に関する探索・危機と“宗教的活動”への自己投入に1%水準、“家族との関係”、“勉強”、“将来の仕事”への自己投入、および“宗教に対する態度”、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機の水準に5%水準の有意差が認められ、女子の同一性体験におけるこれらの領域の重要性が示されている。

表 5-6 同一性次元得点の高中低3群における探索・危機および自己投入の平均値

探索・危機	男子			女子		
	高群 [64]	中群 [94]	低群 [39]	高群 [58]	中群 [103]	低群 [28]
自分と家族との関係・8	.7	.9	.9	1.0	1.2
同性の友人との関係	.9	.9	.9	.9	1.0	1.4
異性の友人との関係・	1.4	1.4	1.7	1.6	1.5	1.9
男(女)らしい生き方	.9	1.0	.9	.9	1.0	1.9 **
勉強・	1.3	1.6	1.6	1.6	1.7	1.8
将来の仕事	1.7	1.9	1.9	1.9	2.2	2.3
自分にふさわしい趣味・6	.7	.8	.7	.7	1.1
政治に対する自分の態度	.6	.6	1.0 *	.5	.7	.7
社会問題に対する自分の態度・	1.0	.8	1.2	1.0	1.0	1.2
宗教に対する自分の態度	.2	.3	.3	.5	.2	.3 *
自分がめざすべき生き方や価値	1.6	1.7	1.8	2.1	2.0	2.5 *

** $p < .01$, * $p < .05$

自己投入	男子			女子		
	高群 [64]	中群 [94]	低群 [39]	高群 [58]	中群 [103]	低群 [28]
自分と家族との関係・	1.6	1.2	.9 **	1.8	1.4	1.6 *
同性の友人との関係	2.0	1.8	1.5	2.2	2.0	2.1
異性の友人との関係・	1.9	1.7	1.6	1.9	1.9	2.0
男(女)らしい自分	1.4	1.2	.9	1.2	1.3	1.5
勉強・	1.8	1.7	1.5	2.1	1.7	1.7 *
将来の仕事	2.3	2.0	1.7 **	2.5	2.2	2.1 *
個人的趣味・	1.6	1.4	1.4	1.7	1.5	1.8
政治的活動	.4	.3	.5	.3	.2	.4
社会的活動・7	.6	.6	.9	.7	.7
宗教的活動	.2	.2	.1	.4	.1	.1 **
望ましい生き方や価値の追求・	2.0	1.8	1.8	2.4	2.1	2.4

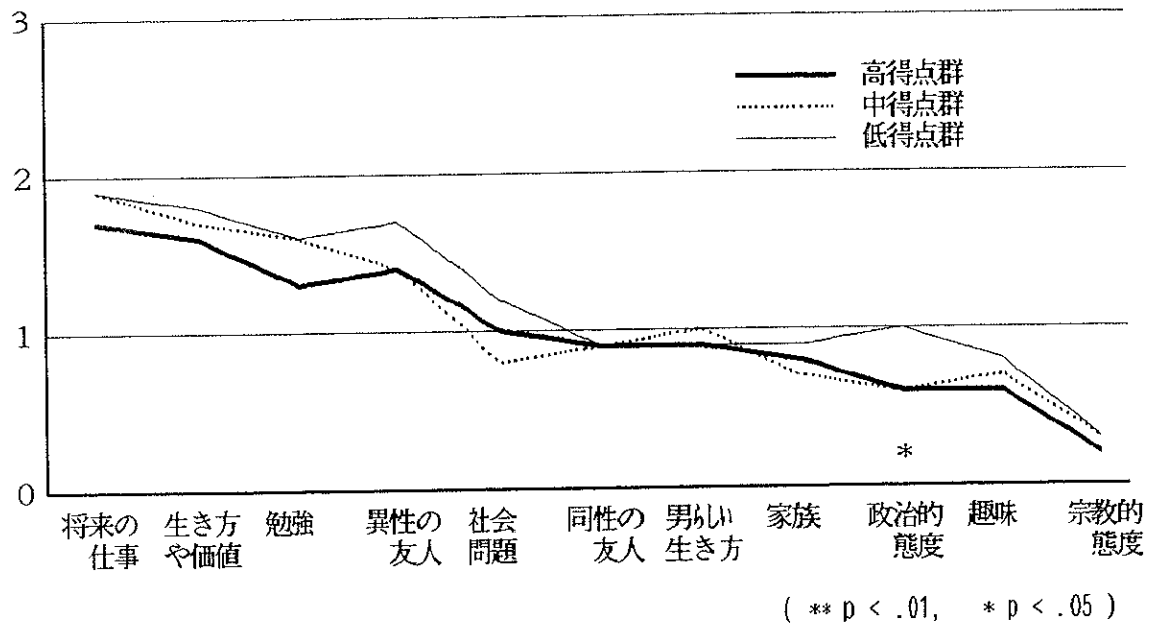
** $p < .01$, * $p < .05$

各群の平均値を図示した図 5- 5, 6 のプロフィールから、同一性次元高得点群の男子は“将来の仕事”、“家族との関係”、“同性の友人との関係”、“男らしい自分”等を重視し、そのために努力しており、逆に低得点群の男子はこれらの領域への自己投入が低いこと、他方、低得点群の男子は“異性の友人との関係”や“政治的態度”等についてより考え迷っており、逆に高中得点群の男子はそれらの迷い等は少ないことが見てとれる。

また、同一性次元高得点群の女子は“将来の仕事”、“勉強”、“家族との関係”等を重視し、そのために努力していること、他方、低得点群の女子は、“女らしい生き方”や“めざすべき生き方や価値”についてより考え迷っていることが見てとれる。

分散分析の結果にも表れたように、女子の高得点群には“宗教的活動”への自己投入ならびに探索・危機の水準が高いものが含まれていた。この結果は、宗教的活動への自己投入ならびに宗教的態度に関する探索・危機が、特に女子においては同一性体験において重要な意味を持ちうるものであることを示唆する結果ではあるが、女子高得点群における自己投入の平均値は 0.4、探索・危機の平均値は 0.5とともに低く、そのような自己投入ならびに探索・危機を行っている者の絶対数は少ないことを示している。したがって、特に女子においては少数の例外は存在するものの、本邦の一般青年にとっての“宗教”の重要性は大きくはないと考えるべきであろう。

男 子



女 子

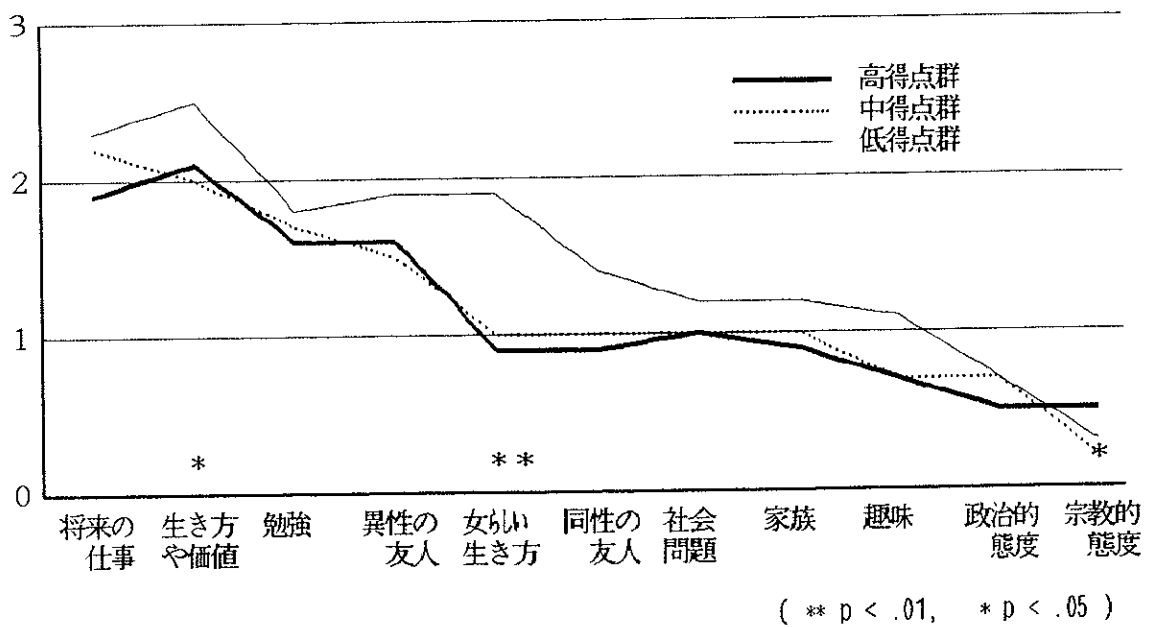
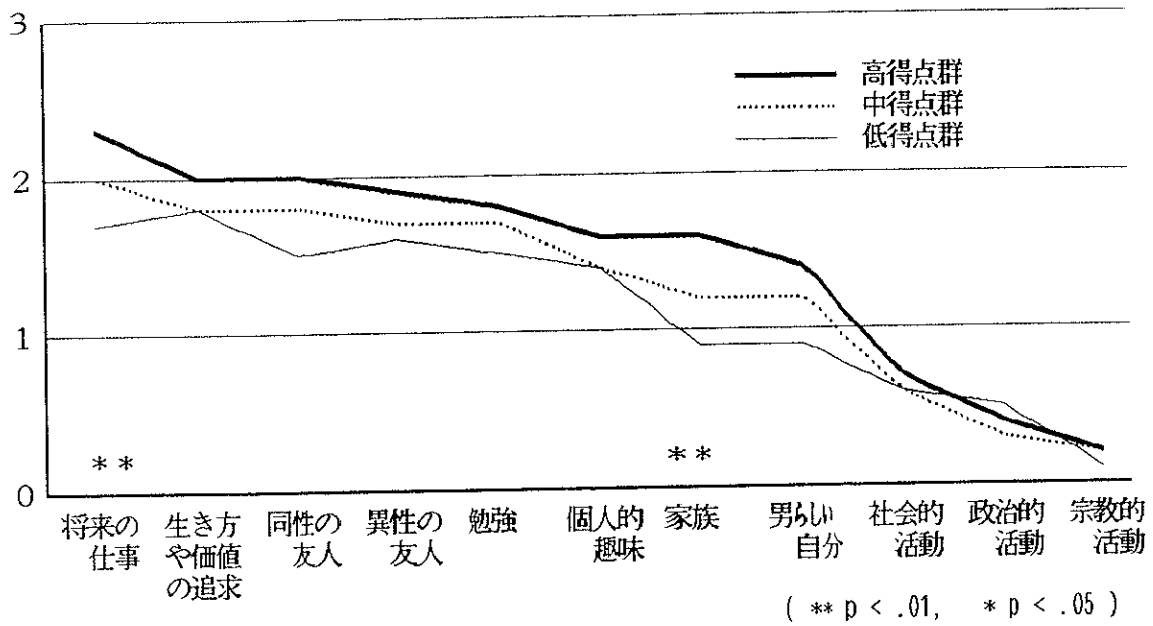


図 5-5 同一性次元得点の高中低群における探索・危機の水準
(領域は平均値の高い順に並べ変えてある)

男子



女子

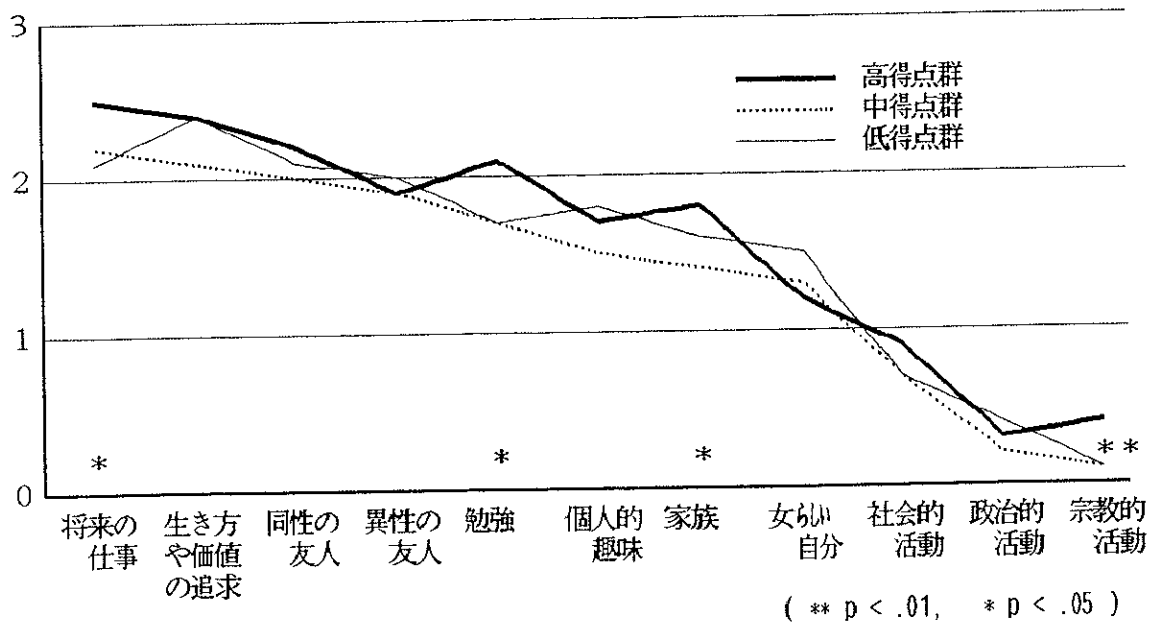


図 5-6 同一性次元得点の高中低群における自己投入の水準
(領域は平均値の高い順に並べ変えてある)

8節 各同一性地位群のプロフィールに基づく、諸領域の重要性 ならびに各同一性地位の特徴の検討

前節と同様の検討を、同一性達成～同一性拡散の6同一性地位を基準として男女各々について行った結果は表 5-7 に示したとおりであった。男子では、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機と“将来の仕事”への自己投入に1%水準、“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入に5%水準の有意差が認められ、“将来の仕事”に関する探索・危機および“勉強”への自己投入にも有意に近い差($p < .06$)が認められた。

女子では、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機と“将来の仕事”、“望ましい生き方や価値の追求”、“勉強”への自己投入に1%水準、“将来の仕事”、“政治に対する態度”、“社会問題に対する態度”に関する探索・危機ならびに“同性の友人との関係”への自己投入にも5%水準の有意差が認められた。

同一性次元に関する前節の結果と比較すると、男女両方における“将来の仕事”および女子における“勉強”への自己投入等、共通して重要な領域も認められるものの、全体的には同一性地位を基準とした結果は前節のそれとはかなり異なっている。

そこで、各同一性地位のプロフィールをより詳細に検討するために、同一性達成、権威受容、積極的モラトリウム、同一性拡散の4典型地位群について、その探索・危機および自己投入の水準の平均値のプロフィールを示したのが図 5-7, 8 である。なお、D-M中間ならびに A-F中間の両地位については図面の繁雑をさけるために省略した。また、各領域は全体平均値の高い順に並べ変えてある。

表 5-7 各同一性地位群における探索・危機および自己投入の平均値

	男 子							女 子						
探索・危機	※	A	AF	F	M	DM	D	A	AF	F	M	DM	D	
		[25]	[31]	[10]	[27]	[96]	[8]	[29]	[24]	[4]	[29]	[98]	[5]	
自分と家族との関係・9	.6	.5	.9	.7	1.4	1.2	1.1	.5	1.1	.9	1.0	
同性の友人との関係		1.2	.8	.6	1.0	.9	1.5	1.1	.8	1.2	1.2	1.0	1.2	
異性の友人との関係・		1.6	1.4	1.3	1.6	1.4	1.4	1.6	1.6	.8	1.8	1.5	2.0	
男（女）らしい生き方		.9	1.0	.7	1.2	.9	1.0	1.0	.9	1.0	1.3	1.2	1.2	
勉強・		1.4	1.5	1.6	1.8	1.4	1.7	1.9	1.6	1.2	2.0	1.6	2.2	
将来の仕事		1.9	1.6	2.0	2.4	1.8	1.9	2.3	1.9	.8	2.3	2.1	2.2 *	
自分にふさわしい趣味・7	.5	.6	.7	.7	.7	.9	.5	.3	1.1	.7	.6	
政治に対する自分の態度		.6	.8	1.2	.7	.6	1.1	.8	.3	.5	.9	.6	.0 *	
社会問題に対する自分の態度・		1.1	.9	1.4	1.2	.8	1.1	1.4	.8	.5	1.3	1.0	.4 *	
宗教に対する自分の態度		.2	.5	.2	.3	.2	.4	.6	.1	.0	.4	.2	.0	
自分がめざすべき生き方や価値		2.2	1.4	2.0	2.0	1.5	1.9 **	2.4	1.7	1.2	2.6	2.0	2.0 **	

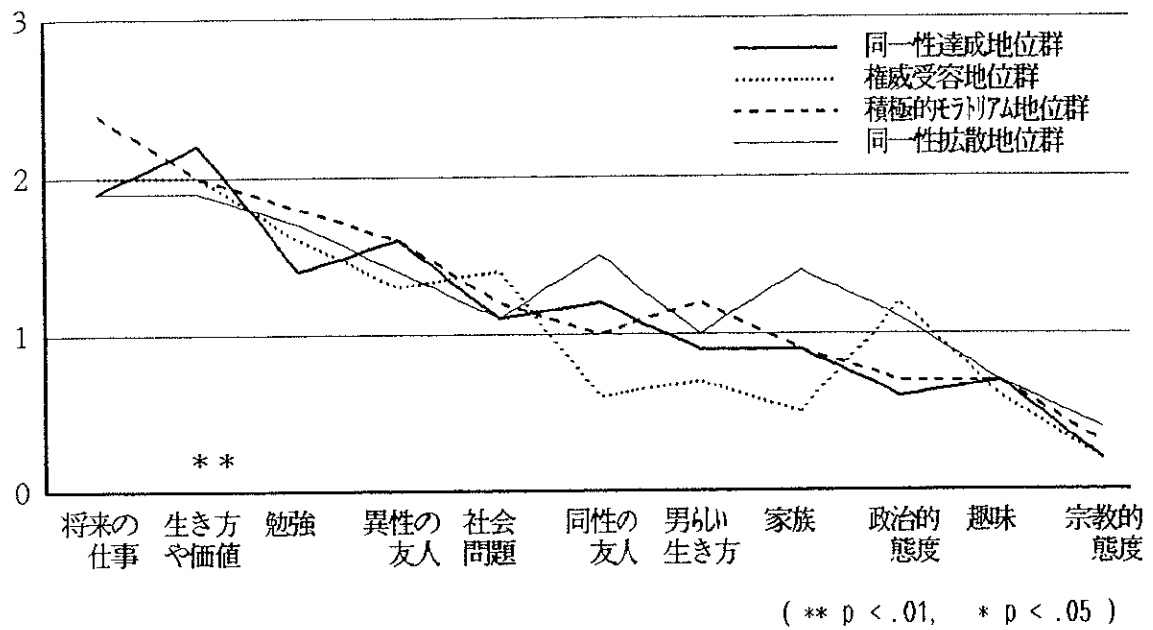
** p < .01, * p < .05

※ A : 同一性達成地位	AF : A-F中間地位	F : 権威受容地位
M : 積極的昇昇地位	DM : D-M中間地位	D : 同一性拡散地位

	男 子							女 子						
自己投入	※	A	AF	F	M	DM	D	A	AF	F	M	DM	D	
		[25]	[31]	[10]	[27]	[96]	[8]	[29]	[24]	[4]	[29]	[98]	[5]	
自分と家族との関係		1.1	1.7	1.2	1.4	1.1	1.2	1.7	1.4	2.0	1.6	1.6	1.0	
同性の友人との関係		2.0	2.0	1.3	2.0	1.7	1.9	2.0	1.9	1.5	2.5	2.1	1.6 *	
異性の友人との関係		1.6	1.8	2.1	1.9	1.7	1.1	1.8	1.8	1.0	2.2	1.9	1.4	
男（女）らしい自分		1.1	1.6	1.1	1.3	1.1	1.0	1.4	1.1	1.2	1.4	1.3	1.0	
勉強		1.7	2.0	2.2	1.7	1.5	1.6	2.0	2.3	1.7	2.0	1.6	1.2 **	
将来の仕事		2.4	2.3	2.6	2.1	1.8	1.5 **	2.3	2.6	2.0	2.6	2.2	.8 **	
個人的趣味		1.6	1.6	1.8	1.5	1.4	1.1	1.9	1.6	1.3	1.9	1.5	.8	
政治的活動		.4	.5	.4	.5	.3	.3	.3	.2	.0	.5	.3	.0	
社会的活動		.8	.9	.6	.9	.5	.2	.9	.5	.5	.9	.8	.0	
宗教的活動		.2	.3	.1	.1	.2	.1	.5	.2	.0	.3	.2	.0	
望ましい生き方や価値の追求		2.3	2.0	1.8	2.0	1.7	1.1 *	2.7	2.0	2.5	2.6	2.1	1.2 **	

** p < .01, * p < .05

男 子



女 子

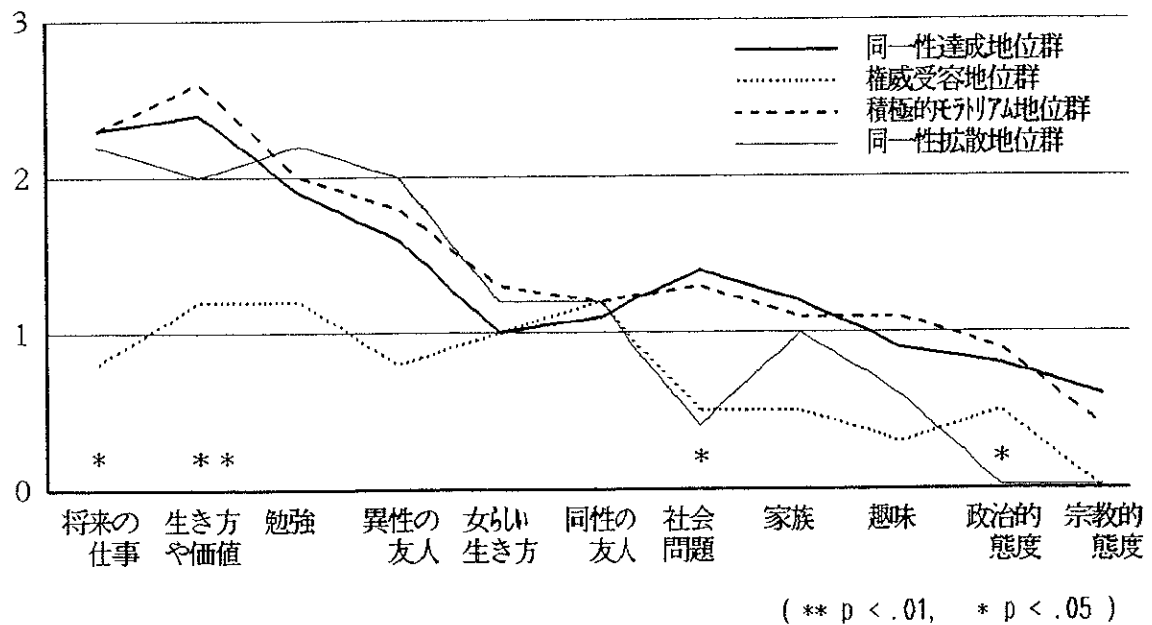
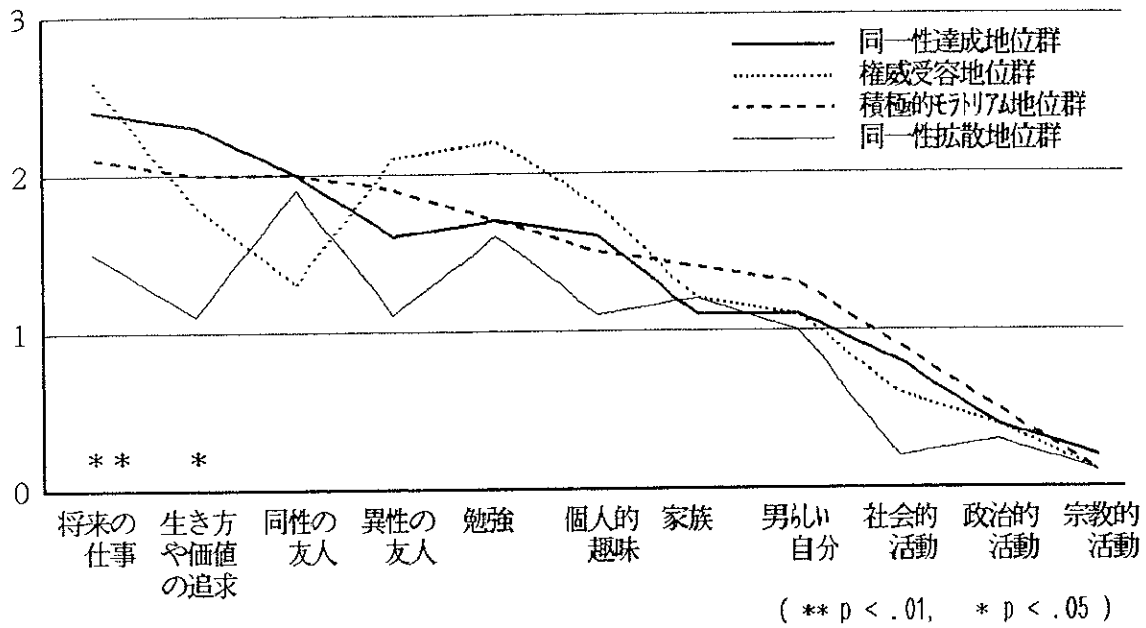


図 5-7 各典型同一性地位群における探索・危機の水準
(領域は平均値の高い順に並べ変えてある)

男 子



女 子

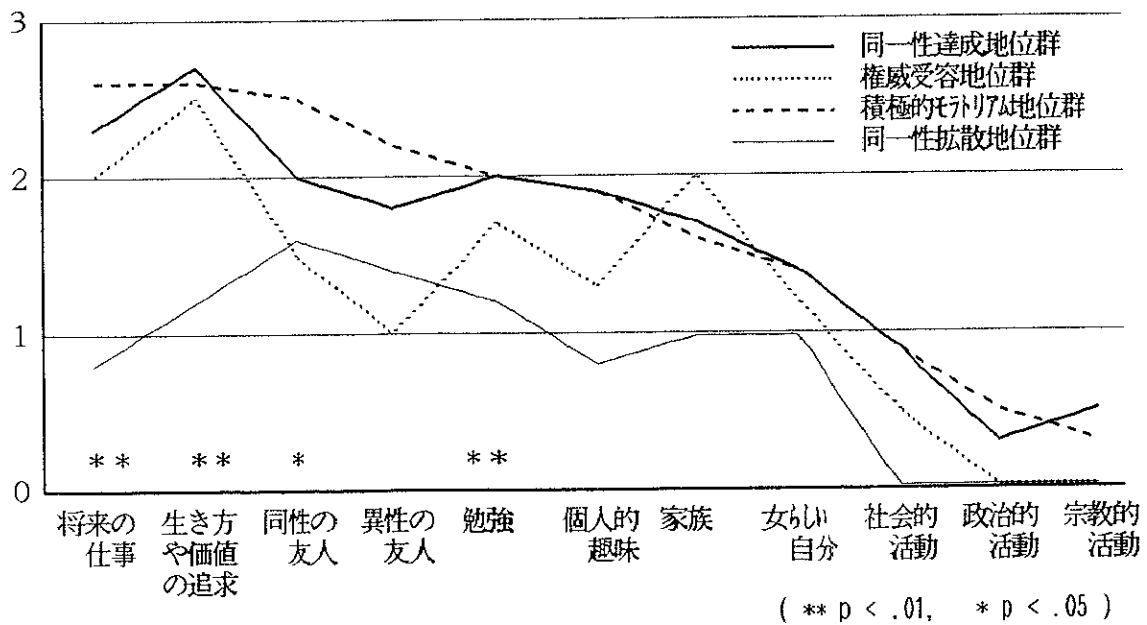


図 5-8 各典型同一性地位群における自己投入の水準（領域は平均値の高い順に並べ変えてある）

男子の各同一性地位群の特徴としては以下の諸点が指摘できよう。

- ① 同一性達成地位は、“将来の仕事”や“勉強”に関する探索・危機は4典型地位中では最も低い一方、“めざすべき生き方や価値”については最も高い関心を示している。同時に“望ましい生き方や価値の追求”にも最も強く自己投入しており、“安定”、“成熟”等に加えて“価値追求的”といった印象を与える。
- ② 権威受容地位は、“同性の友人との関係”、“男らしい生き方”、“家族との関係”等に関する探索・危機の低さが特徴的であり、その一方で“社会問題”や“政治的態度”に関する探索・危機の水準は高い。また、“将来の仕事”、“勉強”、“異性の友人との関係”、“個人的趣味”等の領域で高い自己投入を示しており、家族、友人といった身近な人間関係における安定性ならびにその興味・関心における現実主義を感じさせる。
- ③ 積極的モラトリウム地位は、“将来の仕事”について特徴的に高い探索・危機を示し、また“勉強”、“男らしい生き方”に関する探索・危機も高い。将来を模索している状況が反映されたプロフィールであるといえよう。自己投入については特に指摘すべき特徴は認められない。
- ④ 同一性拡散地位は、権威受容地位と対照的に“同性の友人との関係”と“家族との関係”に高い探索・危機を示しており、“生き方や価値”“将来の仕事”、“異性の友人”、“社会的活動”等への自己投入が顕著に低い。基本的な人間関係に不安定感があり、そのため消極的で不活発な行動パターンに陥っているという印象を受ける。

また、女子については以下の特徴が指摘できよう。

- ① 同一性達成地位は、“社会問題”に比較的高い関心を示す一方で、“女らしい生き方”に関する探索・危機の水準は低く、また“望ましい生き方や価値の追求”に強く自己投入している。また、“宗教”への関心と自己投入が他の地位と比較して高いのも特徴的である。

- ② 権威受容地位は、“将来の仕事”、“めざすべき生き方や価値”、“勉強”、“異性の友人との関係”、“家族との関係”、“趣味”等に関する探索・危機の低さが際立っている。また“家族との関係”への自己投入が特徴的に高く、他方“異性の友人との関係”への自己投入は顕著に低い。“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入の水準は比較的高いものの、意識の低さ・社会的未成熟さ等を感じさせるプロフィールである。
- ③ 積極的モラトリウム地位は、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機の高さが特徴的であり、同時に“将来の仕事”、“同性の友人との関係”、“異性の友人との関係”、“政治的活動”等への自己投入が最も高い等、権威受容地位とは対照的に、自覚的・積極的で意気軒昂な“青年らしい”印象を与えるプロフィールである。
- ④ 同一性拡散地位は“勉強”、“異性の友人との関係”に関する探索・危機が高く、“社会問題”、“政治的態度”等に関する探索・危機は極めて低い。自己投入についても“将来の仕事”、“生き方や価値”“社会的活動”等の多くの領域で顕著に低い水準を示しており、極めて不活発な印象を受ける。

以上が、探索・危機および自己投入のプロフィールを基準とした、各典型同一性地位の特徴、ならびに諸領域の重要性に関する知見である。同一性次元得点に関する前節の結果との差異は、前章でも論じた両概念の内容の相違の反映であると同時に、図 5- 5,6 と比較した図 5- 7,8 の多彩さにも示されているように、同一性地位概念のより分析的な性質にもよるものと考えられる。

6章

大学生における同一性次元の発達に関する縦断的検討 [研究3]

1節 問題と目的

前章では、高校2年生から20代後半にわたる同一性の発達的变化とそれに関連する諸領域の重要性等に関する検討が、かなり大きなサンプルを対象として、同一性次元・同一性地位の両側面から、横断的調査法を用いて試みられた。しかしながら、横断的データの分析によって得られた先の結果は、厳密には異年齢集団間の“差異”に過ぎず、発達のな“変化”を追跡的に実証したものとはいえない。

経時的な発達的变化を実証し、またその一環として同一性次元ならびに同一性地位の安定性や移行パターンの解明、得点の増減や地位の移行との対応関係を基準とした諸領域の重要性の検討等を行うためには、同一集団を対象として一定期間ごとに調査を繰り返し実施する追跡的縦断研究を行うことが必要である。

しかし、3章の4節で展望したように、青年期における同一性の発達過程を同一集団を対象とする追跡研究によって縦断的に検討した研究は、ケーススタディを除くと、同一性次元に関しては見当らず、同一性地位に関してもごく少ない。しかも、これらの研究は確かに縦断的測定を行ってはいるものの、追跡期間が短い、追跡期間の前後2回の測定のみで途中経過が不明である、対象が男性のみである、等の問題点を持っており、同一性発達の実証的・包括的な縦断研究とはみなしにくい。

そこで、研究2の結果から同一性発達の顕著な時期であることが示唆された大学入学から大学卒業にかけての期間について、比較的多数の男

女学生を対象として、同一性次元得点と同一性地位、ならびに諸領域における探索・危機と自己投入の水準を約半年ごとに繰り返し測定する縦断的調査を実施し、この時期における同一性の発達過程と関連要因およびそれらの性差等の解明を試みることにした。

本章〔研究3〕では、同一性次元の発達に関する縦断的検討の結果について論じ、同一性地位の発達については次章で研究4としてとりあげる。

2節 研究対象の設定と方法

1 対象者の設定、調査方法および調査の時期

縦断的調査は国立T大学の人間科学系学部には所属する学生を対象として実施した。同学部の①入学時には専攻が決定されておらず、2年生～3年生の段階で心理学、教育学、心身障害学のいずれかを選択するようカリキュラムが構成されている、②可能な専攻が文科系的な領域から理料系的な領域まで幅広い、③男女がほぼ同数所属している、等の特徴は、青年期後期における同一性の発達に関するより一般化しやすい結果を得るために望ましいものと考えられる。

具体的な調査実施の方法としては、長期間にわたる調査実施の困難さを軽減し、また縦断的研究においては避け難い所在不明・連絡不能等による対象者の減少を極力少なくすることを目的として、学年が異なる2コホートを対象として並行的に調査を実施し、両コホートが年齢的に重なる時点で主要な変数に関する両者の同質性を確認した上で全体的な発達に関する分析検討を試みる準縦断的研究法を用いることにした。

昭和59年度に国立T大学の人間科学系学部に入学者全員、125名を第1コホート、同年度の同学部3年次在学者中、心理学専攻者全員63名を第2コホートに設定した。これらの設定においては、多数回かつ長期間にわたる調査への協力の得られ易さが考慮された。

両コホートを対象として、昭和59年度と昭和60年度の6月および2月に表6-1に示した方法（授業中に実施、あるいは郵送法）を用いて、各コホート4回ずつ、計8回の調査を実施した。第1コホートに対しては3年次（昭和61年度）にさらに1回、第2コホートとの同質性の検討を目的とする調査を行った。全9回の調査の有効回収率の平均は66.8%であった。

2 測度等

研究1で作成した同一性次元尺度、同一性地位尺度、ならびに研究2でも使用した領域別探索・危機—自己投入質問紙（加藤、1983）を使用した。また調査間で個人データを対応づけるため、質問紙の最後の部分で回答者の学籍番号あるいは生年月日の記入を求めた。

3節 結果と考察

1 同一性次元得点の平均値の発達的变化

各調査時点における同一性次元得点の平均値は、表6-2および図6-1に示した通りであった。なお、性差はいずれの時点においても有意ではなかった。

同一性次元得点の全体平均値の各調査時点間での変化に注目すると、1年次から2年次にかけて（第1コホート）は $-0.2 \rightarrow +0.8 \rightarrow +0.9$ 、3年次から4年次にかけて（第2コホート）は $+1.6 \rightarrow +1.8 \rightarrow -1.4$ で

表 6- 1 縦断研究の調査対象者、方法、実施の時期および有効回答者数

[第1コホート： 大学1年次から3年次前半 125名]

性別	1年次 第1回 (1984.6)	1年次 第2回 (1985.2)	2年次 第1回 (1985.6)	2年次 第2回 (1986.2)	3年次 第1回 (1986.9)
男子	33人	22人	51人	15人	18人
女子	55人	53人	68人	36人	41人
有効総数	88人	75人	119人	51人	59人
有効回収%	70.4%	60.0%	95.2%	40.8%	47.2%
調査方法	授業中に 実施・回収	授業中に 実施・回収	授業中に配布 次週回収	授業中に配布 回収は郵送	配布・回収 とも郵送法

[第2コホート： 大学3年次から卒業まで 63名]

性別	3年次 第1回 (1984.6)	3年次 第2回 (1985.2)	4年次 第1回 (1985.6)	4年次 第2回 (1986.2)
男子	24人	12人	14人	20人
女子	35人	19人	28人	29人
有効総数	59人	31人	42人	49人
有効回収%	93.7%	49.2%	66.7%	77.8%
調査方法	授業中に 実施・回収	授業中に配布 次週回収	配布・回収 とも郵送法	配布・回収 とも郵送法

表 6-2 大学1年次から2年次、3年次から4年次にいたる
同一性次元得点の発達的变化

	コホート1 (N = 125)				コホート2 (N = 63)			
	1年次 6月 2月		2年次 6月 2月		3年次 6月 2月		4年次 6月 2月	
男性 [n]	[33]	[22]	[51]	[15]	[24]	[12]	[14]	[20]
平均値	8.2	5.2	7.4	9.4	7.1	9.3	11.2	10.5
(SD)	(10.8)	(8.1)	(9.7)	(12.6)	(12.0)	(7.9)	(11.0)	(11.2)
女性 [n]	[55]	[53]	[68]	[36]	[35]	[19]	[28]	[29]
平均値	6.3	7.5	7.9	8.3	9.2	10.4	12.0	10.4
(SD)	(9.4)	(9.4)	(8.9)	(8.4)	(8.8)	(9.9)	(8.2)	(10.6)
全体 [n]	[88]	[75]	[119]	[51]	[59]	[31]	[42]	[49]
平均値	7.1	6.9	7.7	8.6	8.4	10.0	11.8	10.4
(SD)	(10.0)	(9.0)	(9.3)	(9.7)	(10.2)	(9.0)	(9.1)	(10.7)

同一性次元得点

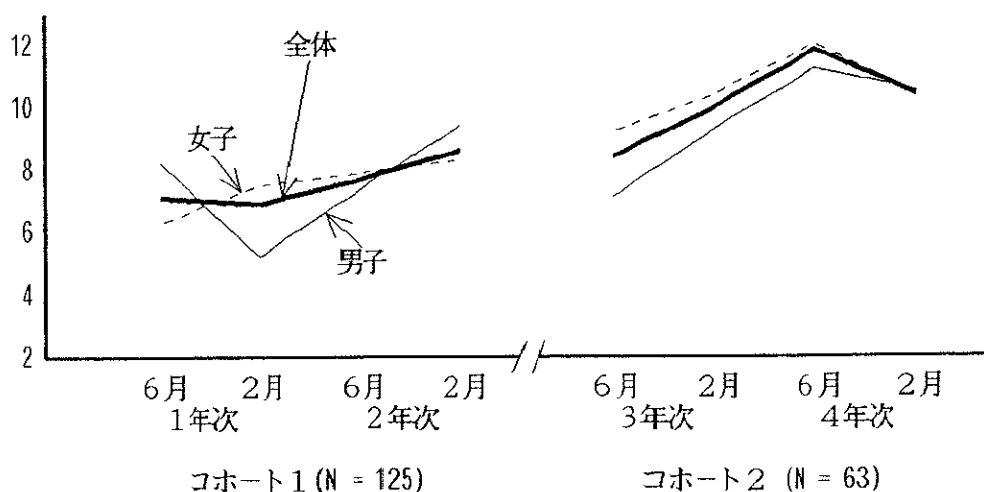


表 6-2 大学1年次から2年次、3年次から4年次にいたる
同一性次元得点の発達的变化

あった。したがって、全体的な同一性次元得点の平均値は、1年次には（女子の上昇傾向を相殺する男子の低下傾向の結果）ほぼ一定、その後2年次の後期にかけて男女ともに緩やかに上昇し、3年次から4年次前期にかけてやや顕著な上昇を示した後、卒業間際に低下する、という経過をたどって推移しているといえる。

この結果は各調査時点で得られた全有効回答の平均値であり、その値には回答率の変動による偏りが含まれていることも考えられる。そこで、その偏りを除去する一つの方法として、各4回の調査データが全て揃っている者のみについてその平均値の推移をみたところ、1年次から2年次にかけて（第1コホート、24名）は7.5→9.0→9.5→9.6、3年次から4年次にかけて（第2コホート、20名）は9.8→10.5→12.3→11.7であった。

これらの者は縦断調査に対して極めて協力的であったという意味で、一定の偏りを持つサンプルであるともいえるが、その平均値の推移は、
a. 値が全体的にやや高い、b. 1年次にもかなりの上昇が認められる、等の若干の相違はあるものの、

- ① 2年次前後での緩やかな上昇傾向、
- ② 3年次から4年次にかけてのかなり顕著な上昇傾向、および
- ③ 卒業間際の若干の低下傾向、

について、有効回答者全員における結果とほぼ同様のパターンを示している。

これらの結果は、多くの大学生にとって3年次から4年次にかけての時期が同一性の体験に関して重要な時期であることを示すものであり、前章の横断的研究によって示唆された大学生活の後半における同一性次元得点の上昇を縦断的にも実証している。

2 同一性次元得点に関する両コホートの同質性の検討

2コホートを用いた準縦断的方法によって得られた大学1～2年生および3～4年生の各2年間分のデータの分析結果から、大学1年次から4年次にかけての4年間にわたる同一性の発達について論ずるためには、その前提条件として、主要変数に関する両コホートの同質性を部分的にせよ確認しておくことが必要であろう。そこで、第1コホートに対して追加的に3年次に行った調査のデータを用いて、両コホートの同一性次元得点に関する同質性の検討を行った。同一学年（大学3年次）における両コホートの同一性次元得点の平均値と（標準偏差）は、第1コホートが 8.9 (9.0)、第2コホートが 8.4 (10.2) とほぼ等しく、両コホート間には有意な差は認められなかった ($t < 1.0$)。この結果は、これら2コホートのデータに基づいて、大学1年次から4年次にわたる同一性次元の発達の变化を検討することの妥当性を、部分的ではあるが支持するものである。

3 同一性次元得点の分布の発達の变化

同一性次元得点の発達の变化に関する先の分析によって、卒業間近に全体平均値が低下する傾向が示された。しかしながら、この低下が調査対象者全員における傾向か、あるいは一部の者における変化を反映したものかによって、その意味するところは異なると考えられる。

そこで、各学年における同一性次元得点の状態をより詳細に把握するために、まず1～2年次および3～4年次の各学年における同一性次元得点の分布を検討し、続いて特に4年次前期の分布と後期のそれとを比較検討することによって、その発達の变化をより詳細に検討することとした。

1～2年次および3～4年次の第1回調査の時点（6月）における同一性次元得点の分布は図 6-2 に示したとおりであった。なお、1～2年次および3年次については、各2回ずつ行った調査の中で第1回の回収率の方がより高く、1年次は約70%だが2年次と3年次のそれは90%を上回っている。また4年次については、第2回の回収率のほうが高いが、他の年次との比較上、この図については第1回の分布を示した。

図 6-2 に示したように、2年次6月の同一性次元得点の分布は1年次6月のそれとほぼ重なっており、発達的变化はほとんど認められない。しかし、3年次の6月になると分布の中心が7～13点の階級から14～20点の階級へとより高得点（同一性体験）方向に移動し、4年次の6月には21～27点の階級の割合も増加して、その傾向はより顕著となっていることがわかる。しかし、これらの時点における変化は分布の中心の移動であって、分布の形状自体は常に単峰型を呈している。

図 6-3 は、4年次前期（6月）の分布と後期（2月）の分布を図示したものである。4年次前期の分布および図 6-2 の各分布と比較して、4年次後期の分布はかなり異なったものとなっている。卒業間近の4年次2月の時点では、同一性次元得点の分布の中心の移動がさらに進行して顕著なピークが14～20点の階級に認められる一方、0～6点の中間層はむしろ少なく、-7～-1点の階級に小さな山が認められる双峰的な分布を呈している。

対象者が十分に多いとはいえないため過度の一般化は慎まねばならないが、この結果は大学生活の締め括りとしての卒業に臨み、青年たちの同一性体験の様相が、多数の“同一性体験者”と少数の“同一性混乱者”とにより顕著に分化する傾向を反映するものとも考えられよう。前者は

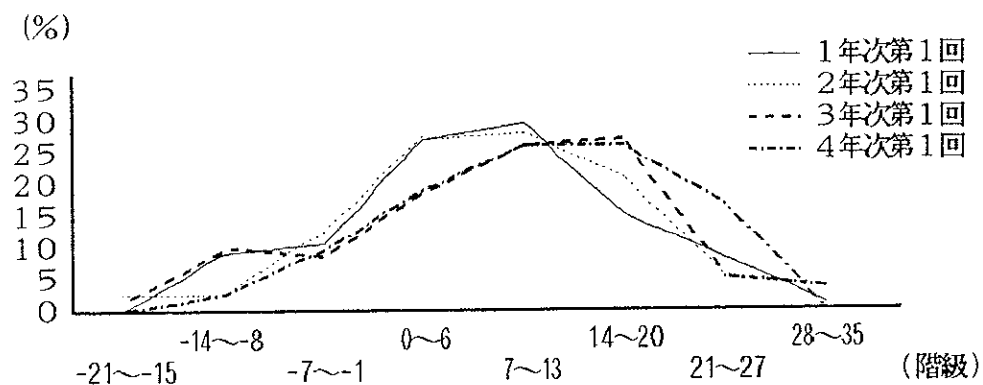


図 6-2 大学1年次から4年次にかけての同一性次元得点の分布の発達的变化

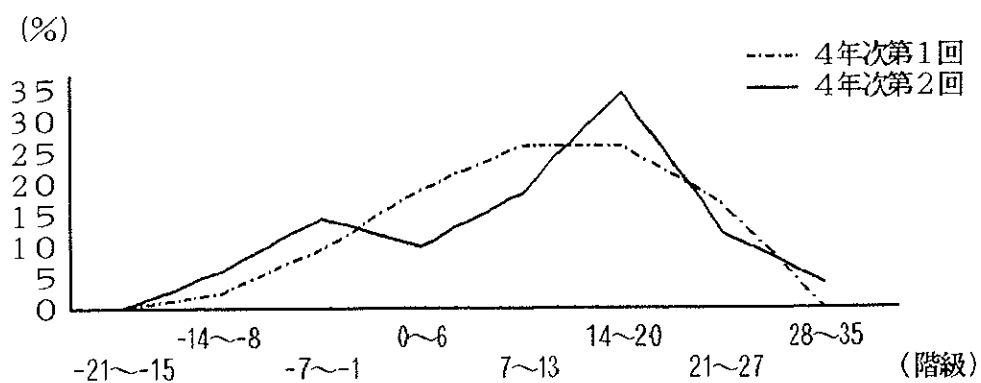


図 6-3 大学4年次の前期と後期における同一性次元得点の分布の変化

就職・進学等において希望により近い新たな進路を得、自らの大学生活における様々な体験を肯定的に受け取っている者たち、そして後者は卒業・就職等につまる様々な挫折・失敗を経験し、結果的に自らの大学生活を肯定的には受け取りえない状態にいる者たちであろうか。

いずれにせよ、この結果は、先の分析で示された卒業間近の同一性次元得点の低下傾向が、調査対象者全員における傾向ではなく、一部の者における変化の反映であることを示すものである。

4 同一性次元得点の発達の安定性

大学1年生から4年生にかけての時期における同一性次元得点の発達の安定性の検討を目的として、第1コホートにおける大学1年次第1回調査の同一性次元得点とその後の各調査の得点との相関係数、ならびに第2コホートにおける3年次第1回調査の得点とその後の各調査の得点との相関係数を、全体および男女別に求めた結果は表 6-3 に示したとおりであった。なお、相関係数の算出は各調査時点の対ごとに有効回答が得られた者について行ったため、その人数は対ごとに異なっている。また表 6-4 には、有効回答率の高低による変動を除外して同一性次元得点の安定性を検討することを目的として、全調査時点のデータが揃っている者のみにおける相関係数を示した。

まず表 6-3 の男女を併合した全体の値をみると、その相関係数の値は1年次から2年次にかけては .60～.75、3年次から4年次にかけては .58～.69であり、大学生の同一性次元得点は全体的にはかなり安定している一方、ある程度の変動がどの学年においても生じていることを示している。

表 6-3 1～2年次および3～4年次にかけての同一性次元得点の発達の安定性

相関係数 [人数]		1年次 第2回	2年次 第1回	2年次 第2回			3年次 第2回	4年次 第1回	4年次 第2回
1年次 第1回	男子	.58 [17]	.79 [28]	.90 [11]	3年次 第1回	男子	.68 [10]	.86 [13]	.75 [19]
	女子	.60 [45]	.72 [54]	.66 [26]		女子	.63 [17]	.53 [26]	.62 [27]
	全体	.60 [62]	.74 [82]	.75 [37]		全体	.58 [27]	.69 [39]	.64 [46]

表 6-4 1～2年次および3～4年次にかけての同一性次元得点の発達の安定性
(全てのデータが揃っている者のみにおける)

相関係数		1年次 第2回	2年次 第1回	2年次 第2回			3年次 第2回	4年次 第1回	4年次 第2回
1年次 第1回	男子 [n=5]	.88	.87	.97	3年次 第1回	男子 [n=7]	.86	.94	.90
	女子 [n=19]	.67	.72	.64		女子 [n=13]	.62	.57	.50
	全体 [n=24]	.71	.75	.70		全体 [n=20]	.63	.78	.71

男女各々の相関係数をみると、女子の値は低い方から順に .53, .60, .62, .63, .66, .72 とその中央値が .6 台前半であるのに対し、男子の値は .58, .68, .75, .79, .86, .90 とその中央値は .7 台の後半となっている。男子の有効回答率が女子のそれを下回っていることによる偏りの存在も否定し難いが、表 6-4 に示したように全調査データが揃っている者においても同様の結果が得られている。したがって、この結果は大学生男子の同一性次元得点の安定性は比較的高く、女子の同一性次元得点はより変動しやすいという傾向を示唆するものといえよう。

5 同一性次元の変動に関連する探索・危機および自己投入の領域領域を特定しない同一性次元得点の上昇あるいは低下にともなって、ある特定の・具体的な領域における探索・危機あるいは自己投入の水準に有意な変化が認められるなら、その領域は全体的な同一性体験にとってより大きな重要性を持つ領域であると考えられよう。

他方、全体的にみた平均的発達傾向としては大学3～4年次において同一性次元得点に比較的に顕著な上昇傾向が認められるものの、上の相関分析によって示されているように、個人のレベルにおいては大学1年次から4年次のどの段階においても同一性次元得点には一定の変動が認められる。したがって、特定の調査対のみを特に顕著な発達的变化の時期として取り上げることは事実上困難であると同時に、分析対象がより限定されてしまうという意味でも望ましくない。

そこで、ある特定の調査時点の対に注目するかわりに、両コホートの全有効データのうち“個人内で1インターバルをはさんで連続して有効回答が得られた2調査時点の対”の全てをそれぞれ独立の分析単位とし、その前後での同一性次元得点と諸領域における探索・危機および自己投

入の変化に注目した分析を試みることにした。具体的には、例えばある調査対象者における4回の縦断調査のデータが順に有効、無効、有効、有効であったなら、3回目と4回目の調査対のみが分析単位として得られるわけである。

両コホートから得られた総計 273 (男子82、女子 191) の分析単位の全体における同一性次元得点の変動の分布は最大値 +28、最小値 -17、平均値 + 0.49、標準偏差 6.83 であった。

大学1年次から4年次にかけての同一性次元得点全体平均値の変遷における最低値が 6.9 (1年次2月)、最高値が 11.8 (4年次6月) でその差が約5点であることを考慮して、上の全 273分析単位中、同一性次元得点に5点以上の上昇が認められた場合を“上昇区間”、5点以上の低下が認められた場合を“低下区間”として、“上昇区間”群と“低下区間”群との間で、諸領域における探索・危機および自己投入の水準のインターバル前後の変化を男女各々について比較した結果は表 6-5 に示したとおりであった。

男子では“めざすべき生き方や価値”と“異性の友人との関係”に関する探索・危機に1%水準、“同性の友人との関係”と“勉強”に関する探索・危機に5%水準の有意差が認められ、“将来の仕事”に関する探索・危機にも有意に近い差が認められた。

女子では“勉強”と“将来の仕事”に関する探索・危機に1%水準、“同性の友人との関係”と“自分にふさわしい趣味”に関する探索・危機に5%水準の有意差が認められた。

これらの領域における探索・危機の水準の変動と同一性次元得点の変化とは一貫して負に対応しており、上記の諸領域における探索・危機の

表 6-5 同一性次元得点の5点以上の上昇あるいは低下にともなう

諸領域における探索・危機および自己投入の変動

探索・危機	男 子		女 子	
	上昇区間 (n= 22)	低下区間 (n= 20)	上昇区間 (n= 45)	低下区間 (n= 43)
自分と家族との関係	.05	-.20	.00	.09
同性の友人との関係	-.45	.30 *	-.38	.14 *
異性の友人との関係	-.36	.35 **	-.09	.23
男(女)らしい生き方	.00	.25	.13	.09
勉強	-.36	.30 *	-.36	.40 **
将来の仕事	-.50	.15 p < .07	-.22	.47 **
自分にふさわしい趣味	-.18	.15	-.04	.44 *
政治に対する自分の態度	-.05	.25	.07	-.19
社会問題に対する自分の態度	-.05	.25	.11	-.16
宗教に対する自分の態度	-.14	.20	.11	.07
自分かめざすべき生き方や価値	-.45	.30 **	.13	.33
自己投入				
自分と家族との関係	-.05	.40	.11	-.14
同性の友人との関係	-.05	.35	-.07	.00
異性の友人との関係	.27	.30	.04	.05
男(女)らしい自分	.23	.25	.07	-.09
勉強	-.05	.15	.02	.00
将来の仕事	-.23	.05	.13	.05
個人的趣味	-.32	-.15	.31	.00
政治的活動	-.18	.10	-.02	-.07
社会的活動	-.09	.50 *	-.02	-.19
宗教的活動	-.05	.20	.02	-.07
望ましい生き方や価値の追求	-.14	.35 p < .09	.04	-.02

* p < .05 ** p < .01

高まりが同一性次元得点の低下と、また探索・危機の低下・解消が同一性次元得点の上昇と関連していることを示している。

自己投入については、男子において“社会的活動”への自己投入の高まりが同一性次元得点の低下と有意に対応している点を除いて、明確な対応関係は認められなかった。

これらの結果は、数ヶ月という比較的短いインターバルの前後での同一性次元得点の変動が、男子大学生においては“めざすべき生き方や価値”と“異性の友人との関係”、女子大学生においては“将来の仕事”と“勉強”といった、一方では抽象的・理念的な将来の方向づけに関する問題（“めざすべき生き方や価値”および“将来の仕事”）、そして他方ではごく身近な諸問題（“異性の友人との関係”および“勉強”）に関する探索・危機の水準と密接に関連していることを示すものである。

5章では、同一性次元得点の水準の高中低3群間での比較が行われ、男子では“将来の仕事”や“家族との関係”への自己投入、“政治的態度”に関する探索・危機等が、また女子では“女らしい生き方”に関する探索・危機や“将来の仕事”、“勉強”、“宗教的活動”への自己投入等について群間に有意な差が認められたが、これらの結果と本分析における上記の結果とは必ずしも一致していない。

これは、5章における結果が長期間にわたる同一性形成過程の帰結と考えられる“比較的固定的な個人差”としての同一性次元得点の高低にともなう諸領域における探索・危機あるいは自己投入のプロフィールの特徴を明らかにしたものであるの対し、本分析が比較的短いインターバルの前後での同一性次元得点の変動にともなう諸領域における探索・危機あるいは自己投入の“個人内の変化”を検討したものであることによる

と考えられる。

いずれにせよ、反復測定を行った縦断的データの分析から、同一性次元得点の比較的短期的な変化と特定領域における探索・危機の水準の変動とが負に対応すること、ならびにその関連要因には性差が認められること等が、実証的に明らかにされた点は本研究の成果である。

しかしながら、同一性次元得点の水準の変化と諸領域における“自己投入”の水準との間に明瞭な対応関係をみいだすことができなかった点については、今後さらに検討を続ける必要があると思われる。また、上に述べたように、短期的変動と長期的に形成される個人差とは確かに相異なる概念ではあろうが、実際には前者すなわち短期的変動の反復・蓄積によって、あるいは前者が引き起こした変化がその他の媒介変数を経ることによって、後者すなわちより個人差的な“差異”が形成されるということも十分に考えられる。したがって、本分析によって示唆された同一性次元得点の短期的変動に関連する要因等についてさらに検討を進めるとともに、短期的な変動がより安定的な個人差へと固定化して行く過程についても検討を試みるのが今後の課題であると思われる。

7章

大学生における同一性地位の発達に関する縦断的検討〔研究4〕

1節 問題と目的

同一性地位アプローチの理論的立場から青年期、特にその後期における同一性発達を考えると、成人期への移行の必要性に直面することによって、未分化な“D-M中間地位”、不活発な“同一性拡散地位”等からより自覚的な“積極的モラトリアム地位”を経て“同一性達成地位”にいたる移行が、多くの青年に認められることが期待される。

青年期における同一性地位の発達に関する上の仮説は、3章で展望したように横断的方法を用いたいくつかの研究によって支持されている。また、本論文の5章においても、横断的方法をもちいて、普通高校2年生の群と比較して、社会人への移行に直面しあるいはそれを経験した大学4年生および大学卒業後1年目の群においてはD-M中間地位の占める割合はより小さく、対照的に同一性達成地位およびA-F中間地位の割合がより大きくなっていることが明らかにされた。

しかしながら、6章でも指摘したようにこれらの結果は厳密には異年齢集団間の差異に過ぎず、発達的な“変化”の過程を実証したものではない。また、青年期における同一性地位の発達過程を縦断的に検討した従来の諸研究における問題点（カバーする期間の狭さ、中間的測定の欠如、性別上の偏り、関連要因の検討の欠如等）は3章で述べたとおりである。

そこで本研究では、比較的多数の男女学生を対象として、大学入学から大学卒業にわたる期間について約半年ごとにその同一性地位ならびに

諸領域における探索・危機および自己投入の水準の縦断的測定を行い、それらの分析を通して大学生における各同一性地位の比率の発達的变化、諸同一性地位の安定性および地位間の移行パターン、地位の移行に関連する要因およびその性差等の検討を試みることにした。

2節 方法

1 対象者、調査方法、測度等

研究対象および調査方法等は6章のそれと同一である。同一性地位の測定には、研究1で作成した同一性地位判定尺度（加藤、1983）を用いた。この尺度は“現在の自己投入”、“過去の探索・危機”、“将来の自己投入の希求”の3下位尺度によって以下の6地位を定義するものである。

- ①高い水準の探索・危機を経て現在自己投入している“同一性達成地位”
- ②中程度の探索・危機を経て現在自己投入している“A-F中間地位”
- ③現在自己投入しているが探索・危機を経験していない“権威受容地位”
- ④現在の自己投入の水準は高くないが、将来の自己投入を強く求めている“積極的モラトリアム地位”
- ⑤現在の自己投入、将来の自己投入の希求とも中程度の“D-M中間地位”
- ⑥現在自己投入しておらず、かつ将来の自己投入の希求も弱い“同一性拡散地位”

具体的な諸領域における探索・危機（考え迷っている状態）と自己投入（生きがいとし努力している状態）の水準については、表5-2に示した領域別探索・危機-自己投入質問紙（加藤、1983）を使用した。また調査間で個人データの対応づけを行うため、質問紙の最後の部分で回答者の学籍番号あるいは生年月日の記入を求めた。

3節 結果と考察

1 同一性地位の分布の発達的变化

各調査時点における同一性次元地位の分布は図 7-1 に示した通りであった。いずれの時点においても地位の分布には有意な性差は認められなかったため、男女を併合した全体の推移が示されている。なお、A-F 中間地位は、中程度の“過去の探索・危機”を経て“自己投入”するにいたっている者であり、探索・危機を経て自己投入を行っているという意味で同一性達成地位とほぼ同様のカテゴリーとみなし得る。そこで、本章の分析では、A-F 中間は同一性達成地位に併合して扱うこととした。

図 7-1 に示したように、大学1 年次前期から4 年次後期にかけての4 年間における各同一性地位の比率の変遷には、かなりきれいな連続性が認められる。

大学2 年次前期から4 年次前期にかけて、未分化・無自覚的な D-M 中間地位 (□) は一貫して減少し、他方、主体的な選択を経て現在なんらかの目標に努力を傾注している同一性達成地位および A-F 中間地位 (○) は1 年次後期から3 年次後期にかけて対照的な増加を示している。

積極的モラトリアム地位 (☆) は1 年次においては20%近くの比率を占め、その後若干減少するが3~4 年次においても10数%を占めている。

不活発な同一性拡散地位は1~2 年次には10%弱認められるが3~4 年次にはより少なくなっている。権威受容地位はいずれの学年においてもごく少なく、発達的な変化も認められない。

これらの結果は、5 章で横断的なデータを用いて示唆された全体的な発達傾向によく一致するとともに、測定対象が異なっていたために生じたと考えられる図 5-3 の大学2~3 年次にかけての不規則的な凸凹等

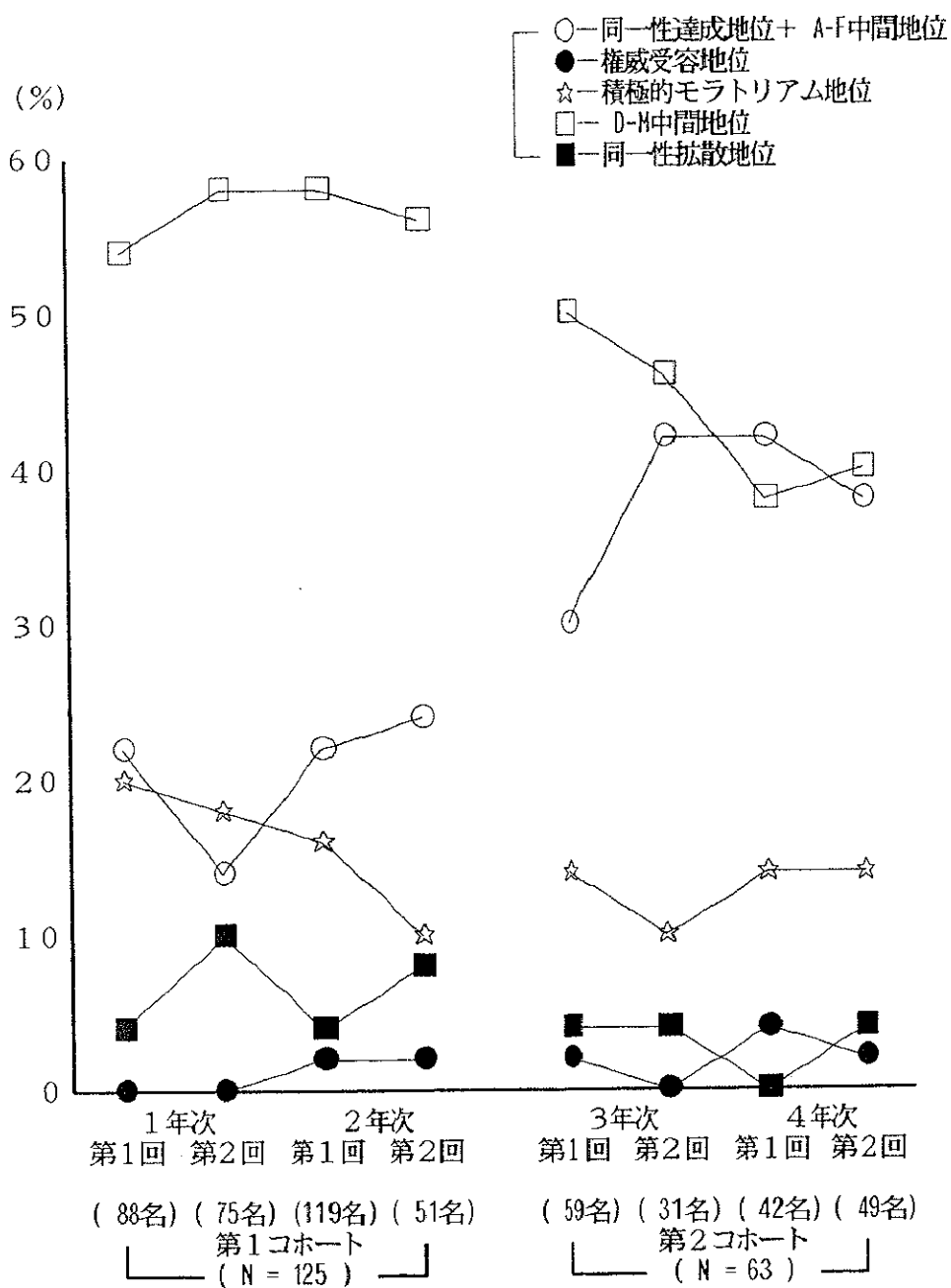


図 7-1 大学1年次から大学4年次にかけての同一性地位の分布の発達の变化

のない、より一貫した傾向を示すものとなっている。

以上の結果から、大学在学期の同一性地位の発達における主要な特徴として、以下の2点が指摘できよう。

- ①大学1年次には、未分化な D-M中間地位が6割近くを占め、不活発な同一性拡散地位も比較的多いが、その一方で将来の自己投入を探し求める積極的モラトリウム地位も2割弱と比較的多く認められる。
- ②2年次から4年次前期にかけて、探索・危機を経て自己投入の対象をみいだした同一性達成地位（A-F中間地位を含む）の占める比率は2割程度から4割程度にまで増加し、対照的に D-M中間地位の比率は6割近くから4割弱にまで減少する。

2 同一性地位に関する両コホートの同質性の検討

2コホートを用いた準縦断的方法によって得られた大学1～2年生および3～4年生の各2年間分のデータの分析結果から、大学1年次から4年次にかけての4年間にわたる同一性地位の発達について論ずるためには、その前提条件として、主要変数である同一性地位に関する両コホートの同質性を、部分的にせよ確認しておくことが必要であろう。そこで、第1コホートに対して追加的に3年次に行った調査のデータを用いて、両コホートの同一性地位に関する同質性の検討を行った。

大学3年次における両コホートの同一性地位の分布は表7-1に示した通りであった。同一学部の2年上級生にあたる第2コホートと比較して、第1コホートには、同一性達成地位が約10%少ない、積極的モラトリウム地位が約10%多い、同一性拡散地位も数%多い等、若干未成熟と考えられる特徴が認められる。しかしながら、両群における同一性地位の分布の差は、統計的には有意なものではなかった（修正 $\chi^2=4.4$ 、 $df=5$ 、 $p>.40$ ）。また先に図7-1に示したように、4年間にわたる同一性地位の分布の変遷の全体的な傾向をみると、両コホートにおける

表 7- 1 3年次における両コホートの同一性地位の分布

同一性地位	第1コホート 第5回調査 (1986.9)	第2コホート 第1回調査 (1984.6)
	人数 (%)	人数 (%)
同一性達成	7 (11. 9)	13 (22. 0)
A－F中間	5 (8. 5)	5 (8. 5)
権威受容	2 (3. 4)	1 (1. 7)
積極的モラトリアム	15 (25. 4)	8 (13. 6)
D－M中間	24 (40. 6)	30 (50. 8)
同一性拡散	6 (10. 2)	2 (3. 4)
合 計 人数 (%)	59 (100.0)	59 (100.0)

(修正 $\chi^2 = 4.4$, $df = 5$, $p > .40$)

各地位の分布の変遷には、かなりきれいな連続性が認められる。これらの結果は、両コホートのデータに基づいて、大学1年次から4年次にわたる同一性地位の発達的变化を検討することの妥当性を、部分的ではあるが支持するものといえよう。

3 同一性地位の安定性と移行傾向

特定個人を対象として繰返し測定を行った縦断的データを用いることによって、一定期間の前後での各個人の同一性地位を対照し、その移行の有無、ならびに移行があった場合についてはその移行先の確認を行うことが可能である。そして、他の同一性地位に移行する比率の高い地位はその発達の安定性が低く、他の地位への移行の比率が低い同一性地位は発達により安定した同一性地位であるといことができる。

同一性地位理論の枠組みから、各同一性地位の安定性ならびにその発達の移行の傾向について以下の予想が成り立つ。

- ①最も発達した地位である同一性達成、ならびに中間的でありまた全体に占める比率の高い D-M 中間の両地位の発達の安定性は高いであろう。
- ②過渡的でありまた心理的な緊張度の高い状態と考えられる積極的モラトリウム地位の発達の安定性は低いであろう。
- ③積極的モラトリウム地位からは、かなり高い比率で同一性達成地位への移行が認められるであろう。

そこで、まず大学在学期全体における各同一性地位の安定性、ならびに他の同一性地位への移行傾向の特徴を検討することを目的として、6章と同様に両コホートで1インターバルをはさんで連続してデータが得られた2調査時点の対(計 273)を1つの分析単位として、その前後での同一性地位の対照を行った。

表 7- 2 に示したように、表の対角線上のセルの比率（行％）によって示される発達の安定性については D-M中間地位が最も高く（74.8％）、同一性達成地位（ A-F中間地位を含む）がそれに続いており（54.2％）、予想に一致する結果が得られている。

同一性拡散地位と並んで最も安定性が低いという点では予想通りであった積極的モラトリアム地位であるが、その移行先をみると期待した同一性達成地位（ A-F中間地位を含む）への移行は22.7％と比較的少数であり、将来の自己投入の希求を一時的にせよ棚上げして、未分化な D-M中間地位へと“退行的”に移行する者が45.5％と同一性達成地位への移行の2倍も認められる。

その他の移行傾向については、権威受容地位から同一性達成地位への移行が66.7％、同一性拡散地位から D-M中間地位への移行が63.6％とかなり高い値を示している点が注目される。

権威受容地位から同一性達成地位への移行はその分析単位の総数が3に過ぎないため一般化可能な結果とはいいいくいが、大学生活の中で多様な友人等との交流を経験し、また自由な生活を体験することによって、それまで探索・危機を経験しないまま自己投入してきた権威受容地位の青年が、より意識的・主体的な選択を行って同一性達成地位へと移行していく、という経過は想像に難くないものではある。

また、同一性拡散地位から D-M中間地位への移行については、積極的モラトリアム地位に移行した1名も含めると、インターバル前に同一性拡散地位であった者の7割以上がインターバル後にはその他の同一性地位に移行しており、大学生における同一性拡散地位は多くの場合一過的なものであることが示されている。

表 7-2 1インターバルをはさんで連続する2調査時点間での
各同一性地位の安定性と移行傾向

行% (人数)	同一性地位	インターバル 後					計
		同一性 達成	権威 受容	積極的 モットー	D-M 中間	同一性 拡散	
イ ン タ ー バ ル 前	同一性達成	54.2 (39)	2.8 (2)	16.7 (12)	26.4 (19)	0.0 (0)	100.0 (72)
	権威受容	66.7 (2)	33.3 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (3)
	積極的モットー	22.7 (10)	0.0 (0)	27.3 (12)	45.5 (20)	4.5 (2)	100.0 (44)
	D-M中間	12.6 (18)	1.4 (2)	7.0 (10)	74.8 (107)	4.2 (6)	100.0 (143)
	同一性拡散	0.0 (0)	0.0 (0)	9.1 (1)	63.6 (7)	27.3 (3)	100.0 (11)
計		(69)	(5)	(35)	(153)	(11)	(273)

これらの結果は、大学在学期における同一性地位の安定性および移行傾向に関して、以下の特徴を示唆するものといえよう。

- ①この時期、同一性達成地位の安定性はかなり高いものの、必ずしも確定的ではなく、いったん獲得した自己投入の対象を喪失する者（D-M中間への移行：約 1/4）や新たな探索・危機に直面する者（積極的モラトリウムへの移行：約 1/6）も少なくない。
- ②積極的モラトリウム地位から同一性達成地位への移行は決して容易なものではなく、自己投入の対象を見出しえないまま思考や探索をあきらめてしまう者も多い（D-M中間への移行：約半数）。
- ③この時期の同一性拡散状態はその多くが一過性であり、一定期間の後には中程度の自己投入を回復し（D-M中間への移行：約60%）、あるいは積極的主体的な思考・探索を始めること（積極的モラトリウムへの移行：約10%）が期待できる。

なお、件数的には少ないものの、273例中2例観察された同一性達成地位から権威受容地位への移行は理論的に興味深いものである。

各同一性地位の定義を厳密に当てはめるなら、“探索・危機を経て自己投入するに至った”同一性達成の状態から“探索・危機を経ること無く自己投入を行っている”権威受容の状態に移行することは本来ありえないと考えられるが、同様の例は Marcia (1976) の縦断的研究においてもみいだされている。

この結果は以下のように解釈するのが妥当ではないであろうか。

そもそも、個人の自己評価は時間的に不変のものではなく、さまざまな要因によって変動しうる。そして、本研究における同一性地位の3判定要因の1つである“過去の探索・危機”の重大性の自己評価は、

- ①各個人が調査時点で直面している“探索・危機”との相対的比較、
- ②“過去の探索・危機”それ自体の忘却、

等の要因によって変化しうると考えられる。したがって、ある時点において“探索・危機を経て自己投入している”と自己評価した個人が、その後“過去の探索・危機”を忘却し、あるいは“探索・危機”であったとはみなさなくなり、かつ自己投入は行っている場合には、その個人は権威受容地位に分類されることになる。

5章で論じた横断研究においても、表 5-3 および図 5-3 に示したように、大学入試を経験した直後の大学1年生においては権威受容地位は 2.2% しか認められないのに対し、その後大学2～4年生 3.4～5.5% と若干の増加傾向を示し、また卒業・就職等の試練を経た“卒業後1年目”の権威受容地位の比率が 0% であるのに対し、“卒業後6年目”には再び 4.9% となっている。これらの変動も、上述の解釈を間接的に支持するものといえよう。

このような“自己評価の主観性”は“過去の探索・危機”のみならず、“現在の自己投入”、“将来の自己投入の希求”にもあてはまる。したがって、権威受容地位に限らず、他の全ての同一性地位も、固定的な類型としてではなく、過去から将来にわたるさまざまな経験と期待の連続の中での“個人の現状についての各個人による主観的位置づけ”に関するより流動的な概念として理解するほうが妥当であると思われる。

4 大学在学期の前半と後半における同一性地位の移行傾向の差異

大学在学期全体における同一性地位の安定性および移行傾向の特徴は上に述べたとおりであったが、受験勉強や両親等の制約からの解放感が支配的と考えられる大学1～2年の時期と社会人への移行の圧力が次第に強まる3～4年の時期とでは、各同一性地位の安定性および移行傾向の特徴にもなんらかの差異があることが予想される。そこで、1～4年

次にわたる計 273 の分析単位を、大学 1～2 年次におけるものと 3～4 年次におけるものに区分して示したのが表 7-3 である。

全体的傾向は表 7-2 に示された結果とほぼ同様であるが、積極的モラトリウム地位と D-M 中間地位の移行傾向に差異が認められる。大学 1～2 年次においては、インターバル前に積極的モラトリウムであった者 33 例中の 16 例 (48.5%) がインターバル後には D-M 中間地位へと“退行的”に移行しており、他方同一性達成地位へと“進展的”に移行する者は 6 例 (18.2%) に過ぎないのに対し、3～4 年次においては D-M 中間地位への移行と同一性達成地位への移行が同数 (ともに 11 例中 4 例、36.4%) 認められる。この結果は、在学期後半における積極的モラトリウム地位は前半のそれと比較してより切実さの度合いが高いものであることを示すものといえよう。また 1～2 年次にはインターバル前に D-M 中間地位であった者 104 例中の 81 例 (77.9%) がインターバル後も D-M 中間地位に留まっており、同一性達成地位に移行する者は 6 例 (5.8%) しか認められないのに対し、3～4 年次においては D-M 中間地位に留まる者は 39 例中の 26 例 (66.7%) とより少なく、対照的に同一性達成地位へと“進展的”に移行する者は 39 例中 12 例 (30.8%) と顕著に高くなっている。この結果も、大学在学期後半における同様の“切実さ”を D-M 中間地位に関しても示すものといえよう。

表 7-3 大学在学期の前半および後半における各同一性地位の移行頻度

大学在学期前半（1年次～2年次）

		インターバル 後					
行% (人数)		同一性 達成	権威 受容	積極的 モトリウム	D-H 中間	同一性 拡散	計
イン ター バル 前	同一性達成	51.4 (19)	2.7 (1)	16.2 (6)	29.7 (11)	0.0 (0)	100.0 (37)
	権威受容	100.0 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (1)
	積極的モトリウム	18.2 (6)	0.0 (0)	30.3 (10)	48.5 (16)	3.0 (1)	100.0 (33)
	D-H中間	5.8 (6)	1.9 (2)	8.7 (9)	77.9 (81)	5.8 (6)	100.0 (104)
	同一性拡散	0.0 (0)	0.0 (0)	10.0 (1)	60.0 (6)	30.0 (3)	100.0 (10)
	計	(32)	(3)	(26)	(114)	(10)	(185)

大学在学期前半（3年次～4年次）

インターバル 後							
	行% (人数)	同一性 達成	権威 受容	積極的 モトリウム	D-H 中間	同一性 拡散	計
イン ター バル 前	同一性達成	57.1 (20)	2.9 (1)	17.1 (6)	22.9 (8)	0.0 (0)	100.0 (35)
	権威受容	50.0 (1)	50.0 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (2)
	積極的モトリウム	36.4 (4)	0.0 (0)	18.2 (2)	36.4 (4)	9.1 (1)	100.0 (11)
	D-H中間	30.8 (12)	0.0 (0)	2.6 (1)	66.7 (26)	0.0 (0)	100.0 (39)
	同一性拡散	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (1)	0.0 (0)	100.0 (1)
	計	(37)	(2)	(9)	(39)	(1)	(88)

5 同一性地位の発達の遷移パターン

大学在学期の前半と後半で、同一性地位間の移行傾向に差異が認められるという上の結果は、大学在学期の各時期・学年に同一性地位の発達に関する特徴的な移行パターンが存在することを期待させるものである。

Waterman (1982)は同一性地位の発達に関する経路モデル(図7-2)を提唱しているが、これは理論的に可能な全ての経路を示した概念的図式であって、各経路の頻度等に関する実証的な検討はなされていない。

そこで、回収率の変動による偏りを排除して各時点における移行の頻度パターンをより正確に検討することを目的として、大学1年次から3年次にわたる計5回、および大学3年次から4年次にかけての計4回の全データが揃っている者(第1コホート24名、第2コホート20名)について、各調査時点間ごとに同一性地位の遷移のパターンの集計を行ったところ、その結果は図7-3に示した通りであった。なお、権威受容地位は他の地位との間の移行がいずれの調査時点間においても2に満たないため、また同一性拡散地位は第2コホートで全データが揃っている者においては全く認められなかったため、図から省略されている。

各同一性地位の配置は、理論上最も成熟した状態と考えられる同一性達成地位を上置き、それへの移行状態と考えられる積極的モラトリアム地位をその下、中間的・無特徴的なD-H中間地位をその下、そして最も不活発な同一性拡散地位を最も下とした。したがって、斜め上向きの矢印は進展的な移行であり、斜め下向きの矢印は退行的な移行と見なすことができる。また図中にも示したように、移行の頻度については1人以下は省略し、2～3人、4～5人、6人以上の3階級に集約して矢印の太さで示した。

A : 同一性達成地位
 M : 積極的モラトリアム地位
 F : 権威受容地位
 D : 同一性拡散地位

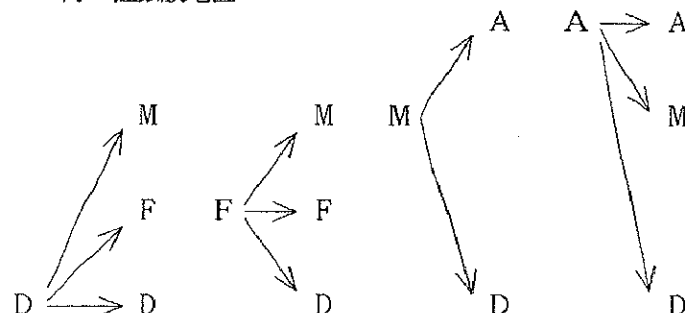


図 7-2 同一性地位の発達の連続的パターンモデル (Waterman, 1982 p.343より)

A : 同一性達成および A-F中間地位
 M : 積極的モラトリアム地位
 DM : D-M中間地位
 D : 同一性拡散地位

→ 6 ≤ 度数
 → 4 ≤ 度数 ≤ 5
 → 2 ≤ 度数 ≤ 3

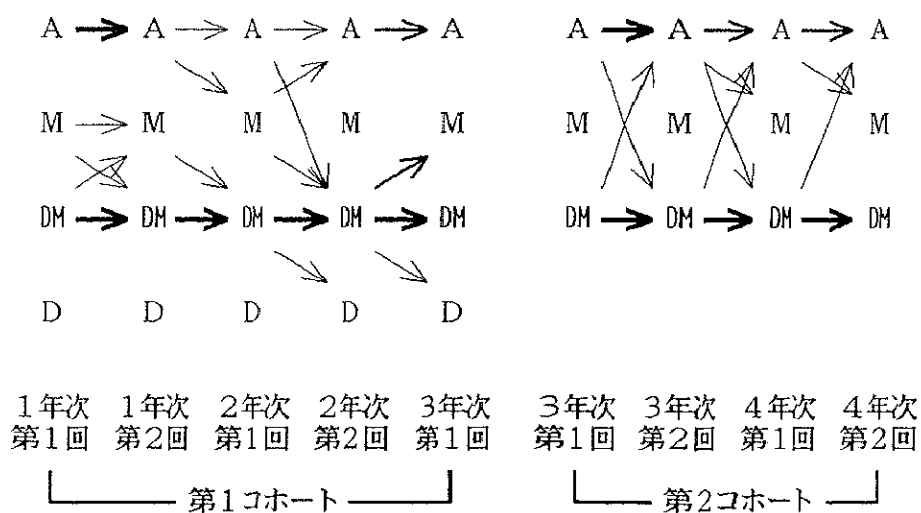


図 7-3 大学1年から4年にかけての各同一性地位間の移行の頻度パターン

右向き水平の矢印は同じ同一性地位に留まった者を示すが、D-M中間地位はその絶対数の多さもあっていずれの時期においても一貫して多くの者が所属し、安定的に推移している。また、同一性達成地位についても1年次の前期から後期、2年次後期から3年次前期、および3年次以降については比較的安定的に推移していることが示されている。

各時期・学年における同一性地位間の移行に注目すると、1年次前期から2年次後期にかけては、同一性達成地位から積極的モラトリウム地位やD-M中間地位へ、積極的モラトリウム地位からD-M中間地位へ、そしてD-M中間地位から同一性拡散地位へといった、右下方向への“退行的”な移行が比較的顕著に認められ、対照的に右上方向への“進展的”な移行は散発的にしか認められない。しかし、2年次後期から3年次にかけてD-M中間地位から積極的モラトリウム地位へのかなりまとまった移行が認められ、さらにその後3年次から4年次にかけてはD-M中間地位から同一性達成地位への移行が、逆向きの、あるいは同一性達成地位から積極的モラトリウム地位への移行と交錯しながらも、一貫して認められるようになっている。

図7-3に示された移行の頻度パターンから、同一性地位の発達的変遷に関する大学在学中の4年間の特徴として、以下の諸点を指摘することができよう。

- ①大学1年次にはD-M中間地位、同一性達成地位等に留まる者が多く、また積極的モラトリウム地位に留まる者もこの時期のみ一定数認められる。顕著な移行傾向の認められないいわば“嵐の前”の時期である。
- ②1年次の後期から2年次の後期にかけては、積極的モラトリウム地位からD-M中間地位へ、同一性達成地位から積極的モラトリウム地位や

D-M中間地位へ、D-M中間地位から同一性拡散地位へといった“退行的”移行が比較的多く認められる。一時的な弛緩の時期のようである。

- ③ 2年次後期から3年次前期にかけて、同一性拡散地位への退行的移行もあるものの、D-M中間地位から積極的モラトリウム地位へのかなりまとまった移行が始まる。年齢的にも成人に達し、また大学生活の折り返し地点を過ぎた、等の自覚に基づく積極化・転換の時期であるようにみえる。
- ④ 2年次後期以降、4年次後期まで、同一性達成地位は比較的安定的に推移するようになる。明確な自己投入の対象をみいだしたゴーイング・マイウェイの青年が一定数を占めるようになることの現れであろう。
- ⑤ 3年次前期から4年次前期にかけては、D-M中間地位から同一性達成地位への移行と同一性達成地位からD-M中間地位への移行が交差している。社会的要請および自覚による自己投入の努力と失敗、息切れ等による弛緩とがあい半ばする時期のようである。
- ⑥ 3年次後期から4年次後期にかけて、同一性達成地位から積極的モラトリウム地位への移行が認められる。卒業に臨んで、在学中にみいだした自己の同一性および自己投入の対象等を、社会人への移行に直面しつつ、より広い視野の中で再検討しようとする新たな模索・探索の現れであろうか。

6 同一性地位の移行に関連する要因

領域を特定しない探索・危機ならびに自己投入によって定義された諸同一性地位の発達の移行にともなう、特定の・具体的な諸領域における探索・危機あるいは自己投入の水準に有意な変化が認められるならば、それらの領域における探索・危機あるいは自己投入は全体的な同一性地位の変遷において大きな重要性を持つものであると考えられる。また、移行にともなう各領域における変化の方向、大きさ等の検討を通して、各同一性地位の特徴ならびに同一性地位の移行のメカニズムについても、より詳細な検討と解明が期待できる。

そこで本節では、1 インターバルをはさんで連続してデータが得られた全 273 例の調査対を分析単位とし、D-M 中間地位から同一性達成地位へ、積極的モラトリウム地位から同一性達成地位へ、D-M 中間地位から同一性拡散地位へといった同一性地位間の移行の主要なパターンについて、インターバルの前後での諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化を検討することとした。

この場合、“移行が認められた者を対象として、インターバル前後の諸領域における探索・危機および自己投入の水準を比較する”分析方法では、“同一性地位の移行”と“1 インターバルの経過”の2つの条件が混在しており適切ではない。そこで、ある同一性地位から他の同一性地位への移行にともなう特徴をより適切に把握するために、同じ同一性地位に留まった者を“対照群”とし、移行が認められた者からなる群における変化と対照群における変化との比較を行うこととした。

○ D-M中間地位から同一性達成地位への移行

同一性に関して未分化な状態である D-M中間地位から同一性達成地位への移行には、同一性達成にともなう諸領域における変化の特徴が最もクリアに反映されることが期待できる。また幸いこの移行は比較的多数観察されている。そこで、1 インターバルをはさんで D-M中間地位から同一性達成地位に移行した18例（男子 5例、女子13例）と D-M中間地位に留まった 107例（男子33例、女子74例）の2群間で、インターバル前後の諸領域における探索・危機ならびに自己投入の水準の変化を、男女各々について比較した。

表 7- 4 に示したように、D-M中間地位に留まった対照群と比較して同一性達成地位に移行した群においては、男子では“将来の仕事”に関する探索・危機の水準に顕著(- 1.60)かつ有意な低下が認められ、また“宗教的活動”への自己投入の水準にも有意な若干の上昇(.60)が認められた。女子では同一性達成地位への移行にともなって“家族との関係”に関する探索・危機と“同性の友人との関係”への自己投入に有意な増大が認められるが、変化の値は大きなものではなかった(.46 と .38)。

これらの結果は、男子においては“将来の仕事”についての考えが定まること、および宗教的活動に自己投入することが同一性達成地位への移行を促進することを示唆するものであるが、後者についてはその値も小さく、また先にみたとおり（図 5- 4）全体的にみた“宗教的活動”への自己投入の水準は極めて低いため、必ずしも一般化しうる結果ではないかもしれない。また、同一性達成地位への移行にともなって上昇することが期待された“将来の仕事”への自己投入は、有意ではないものの逆に若干の低下を示した。この変化は理解に苦しむものだが、これら

表 7-4 D-M中間地位から同一性達成地位間への移行にともなう
諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

	男 子			女 子	
	D-M中間地位から			D-M中間地位から	
探索・危機	同一性 達成地位 (5)	D-M 中間地位 (33)		同一性 達成地位 (13)	D-M 中間地位 (74)
家族との関係	.60	.00		.46	-.05 *
同性の友人	-.60	-.06		.15	-.08
異性の友人	-.20	.00		.00	-.03
男・女らしさ	.40	-.03		.00	.11
勉強	-.60	-.03		-.31	.12 p < .10
将来の仕事	-1.60	-.03 **		.15	.15
趣味	-.20	.15		-.15	.04
政治的態度	.00	.09		-.08	-.03
社会問題	.20	.15		-.15	.08
宗教的態度	-.20	-.18		.15	-.03
生き方や価値	-.40	.00		.23	.14

	D-M中間地位から			D-M中間地位から	
自己投入	同一性 達成地位 (5)	D-M 中間地位 (33)		同一性 達成地位 (13)	D-M 中間地位 (74)
家族との関係	.20	.00		.38	.03
同性の友人	.20	.00		.38	-.14 *
異性の友人	.40	.12		.31	.08
男・女らしい自分	.60	-.03		-.08	.09
勉強	.00	-.03		.23	-.01
将来の仕事	-.60	.09		-.08	-.01
個人的趣味	.00	.18		-.31	.19 p < .10
政治的活動	.00	-.03		.00	.03
社会的活動	.20	.00		-.38	.04
宗教的活動	.60	-.18 *		.15	-.07
生き方や価値	.20	-.09		.15	.00

** p < .01, * p < .05

の評定が全て自答式の質問紙によって行われた自己評価であることを考慮すると、それまでは“努力”を必要とした“将来の仕事”への自己投入が、同一性達成地位においてはその生活の“自然な一部”となる結果ことさら意識的な“努力”を要しなくなる、といったことの反映であるのかもしれない。

女子における結果は、同一性達成地位に移行した女子が“同性の友人”との関係をより重視するようになり、また“家族との関係”についてより考え迷うようになる傾向を示しているが、これらは同一性達成を促進する要因であるのか、同一性達成の結果として、各人が自らの道を歩き始めることから生ずる変化であるのか、あるいはその両方であるのか、この結果のみによっては判断しえない。

上に述べたとおり、D-M中間地位から同一性達成地位への移行にともなう諸領域における変化の検討結果は、男子の“将来の仕事”に関する探索・危機の低下を除き明瞭なものではなかった。

○ 積極的モラトリウム地位を経ての同一性達成地位への移行

上の分析においては数ヶ月のインターバルをはさんでのD-M中間地位から同一性達成地位への移行にともなう変化の検討が試みられた。

しかしながら、“D-M中間地位から同一性達成地位へ”という推移は、“数ヶ月を経ての測定”という調査実施上の制限がもたらしたものであり、同一性達成地位への移行は、理論上、積極的モラトリウム地位の状態を一定期間経て初めて実現するはずのものである。

そこで、D-M中間地位から積極的モラトリウム地位へ、そして積極的モラトリウム地位から同一性達成地位へという、理論上期待されるルート

をたどった場合における各ステップごとの諸領域における変化の特徴の検討を試みることにした。

まず第1段階として、1インターバルをはさんで D-M中間地位から積極的モラトリウム地位に移行した10例（男子4例、女子6例）と D-M中間地位に留まった107例（男子33例、女子74例）の2群間の比較検討を男女別に行った結果は表 7-5 に示したとおりであった。

男子においては有意な差は認められなかったが、女子では移行にともなって“生き方や価値”に関する探索・危機の有意な低下(-.67)、ならびに“勉強”への自己投入の有意な増大(.67)が認められた。

女子におけるこの結果は、“めざすべき生き方や価値”に関する考えが定まり、その実現に向けての“勉強”により努力するようになることによって、D-M中間地位から積極的モラトリウム地位への移行がなされることを示唆するものであり、納得のいくものといえよう。

しかしながら、男子においてはそのような傾向は認められず、“勉強”への自己投入は女子における傾向とは逆に低下(-.75)しており、また“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機には変化は認められなかった。

“個人的趣味”への自己投入(.75 と .67)や“政治的態度”に関する探索・危機の上昇(.50)等、男女間で共通する傾向もあるものの、D-M中間地位から積極的モラトリウム地位への移行にともなう諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化は男女間でかなり異なっていることが示唆されているように思われる。

表 7-5 D-M中間地位から積極的モラトリウム地位への移行にともなう
諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

	男 子		女 子		
	D-M中間地位から		D-M中間地位から		
探索・危機	積極的 モラトリウム地位 (4)	D-M 中間地位 (33)	積極的 モラトリウム地位 (6)	D-M 中間地位 (74)	
家族との関係	.25	.00	.33	-.05	p < .10
同性の友人	.00	-.06	.67	-.08	
異性の友人	-.50	.00	.67	-.03	
男・女らしさ	.00	-.03	.17	.11	
勉強	.25	-.03	-.17	.12	
将来の仕事	.00	-.03	.00	.15	
趣味	.25	.15	.17	.04	
政治的態度	.50	.09	.50	-.03	
社会問題	.50	.15	.17	.08	
宗教的態度	.00	-.18	-.67	-.03	
生き方や価値	.00	.00	-.67	.14	*

自己投入	D-M中間地位から		D-M中間地位から	
	積極的 モラトリウム地位 (4)	D-M 中間地位 (33)	積極的 モラトリウム地位 (6)	D-M 中間地位 (74)
家族との関係	.00	.00	-.33	.03
同性の友人	-.50	.00	.17	-.14
異性の友人	-.50	.12	.67	.08
男・女らしい自分	-.25	-.03	.33	.09
勉強	-.75	-.03	.67	-.01
将来の仕事	.00	.09	.50	-.01
個人的趣味	.75	.18	.67	.19
政治的活動	-.25	-.03	-.17	.03
社会的活動	.50	.00	-.17	.04
宗教的活動	.00	-.18	-.17	-.07
生き方や価値	.00	-.09	-.33	.00

** p < .01, * p < .05

続いて第2段階として、1 インターバルをはさんで積極的モラトリウム地位から同一性達成地位に移行した10例（男子 2例、女子 8例）と積極的モラトリウム地位に留まった12例（男子 5例、女子 7例）の2群間の比較検討を男女別に行った結果は、表 7- 6 に示したとおりであった。

例数が少ないため結果の一般化には注意が必要だが、男子においては“異性の友人”に関する探索・危機の水準に、同一性達成地位への移行にともなう有意かつ顕著な低下(- 1.50)が認められ、また積極的モラトリウム地位に留まる場合にはより高まる“政治的活動”や“宗教的活動”への自己投入の水準（ともに .60）が同一性達成地位に移行した場合には低下する傾向(- .50, -1.00)も示された。また女子では、同一性達成地位への移行にともなう変化は、最大でも“家族との関係”への自己投入の .50の上昇に過ぎず、顕著な変化は認められなかった。

○ D-M中間地位から同一性拡散地位への移行

1 インターバルをはさんで D-M中間地位から同一性拡散地位に移行した 6例（男子 2例、女子 4例）と D-M中間地位に留まった 107例（男子 33例、女子74例）の2群間で、インターバル前後の諸領域における探索・危機ならびに自己投入の水準とその変化の平均値を男女各々について比較した結果は表 7- 7 に示したとおりであった。

男子では同一性拡散地位への移行にともなって、“将来の仕事”に関する探索・危機、ならびに“宗教的活動”への自己投入の水準に顕著かつ有意な上昇(2.00)が認められた。また有意ではないものの、同一性拡散地位への移行にともなって“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機についても上昇傾向(1.00)が認められた。

表 7-6 積極的モトリアム地位から同一性達成地位への移行にともなう

諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

	男 子			女 子	
	積極的モトリアム地位から			積極的モトリアム地位から	
探索・危機	同一性 達成地位 (2)	積極的 モトリアム地位 (5)		同一性 達成地位 (8)	積極的 モトリアム地位 (7)
家族との関係	.50	-.20		.00	-.14
同性の友人	-.50	.40		-.25	-.57
異性の友人	-1.50	.20	**	-.25	.00
男・女らしさ	-.50	.20		.00	.14
勉強	-.50	-.20		.13	-.71
将来の仕事	-.50	.60		.25	-.43
趣味	-.50	-.60		.00	.43
政治的態度	-.50	.00		-.38	-.57
社会問題	.00	.00		.00	-.43
宗教的態度	-1.00	.40		.00	.29
生き方や価値	-.50	.00		.25	.00

p < .10

	積極的モトリアム地位から			積極的モトリアム地位から	
自己投入	同一性 達成地位 (2)	積極的 モトリアム地位 (5)		同一性 達成地位 (8)	積極的 モトリアム地位 (7)
家族との関係	.00	.20		.50	.00
同性の友人	-.50	.60		-.13	-.43
異性の友人	.00	.20		.13	-.57
男・女らしい自分	.50	.20		-.13	.71
勉強	.00	.60		-.38	-.57
将来の仕事	.00	.09		.13	-.29
個人的趣味	-.50	-.20		.25	1.00
政治的活動	-.50	.60	p < .10	-.25	-.29
社会的活動	.00	.80		.00	-.14
宗教的活動	-1.00	.60		.13	.43
生き方や価値	-.50	.20		-.25	-.29

** p < .01, * p < .05

表 7-7 D-M中間地位から同一性拡散地位への移行にともなう

諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

	男 子			女 子	
	D-M中間地位から			D-M中間地位から	
探索・危機	同一性 拡散地位 (2)	D-M 中間地位 (33)		同一性 拡散地位 (4)	D-M 中間地位 (74)
家族との関係	-.50	.00		.00	-.05
同性の友人	.50	-.06		-.25	-.08
異性の友人	.50	.00		.25	-.03
男・女らしさ	.00	-.03		-.50	.11
勉強	.00	-.03		-.75	.12
将来の仕事	2.00	-.03 **		-.75	.15 *
趣味	1.00	.15		-.25	.04
政治的態度	.00	.09		.00	-.03
社会問題	.50	.15		.00	.08
宗教的態度	.00	-.18		.00	-.03
生き方や価値	1.00	.00		-1.25	.14 **

	D-M中間地位から			D-M中間地位から	
自己投入	同一性 拡散地位 (2)	D-M 中間地位 (33)		同一性 拡散地位 (4)	D-M 中間地位 (74)
家族との関係	.00	.00		-.50	.03
同性の友人	.50	.00		-.50	-.14
異性の友人	.00	.12		-.50	.08
男・女らしい自分	-1.00	-.03		.00	.09
勉強	.00	-.03		-.75	-.01 p < .08
将来の仕事	.50	.09		-.50	-.01
個人的趣味	-1.00	.18		-.75	.19 p < .06
政治的活動	1.00	-.03		.00	.03
社会的活動	1.00	.00 p < .09		.25	.04
宗教的活動	2.00	-.18 **		.00	-.07
生き方や価値	.50	-.09		-1.25	.00 **

** p < .01, * p < .05

他方、女子では“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機、ならびに“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入の水準に顕著かつ有意な低下(- 1.25)が認められ、また“将来の仕事”に関する探索・危機にも有意な低下(- .75)が認められた。

例数が少ないため、結果の過度の一般化と解釈は慎むべきかもしれないが、同じ同一性拡散地位であるにおもいかかわらず、男子における変化の特徴はより“危機的・追求的”な印象を与えるのに対し、女子の変化の特徴はより“諦観的・消極的”な印象を与えるように思われる。

○ D-M中間地位から権威受容地位への移行

権威受容地位への移行については、女子のみの4例しか観察されなかったため、男女差の比較検討は行えなかった。

表7-8に示したように、女子においてはD-M中間地位から権威受容地位への移行にともなって、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機に非常に大きく(- 2.50)かつ有意な低下が認められ、また“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入にもかなり大きく(- 1.50)かつ有意な低下が認められた。これらの結果は、少なくとも女子においては“生き方や価値の問題について考え迷うことをやめると同時に、その追求のための努力もしなくなる”という“没理想的”な状態が権威受容地位への移行に関連していることを示すと同時に、女子における権威受容地位と同一性拡散地位との類似を示すものであるといえる。

表 7-8 D-M中間地位から権威受容地位への移行にともなう
諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

女 子

D-M中間地位から

探索・危機	権威受容 地位 (2)	D-M 中間地位 (74)	
家族との関係	1.00	-.05	p < .06
同性の友人	.00	-.08	
異性の友人	.50	-.03	
男・女らしさ	-.50	.11	
勉強	-.50	.12	
将来の仕事	-.50	.15	
趣味	-.50	.04	
政治的態度	.00	-.03	
社会問題	-.50	.08	
宗教的態度	-.50	-.03	
生き方や価値	-2.50	.14	**

D-M中間地位から

自己投入	権威受容 地位 (2)	D-M 中間地位 (74)	
家族との関係	.00	.03	
同性の友人	-.50	-.14	
異性の友人	.50	.08	
男・女らしい自分	-.50	.09	
勉強	.50	-.01	
将来の仕事	.50	-.01	
個人的趣味	.00	.19	
政治的活動	.00	.03	
社会的活動	-1.00	.04	
宗教的活動	-.50	-.07	
生き方や価値	-1.50	.00	*

** p < .01, * p < .05

○ D-M中間地位から各同一性地位への移行にともなう特徴
の全体的検討

各同一性地位への移行にともなう諸領域における探索・危機および自己投入の変化の特徴の全体像を整理・把握するとともに、同一性地位の発達における諸領域の重要性について全体的な検討を行うことを目的として、最も未分化な状態であると同時に全体に占める比率も最も高く最大の例数が得られている D-M中間地位からの全5地位（男子では権威受容地位への移行が観察されなかったため4地位）への移行の各々について、それにともなう諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化を集計し、全群間で分散分析を行った結果を示したのが表 7- 9 および図 7- 4 である。なお、図 7- 4 については繁雑を避けるため D-M中間地位に留まった群については省略した。また、D-M中間地位に留まった例は、“1インターバルの経過”の効果に関する統制群として分析に含めたが、表 7- 9 に示されているように、この群における変化は $-.18 \sim +.19$ とごく小さい。

分散分析の結果をみると、男子では“将来の仕事”に関する探索・危機ならびに“宗教的活動”への自己投入、女子では“自分がめざすべき生き方や価値”に関する探索・危機ならびに“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入の水準の変化の値に1%水準の有意差が認められ、これらの諸領域が、全体としてみた同一性地位の移行と密接に関連する“重要な領域”であることが示されている。

各同一性地位への移行にともなう探索・危機および自己投入の水準の変化の値から、以下の特徴が指摘できよう。

表 7-9 D-M中間地位からの移行にともなう諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

	男 子					女 子					
	D-M中間地位から					D-M中間地位から					
探索・危機	達成 (5)	権威 受容 (0)	積極的 モチベーション (4)	D-M 中間 (33)	拡散 (2)	達成 (13)	権威 受容 (2)	積極的 モチベーション (6)	D-M 中間 (74)	拡散 (4)	
家族との関係	.60	—	.25	.00	-.50	.46	1.00	.33	-.05	.00	p < .10
同性の友人	-.60	—	.00	-.06	.50	.15	.00	.67	-.08	-.25	
異性の友人	-.20	—	-.50	.00	.50	.00	.50	.67	-.03	.25	
男・女らしさ	.40	—	.00	-.03	.00	.00	-.50	.17	.11	-.50	
勉強	-.60	—	.25	-.03	.00	-.31	-.50	-.17	.12	-.75	
将来の仕事	-1.60	—	.00	-.03	2.00 **	.15	-.50	.00	.15	-.75	
趣味	-.20	—	.25	.15	1.00	-.15	-.50	.17	.04	-.25	
政治的態度	.00	—	.50	.09	.00	-.08	.00	.50	-.03	.00	
社会問題	.20	—	.50	.15	.50	-.15	-.50	.17	.08	.00	
宗教的態度	-.20	—	.00	-.18	.00	.15	-.50	-.67	-.03	.00	p < .10
生き方や価値	-.40	—	.00	.00	1.00	.23	-2.50	-.67	.14	-1.25	

	D-M中間地位から					D-M中間地位から					
自己投入	達成 (5)	権威 受容 (0)	積極的 モチベーション (4)	D-M 中間 (33)	拡散 (2)	達成 (13)	権威 受容 (2)	積極的 モチベーション (6)	D-M 中間 (74)	拡散 (4)	
家族との関係	.20	—	.00	.00	.00	.38	.00	-.33	.03	-.50	
同性の友人	.20	—	-.50	.00	.50	.38	-.50	.17	-.14	-.50	
異性の友人	.40	—	-.50	.12	.00	.31	.50	.67	.08	-.50	
男・女らしい自分	.60	—	.25	-.03	-1.00	-.08	-.50	.33	.09	.00	
勉強	.00	—	.75	-.03	.00	.23	.50	.67	-.01	-.75	p < .10
将来の仕事	-.60	—	.00	.09	.50	-.08	.50	.50	-.01	-.50	
個人的趣味	.00	—	.75	.18	-1.00	-.31	.00	.67	.19	-.75	p < .10
政治的活動	.00	—	.25	-.03	1.00	.00	.00	-.17	.03	.00	
社会的活動	.20	—	.50	.00	1.00	-.38	-1.00	-.17	.04	.25	
宗教的活動	.60	—	.00	-.18	2.00 **	.15	-.50	-.17	-.07	.00	
生き方や価値	.20	—	.00	-.09	.50	.15	-1.50	-.33	.00	-1.25	**

** p < .01, * p < .05

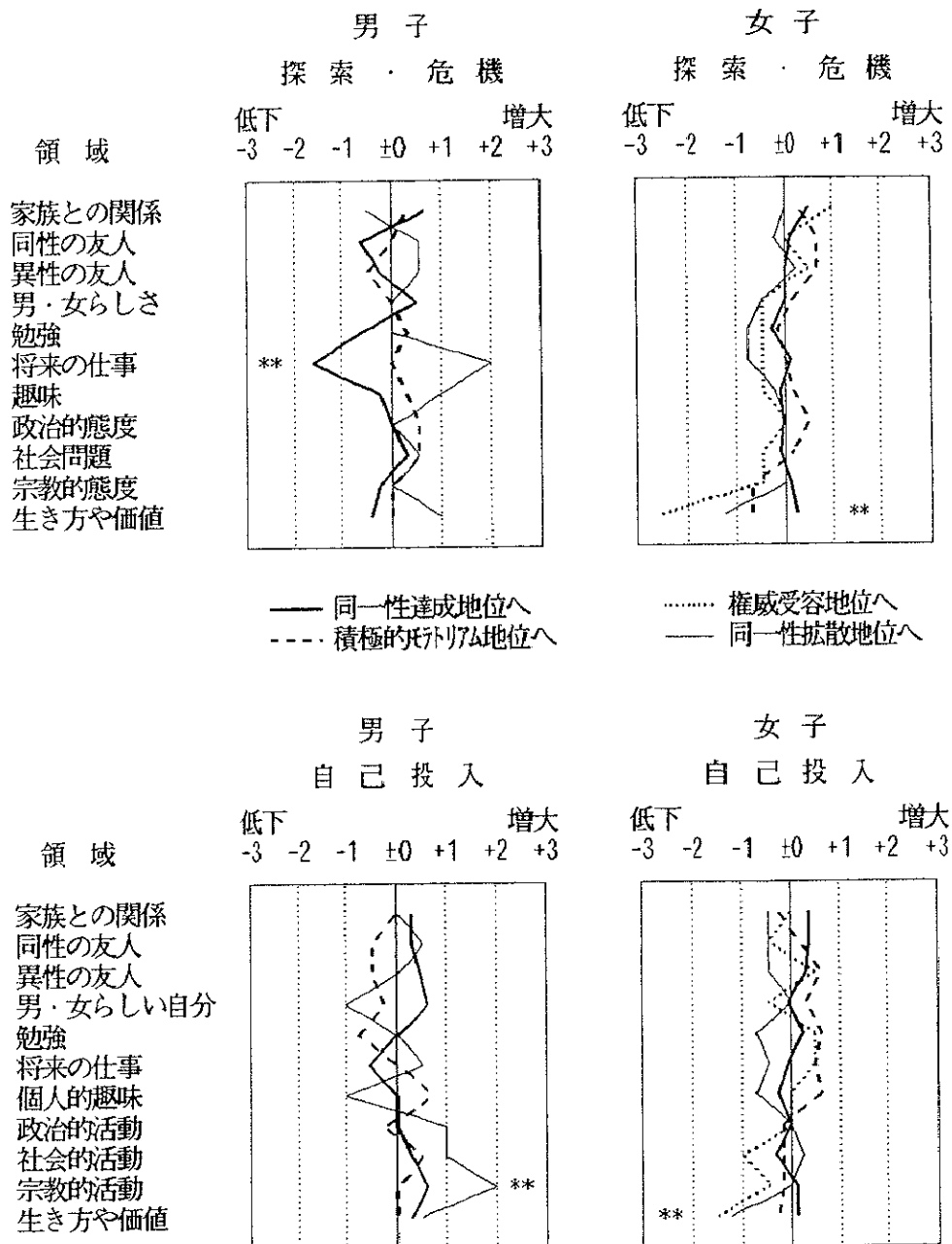


図 7-4 D-M中間地位から各同一性地位への移行にともなう

諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化

- ①同一性達成地位への移行には、男子では“将来の仕事”に関する探索・危機の顕著な低下がともなうのに対し、女子ではこれといった特徴は認められない。
- ②同一性拡散地位への移行には、男子では“将来の仕事”および“めざすべき生き方や価値”の領域における探索・危機の高まりと“宗教的活動”への自己投入の高まりがともなうのに対し、女子では“生き方や価値”に関する探索・危機と自己投入の両者の低下がともなっている。
- ③女子では、権威受容地位への移行にともなって、“生き方や価値”に関する探索・危機ならびに自己投入の水準に同一性拡散地位への移行の場合以上の低下が認められる。

男子では権威受容地位への移行が観察されておらず、また他の同一性地位への移行についてもその件数が十分多いとは言えないため、過度の一般化は慎むべきであろうが、D-M中間地位から各同一性地位への移行に対応する探索・危機および自己投入の水準の変化のパターンは男女間でかなり異なっており、男子学生における同一性地位の移行のメカニズムと女子学生におけるそれとは異質なものであることが示唆されている。

また、変化のプロフィールをみると、男子については同一性達成地位への移行と同一性拡散地位への移行とがほぼ対極的な特徴を示しており、理解しやすい結果といえるのに対し、女子については権威受容地位への移行と同一性拡散地位への移行とが類似した特徴を示す一方、それらと明確に対極をなす特徴は他のどの同一性地位への移行においても認められない。この結果は同一性地位の各状態の持つ意味が男女間で異なっていることを示唆するものとも考えられ、この点の一層の解明が今後の課題の1つであるといえよう。

8章

大学生における同一性の様相と社会的適応ならびに諸性格特性
との関連 [研究5]

1節 問題と目的

3章でも触れたとおり、Erikson の人格発達理論においては“相互性” (mutuality: ある個人の課題達成とその個人にとって重要な他者の課題達成との相補的進行) の重要性が強調されている。また Bourne(1978) も同一性概念の主要な側面の1つとして“心理社会的相互性” (psychosocial reciprocity: 個人の自己定義に対する他者や社会からの承認) を指摘している。

これらの指摘は、同一性の発達が“個人内の認知過程”と実際の“対人的社会的相互作用過程”との循環によって、初めて漸進的に進行するものであることを示している。したがって、より発達し成熟した同一性の状態（同一性次元では“同一性混乱の体験に対する同一性体験の優位”、同一性地位では“同一性達成地位”）に到達するためには、他者や所属集団等との有効な“相互作用経験”が不可欠であり、同時により発達した同一性の状態を呈する個人は、他者や所属集団等との間により適応的な関係を構築していることが期待される。そこで研究5では、青年の同一性の様相と社会的適応状態との関連について、質問紙性格検査とゲス・フー・テストという2つの指標を用いて主観的評定と客観的評定の両面から検討を加えることとした。

これらの検討は、まず第1に同一性の発達と社会的適応との正の対応関係を検証することによって、上述の過程の存在を支持する知見を得る

ための試みであり、第2に“社会的適応”という重要な指標を外的基準として、それとの対応関係を検証することによって“同一性次元”ならびに“同一性地位”という構成概念の妥当性と有用性を実証しようとする試みである。また第3に、同一性次元得点の高中低各群および各同一性地位の間で性格検査によって測定された諸特性のプロフィールを比較検討することにより、その各状態の特徴がより明らかとなることも期待される。

2節 YG性格検査を用いた検討の方法等

本節では自己評定式の質問紙性格検査を指標として用い、大学生における同一性の様相と主観的な社会的適応状態との関連の検討を行った。質問紙性格検査としては、一般に広く使用されているYG性格検査を用いることとした。

遠藤ら(1981)は自作の自我同一性尺度得点の高低2群間で、その性格特徴の比較をYG性格検査を用いて試みているが、その調査対象者は22名に過ぎず、女子のみである。そこで本研究では、より普遍的な結果を得ることを目的として、男女両性を含むより大きな集団を調査対象とすることとした。具体的には、国立T大学人間科学系学部(定員120名)に1986年度に入学した1年次生全員を調査対象とした。

研究1で作成された同一性次元ならびに同一性地位両尺度とYG性格検査が、授業の一環の実習として1986年4月に実施され、出席者全員から有効回答が得られた。有効回答総数は94(男子45、女子49)であった。

同一性次元得点および同一性地位の分布

有効回答者94名（男子45名、女子49名）における同一性次元得点の平均値は 8.3（男子 9.2、女子 7.5）、標準偏差は 8.0（男子 9.2、女子 6.6）であった。男子の平均値が女子のそれをやや上回っていたが、性差は有意ではなかった〔分散が等質でない（ $F = 1.94$, $p = .03$ ）ためウェルチの法を用いたところ $t = 1.1$, $df = 79.3$, $p = .30$ 〕。

同一性地位の分布は、同一性達成地位が10.6%（男子13.3%、女子 8.2%）、A-F中間地位が13.8%（男子17.8%、女子10.2%）、権威受容地位が 3.2%（男子 4.4%、女子 2.0%）、積極的モラトリアム地位が 18.1%（男子15.6%、女子20.4%）、D-M中間地位が52.1%（男子44.4%、女子59.2%）、同一性拡散地位が 2.1%（男子 4.4%、女子 0.0%）であり、性差は有意ではなかった（ $\chi^2 = 5.5$, $p = .36$ ）。

3節 同一性次元得点と性格特性・適応状態との関連

1 同一性次元得点と性格特性との相関

同一性次元と諸性格特性との関連ならびにその性差を検討することを目的として、同一性次元得点とYG性格検査の各性格特性得点（粗点）との相関係数を全体および男女別に求めた結果は、表 8- 1 に示したとおりであった。

同一性次元得点は“一般的活動性”、“社会的外向性”、“支配性”等の性格特性とは有意な正の相関を示す一方、“抑鬱性”、“劣等感”、“協調性の無さ”、“神経質”、“回帰性傾向”等の性格特性とは有意な負の相関を示しており、相関のパターンは男女間でほとんど共通している。

表 8- 1 同一性次元得点と各性格特性得点との相関係数

		相関係数 (全体 : N=94)	相関係数 (男子 : n=45)	相関係数 (女子 : n=49)
性格特性				
D	抑鬱性	-. 59 **	-. 69 **	-. 45 **
C	回帰性傾向	-. 33 **	-. 35 *	-. 29 *
I	劣等感	-. 49 **	-. 54 **	-. 41 **
N	神経質	-. 42 **	-. 42 **	-. 40 **
LO	客観性の無さ	-. 34 **	-. 46 **	-. 15 n.s.
LC	協調性の無さ	-. 45 **	-. 43 **	-. 48 **

AG	攻撃性	. 09 n.s.	. 12 n.s.	. 07 n.s.
G	一般的活動性	. 48 **	. 53 **	. 44 **
R	のんきさ	. 12 n.s.	. 16 n.s.	. 10 n.s.
T	思考的外向性	. 28 **	. 33 *	. 25 n.s.
A	支配性	. 31 **	. 57 **	. 31 *
S	社会的外向性	. 44 **	. 54 **	. 41 **

** p < .01 * p < .05 (両側検定)

高い“一般的活動性”や“社会的外向性”、ある程度の“支配性”等は、対人関係をより積極的に切り開いていくのに有効な性格特性であるといえよう。他方、高い“抑鬱性”ならびに“劣等感”、“協調性の無さ”、“神経質”、“回帰性傾向”等は、対人関係の発展を抑制し、社会的適応を阻害することが予想される性格特性である。したがってこの結果は、同一性次元得点の水準の高低と社会的適応の良否とが、男女いずれにおいても正に対応していることを示唆するものといえよう。

2 同一性次元得点高中低各群の性格特性プロフィール

相関係数による直線的関係の強さの検討に加えて、同一性次元得点の高中低3群間で各性格特性のプロフィールを作成し比較することによって、同一性次元の水準と適応状態との関連をより詳細に検討・把握することが期待できる。そこで研究2と同一の基準を用い、同一性次元得点が-1点以下の16名を低得点群、0点以上13点以下の56名を中得点群、14点以上の22名を高得点群として、3群間で性格特性得点（粗点）ならびにそのプロフィールの比較を行った。

各群の性格特性得点の平均値とそのプロフィールは、表 8-2 および図 8-1 に示したとおりであった。なお、先の分析で同一性次元と性格特性との関連には性差が認められなかったため、男女を併合して分析を行った。

同一性次元得点の高中低3群間には、“攻撃性”を除く他の全ての性格特性について有意な差が認められ、同一性次元得点の水準と性格特性との強い関連が示されている。

各得点群の特徴に注目すると、高得点群は、“協調的”で、“劣等感”は低く、“支配的”、“社会的に外向的”、“活動的”等を特徴として

表 8-2 同一性次元高中低3群の各性格特性得点平均値と標準偏差

	平 均 (SD)	低得点群 [0点以下: n=16]	中得点群 [1-13点: n=56]	高得点群 [14点以上: n=22]
D 抑鬱性		14.2 (4.3)	12.1 (5.0)	6.5 (5.1)
C 回帰性傾向		11.0 (3.6)	10.9 (4.9)	7.2 (4.0)
I 劣等感		12.5 (4.2)	9.5 (4.6)	4.9 (3.7)
N 神経質		12.4 (4.1)	10.9 (5.7)	5.9 (4.2)
LO 客観性の無さ		10.6 (2.7)	9.9 (4.3)	7.6 (4.1)
LC 協調性の無さ		9.7 (3.3)	6.7 (4.2)	4.1 (2.7)

AG 攻撃性		12.0 (3.6)	11.6 (3.4)	12.8 (2.9)
G 一般的活動性		9.7 (2.6)	10.7 (3.9)	14.9 (3.9)
R のんきさ		11.9 (4.0)	11.0 (4.1)	13.3 (4.0)
T 思考的外向性		6.2 (3.4)	7.6 (4.0)	10.1 (4.5)
A 支配性		7.9 (4.1)	9.3 (5.1)	17.4(17.9)
S 社会的外向性		11.1 (4.2)	12.7 (5.2)	16.4 (3.1)

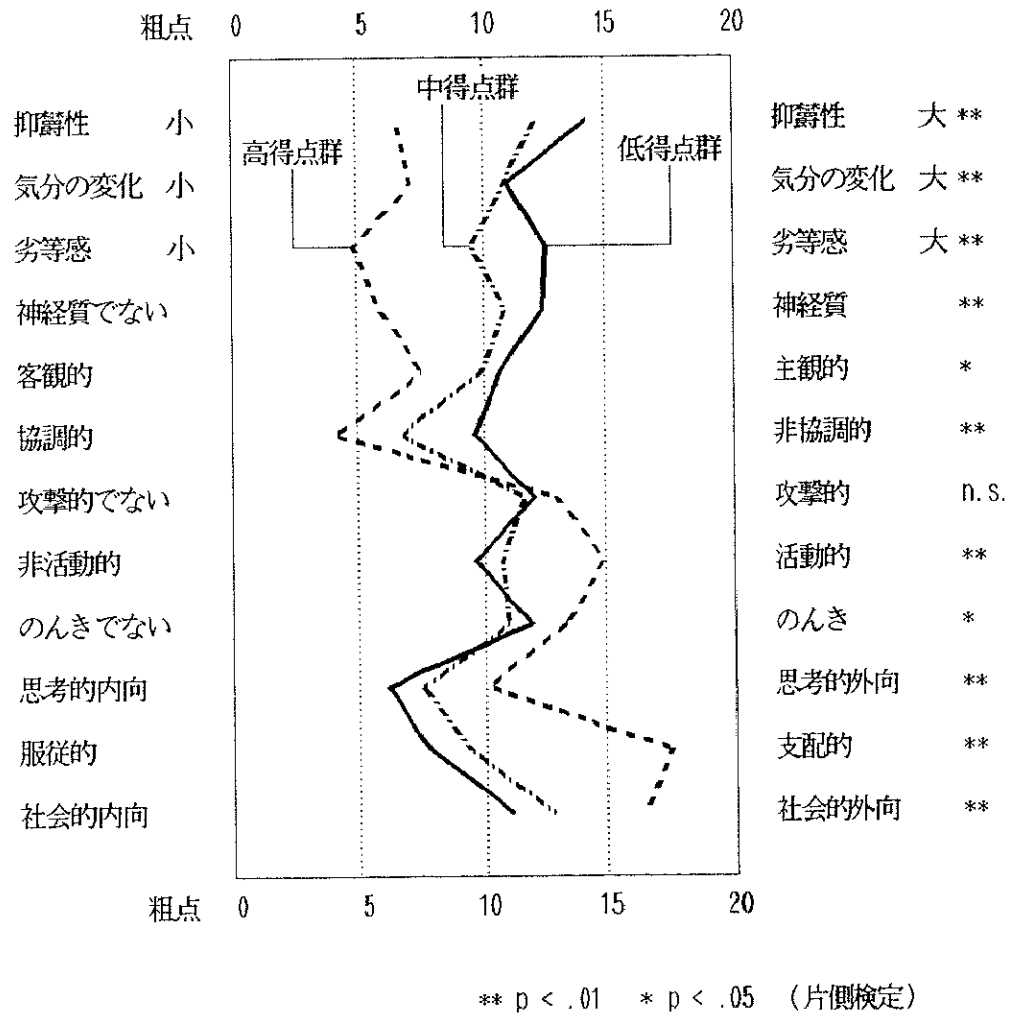


図 8-1 同一性次元得点 高、中、低 3群の性格特性プロフィール

おり、かなり顕著な右下がり（D：安定積極）型のプロフィールを呈している。一方、低得点群は、“抑鬱性”と“劣等感”が強く“神経質”で“思考的に内向的”である等の特徴を含む平均（A：平凡）型のプロフィールを呈している。また中得点群は、ほとんどの性格特性で高低両群の間に位置している。

高得点群の示したD型プロフィールは、情緒的に安定しており社会的適応もよく、活動的で対人関係も良好であることが知られており、これらの結果は、高い同一性次元の水準とよりよい社会的適応の状態との正の関連を重ねて支持するものである。

4 節 同一性地位と性格特性・適応状態との関連

1 同一性地位間での性格特性プロフィールの比較

各同一性地位の性格特性ならびにその適応状態については、理論上、下記のような差異の存在が期待される。

①同一性達成地位は同一性拡散地位と比較して、より適応的な性格特性プロフィールを呈するであろう（具体的には、達成地位は社会的外向性、支配性、活動性等が高く、拡散地位は抑鬱性、劣等感、神経質等の特徴が高いであろう）。

②権威受容地位は同一性達成地位と比較して、より服従的、主観的で、内省性に欠け、社会的には内向的であろう。

そこで、各同一性地位群ごとにその性格特性得点の平均値を求め、その比較を行った。各同一性地位群の性格特性得点の平均値と標準偏差は表 8-3 に示したとおりであった。

表 8-3 各同一性地位群の性格特性得点の平均値と標準偏差

平均(SD)	達成 [n=10]	A-F 中間 [n=13]	権威受容 [n= 3]	積極的 モティベーション [n=17]	D-M 中間 [n=49]	拡散 [n= 2]
D 抑鬱性	10.3(6.0)	7.2(5.1)	11.3(8.3)	10.6(5.8)	12.3(5.1)	14.5(5.0)
C 回帰性 傾向	8.7(4.5)	8.6(6.0)	15.0(5.0)	9.0(4.9)	10.7(4.2)	12.0(1.4)
I 劣等感	6.5(4.0)	6.3(5.5)	10.0(6.0)	7.9(4.7)	10.1(4.6)	16.0(1.4)
N 神経質	9.8(6.9)	8.5(6.1)	14.3(5.5)	9.4(4.9)	10.0(5.3)	17.5(0.7)
LO 客観性 の無さ	9.0(4.9)	8.2(5.0)	12.7(0.6)	9.8(3.4)	9.6(4.1)	10.0(2.8)
LC 協調性 の無さ	6.5(4.9)	5.5(4.0)	9.0(3.5)	5.0(4.4)	7.2(3.8)	11.5(5.0)

AG 攻撃性	11.4(2.5)	12.8(3.0)	14.7(3.1)	11.4(3.7)	11.9(3.5)	9.5(2.1)
G 一般的 活動性	11.9(4.6)	14.2(4.4)	10.7(3.2)	10.8(3.9)	11.1(4.0)	9.5(2.1)
R のんきさ	11.6(2.0)	11.2(3.9)	15.3(4.2)	10.9(4.7)	11.8(4.4)	13.0(4.2)
T 思考的 外向性	6.2(2.2)	8.3(5.2)	12.3(4.0)	8.3(4.4)	8.0(4.1)	5.5(5.0)
A 支配性	12.2(4.4)	12.0(5.9)	5.7(2.1)	11.5(4.7)	10.7(13.3)	8.5(5.0)
S 社会的 外向性	15.4(4.0)	14.8(4.8)	10.3(4.7)	14.2(4.9)	12.5(5.0)	8.5(0.7)

同一性達成地位群と同一性拡散地位群のプロフィールは、図 8- 2 に示したとおりであった。同一性達成地位群のプロフィールは、“社会的外向性”が高い点を除いて平均（A：平凡）型に近いものであったが、同一性拡散地位群は予想されたとおり“劣等感”と“神経質”の両特性が顕著に高く、劣等感と社会的内向については両群間に有意な差が認められた（前者は $t = 3.18, p < .01$ 、後者は $t = 2.34, p < .05$ ）。有意では無かったものの、支配性、活動性、神経質、抑鬱性等の特性にも予想した方向の差異が認められた。

同一性達成地位群と権威受容地位群のプロフィールは、図 8- 3 に示したとおりであった。達成地位群と比較して、権威受容地位群はより服従的（ $t = 2.42, p < .05$ ）、主観的（ $t = 2.30, p < .05$ ）で、思考的には内向的（自省的）でなく（ $t = 3.54, p < .01$ ）、よりのんき（ $t = 2.23, p < .05$ ）で、社会的には内向的（ $t = 1.86, p < .05$ ）であった。これらの差異は、当初の予想と一致するものである。加えて、権威受容地位群は気分の変化がより大きく（ $t = 2.10, p < .05$ ）、より攻撃的（ $t = 1.93, p < .05$ ）であることも示された。

同一性達成地位群と積極的モラトリアム地位群のプロフィールは、図 8- 4 に示したとおりであった。両群のプロフィールは極めて類似しており、いずれの性格特性においても有意な差は認められなかった。

各同一性地位群はその特徴を適確に反映した性格特性プロフィールを示しており、同一性拡散地位ならびに権威受容地位の性格特徴に関する仮説はともに支持された。特に、ともに高い自己投入の水準を示す同一性達成地位と権威受容地位との性格特性上の差異が、実証された点は本研究の成果であるといえよう。

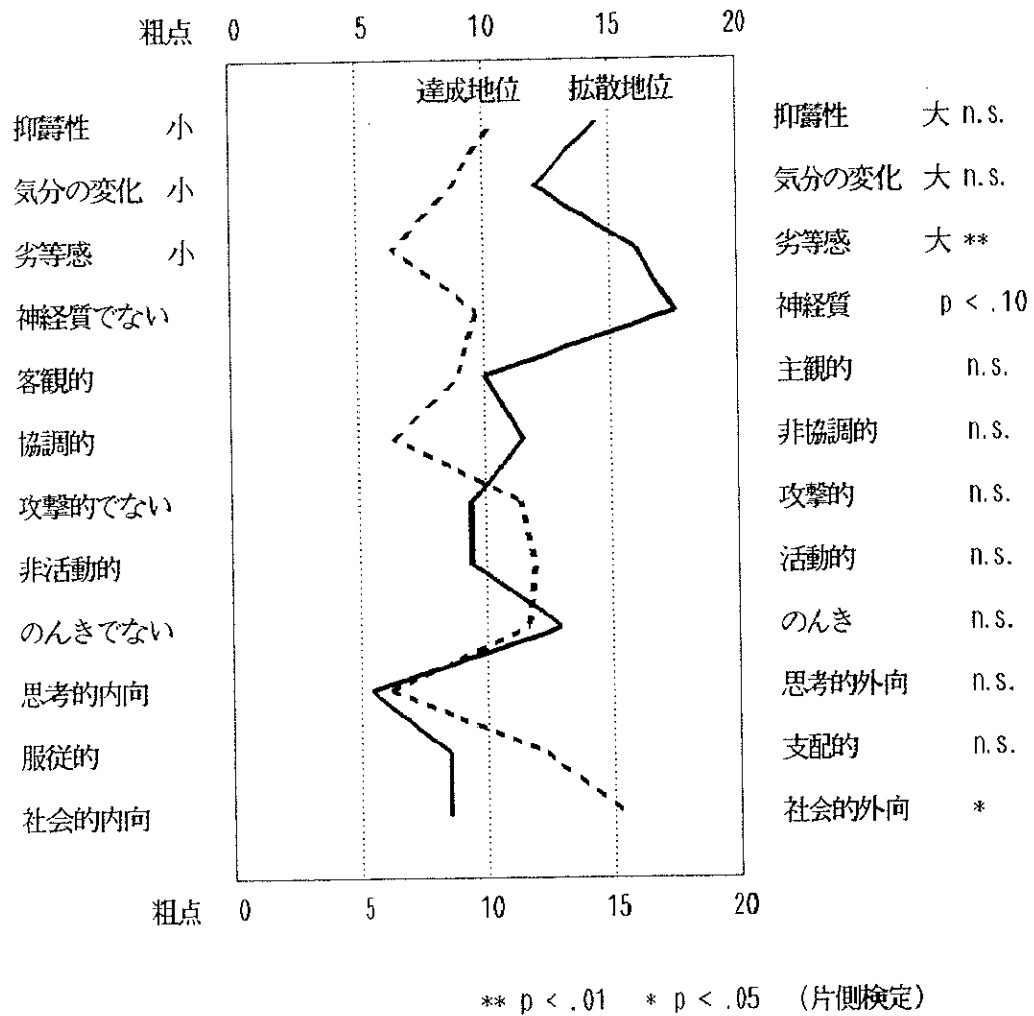


図 8-2 同一性達成地位群と同一性拡散地位群の性格特性プロフィール

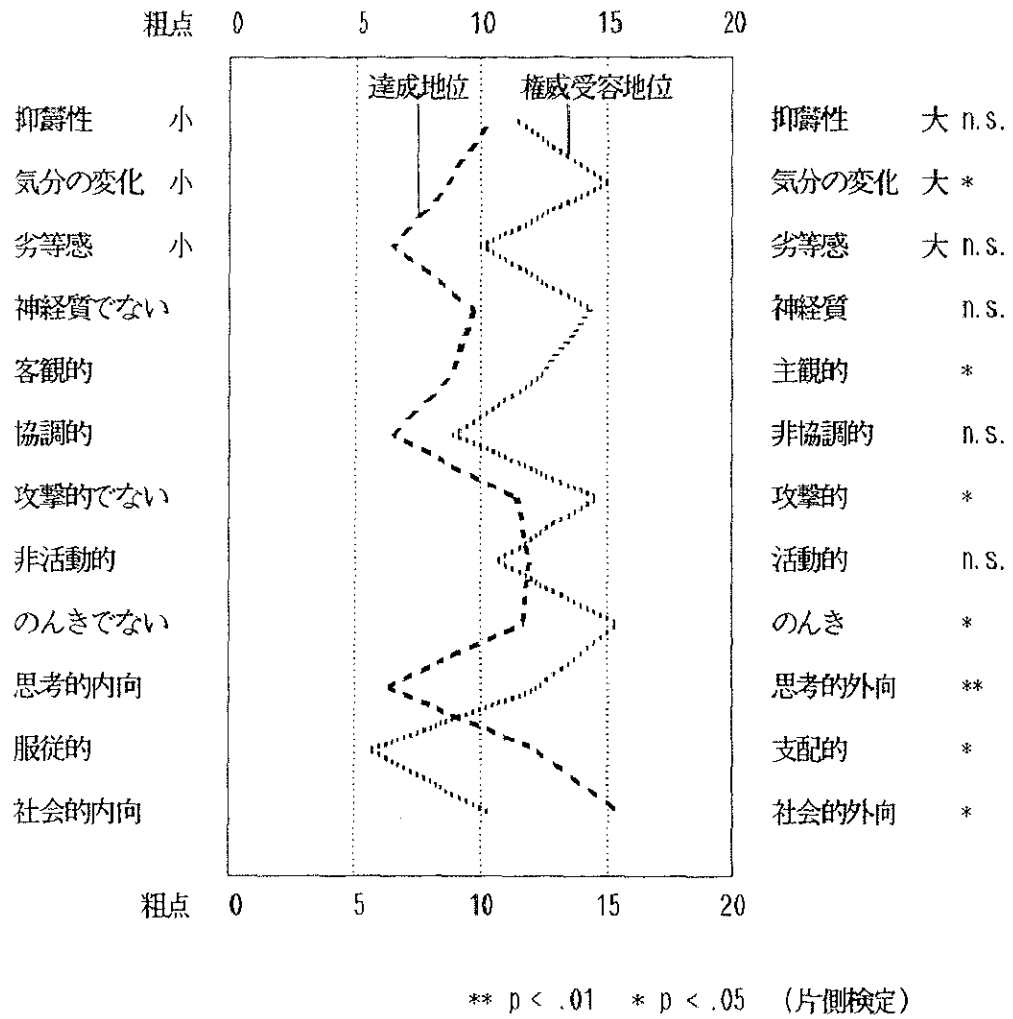


図 8-3 同一性達成地位群と権威受容地位群の性格特性プロフィール

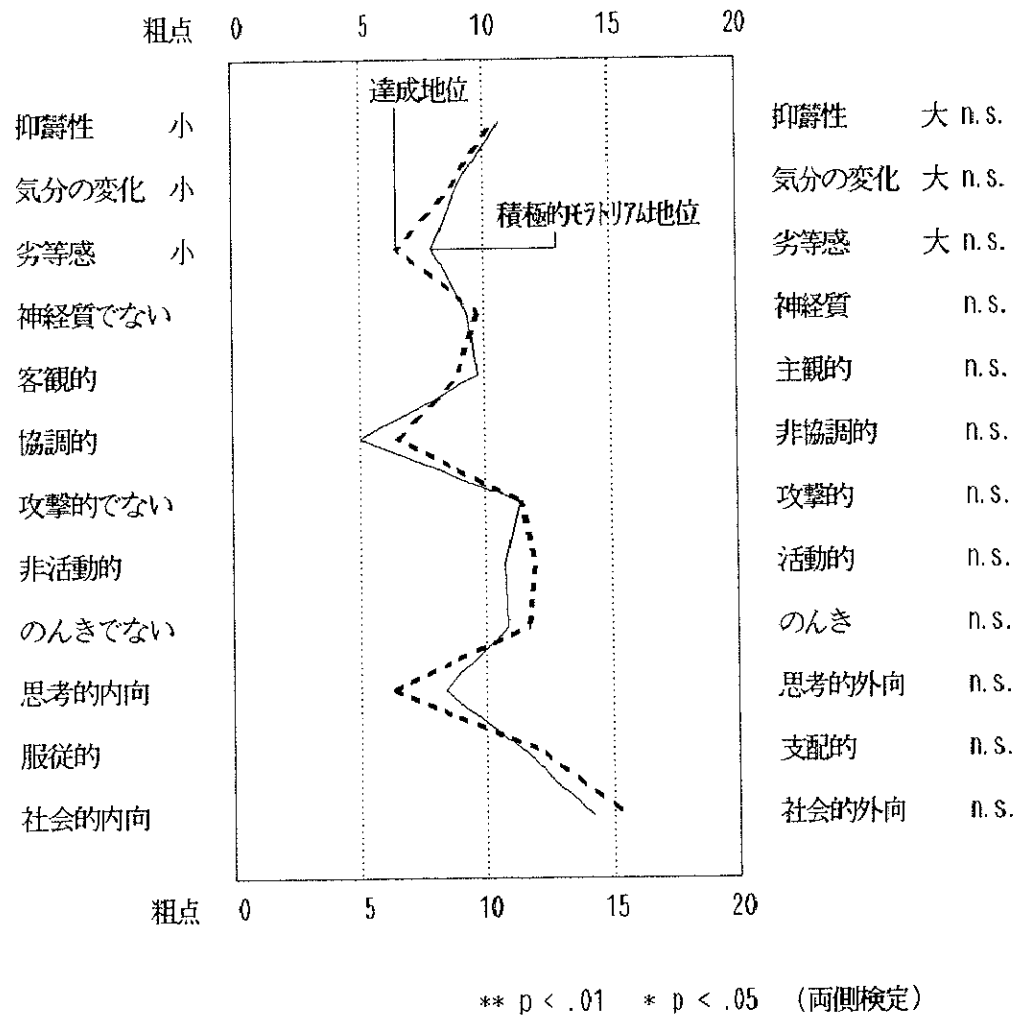


図 8-4 同一性達成地位群と積極的モラトリアム地位群の性格特性プロフィール

5節 ゲス・フー・テストを用いた検討

1 問題

自己評定式質問紙は、たとえ外的基準妥当性や構成概念妥当性の検証を経た広く使用されているものであっても、その結果が“主観的である”との批判を完全には免れえない。したがって、Y G性格検査という自己評定式質問紙を基準とした前節の結果は、その客観性に関して一定の限界を持つものである。そこで、同一性次元ならびに同一性地位と“社会的適応”との関連について、より適切に検証を行うためには、なんらかの客観的指標（例えば“他者評定”等）を基準として、さらに検討を加えることが必要である。そこで本節では、他者評定の一種であるゲス・フー・テストを適応状態の指標として用い、大学生における同一性の様相と社会的適応との関連のより客観的な検討を試みることにした。

2 方法

① ゲス・フー・テストとその項目

ゲス・フー・テストとは、例えば学級集団のように、成員どうしが互いによく知り合っている集団の構成メンバーに対して、特定の人格特性・行動傾向等が当てはまるグループメンバーの氏名を挙げさせる測定法である。集団内での長期的かつ多面的な相互観察に基づく評価が得られるため、自己評定式質問紙の欠点を補いうるより客観的な指標であるといえる。他方、とりわけ青年期以降においては特定個人名の記入に抵抗を感じる者も多いため、回収率等の点で十分な協力を得にくいのが実施における難点である。

大学生における“社会的適応”の主要な側面としては、生活における

積極性や充実度、友人関係の豊かさ等が挙げられよう。そこで本研究では、これらの諸側面に関する他者評定を得るため、表 8-4 に示した2項目を用いることとした。

② 調査の対象と時期

集団構成員が互いにある程度以上知りあっているためには、調査対象はあまり大きくない集団(百人程度)であるとともに、そのメンバーが比較的長期間同一集団に所属していることが必要であろう。また、大学生活における総括的な適応状態を把握するためには、対象者は高学年次生であることが望ましい。そこで、国立T大学人間科学系学部(定員120名)の4年次生117名(男子51名、女子66名)を対象として、1987年10月に郵送法による調査を実施した。

送付されたゲス・フー・テスト質問紙の内容は表 8-4 に示した通りであった。記入への抵抗を考慮して性別の記入のみ求め、無記名としたが、やはり特定個人名の記入には抵抗を感じた者が多かったようで有効回答数は28名(男子7名、女子21名)、有効回収率は23.9%(男子13.7%、女子31.8%)に留まった。

同一性の状態の指標としては、同年6月に同学部同年次生を対象として郵送法によって実施した質問紙調査(内容は研究6および7と同一)のデータを用いた。こちらの調査の有効回答数は47名(男子12名、女子35名)、有効回収率は40.2%(男子23.5%、女子53.0%)であった。

③ ゲス・フー・テストの有効回答における偏りの検討

ゲス・フー・テストの有効回収率は全体的にもかなり低く、男子では特に低いため、①特定集団内に限定された指名が行われている、②女子に偏った指名がなされている、の2つの危惧が指摘されうる。

表 8-4 ゲス・フー・テストの教示文と項目

人間学類4年次に在学しているあなたの 同級生 のなかで、以下の特徴がよくあてはまるひとは誰でしょう。

思いうかんだ順に3人まで、その **氏名** を記入してください。

★ 3人思いうかばない場合は、2人以下でもけっこうです。

★ 3人以上思いうかんだ場合は、特によくあてはまる3人を記入してください。

☆ 名前はⅠ、Ⅱで重複してもかまいません。

Ⅰ. 充実した積極的な生活をおくっているひと

① _____ ② _____ ③ _____

Ⅱ. 豊かな友人関係を持っているひと

① _____ ② _____ ③ _____

あなたの性別は----- (男 ; 女)

そこでまず①の検討のため、全調査対象者 117名についてゲス・フー・テストの項目のいずれかに名前が挙げられた者の人数を集計したところ、その総数は53名（男子19名、女子34名）であり、両項目のいずれにおいても記名されなかった者は64名（男子32名、女子32名）であった。被記名者総数の53名は有効回答者数の28名を大きく上回っており、①による偏りは顕著ではない。

また②についても、いずれかの項目で名前が挙げられた者の比率は男子が37.3%（19名）、女子が51.5%（34名）であり、女子の比率のほうが若干高いもののその差は有意ではなかった（ $\chi^2 = 1.82$, $p = .18$ ）。

これらの結果から、今回のゲス・フー・テストのデータは、指名対象者の選択の範囲に関しては妥当なものと考えられる。

3 結果

① 同一性次元得点および同一性地位の分布

同一性の状態に関する調査の有効回答者47名における同一性次元得点の平均値は10.1、標準偏差は10.5であった。また各同一性地位の分布は達成地位が25.5%、A-F中間地位が21.3%、権威受容地位は認められず、積極的モラトリアム地位が6.4%、D-M中間地位が42.6%、拡散地位が4.3%であった。権威受容地位が認められなかった点を除けば、次元・地位ともに他の調査における大学4年次の結果とほぼ一致する分布を示している。

② ゲス・フー・テストの項目得点の分布

上述の47名について、ゲス・フー・テストにおける1回の被記名を1点として各項目ごとに集計した得点の分布は表 8-5 に示した通りであった。いずれの項目においても0点（記名されなかった者）が29～32名

表 8-5 ゲス・フー・テストの得点分布

項 目	0点	1点	2点	3点	4点	5点	合計
充実した 積極的な生活	29人	6人	6人	5人	0人	1人	47人
豊かな 友人関係	32人	11人	1人	0人	3人	0人	47人

と6割以上を占める一方、1～2点の者の比率は26%、3点以上の者の比率は6～13%と単調減少的な分布を呈している。

③ ゲス・フー・テストの項目間の連関

ゲス・フー・テストの2項目について、全体を0点の者と1点以上の者（つまり記名されなかった者と1回以上記名された者）の2群に分割して連関係数を求めたところ、 ϕ 係数の値は.07とほぼ0に近いものであった。この結果は、本研究で大学生における社会的適応の主要な側面として用いた2項目の内容は、互いにかなり独立した特性であることを示している。そこで以下の分析では、両項目の得点を合計して尺度化することはせず、その各々の得点について検討を加えることとした。

④ 同一性次元得点とゲス・フー・テスト得点との関連

ゲス・フー・テストの得点が単調減少的な分布を呈するため平均値は適切な代表値ではなく、したがって検定、分散分析等による検討は適当でない。また有効回答者数が十分に多くないため、多数の群に分割することは困難である。そこで、ゲス・フー・テスト得点については前節と同様0点の者と1点以上の者（つまり記名されなかった者と1回以上記名された者）の2群、同一性次元得点についてはその平均値が10.1点であることを考慮して、10点以下の低得点群と11点以上の高得点群の2群に分割し、2×2クロス表としてその対応関係の検討を行った。また、同一性次元得点とゲス・フー・テスト得点とは正に対応することを事前に仮定していたため、直接確率は片側確率を求めた。

表 8-6 に示したように、ゲス・フー・テスト得点による2群と同一性次元得点の高低2群との間には、「充実した積極的な生活」項目においては有意な ($p = .04$)、また「豊かな友人関係」項目においても有意

表 8-6 同一性次元得点とゲス・フー・テスト得点との関連

		ゲス・フー・テスト得点		Fisherの 直接確率 (片側)
『充実した積極的な生活』		0点	1点以上	
同一性 次元得点	11点以上	13人 (50.0%)	13人 (50.0%)	$p = .04$
	10点以下	16人 (76.2%)	5人 (23.8%)	
『豊かな友人関係』		0点	1点以上	
同一性 次元得点	11点以上	15人 (57.7%)	11人 (42.3%)	$p = .06$
	10点以下	17人 (81.0%)	4人 (19.0%)	

に近い($p = .06$) 連関が、予想された方向で認められた。

この結果は、同一性次元において平均以上の得点を示す者は周囲からの客観的な評定によっても「より充実した積極的な生活」を送っており、また「豊かな友人関係」を持っているとみなされる傾向があることを示すものであり、同一性次元と社会的適応との正の対応の存在を支持している。同時にこの結果は、明らかに客観的な指標であるゲス・フー・テストを外的基準とした同一性次元尺度の基準連関妥当性を肯定するものでもある。

同一性地位とゲス・フー・テスト得点との関連

各同一性地位群におけるゲス・フー・テストの得点分布は表 8-7 に示したとおりであった。積極的モラトリウム地位と同一性拡散地位がそれぞれ3人と2人しか認められないため、これらの地位における特徴は必ずしも一般化可能なものとはいえないが、ゲス・フー・テストの得点の分布は以下のような傾向を示唆している。

まず『充実した積極的な生活』については、1点以上の者が同一性達成ならびに A-F 中間地位では50%を占めるのに対して、積極的モラトリウム地位におけるその比率は33%、D-M 中間地位では20%に過ぎず、前2者の“客観的な社会的適応”の良さを示している。ここで意外なのは同一性拡散地位の2名がともに2点を得ている点である。Marcia がその展望(1980)で述べているように、同一性拡散地位のプラスの側面である「気楽で気ままで魅惑的で独立した」かに見える特徴(p. 161)、すなわち自己投入の不在と裏腹をなすその『こだわりのない多彩さ』が、はた目には一見『充実した積極的な生活』であるかのように映ることの結果であるのかもしれない。

表 8-7 各同一性地位におけるゲス・フォー・テスト得点の分布

人数 (行%)	『充実した積極的な生活』				『豊かな友人関係』			
	0点	1点	2点	3点～	0点	1点	2点	3点～
同一性 達 成	6人 (50.0)	2人 (16.7)	2人 (16.7)	2人 (16.7)	8人 (66.7)	3人 (25.0)	0人 (0.0)	1人 (8.3)
A-F 中 間	5人 (50.0)	4人 (40.0)	0人 (0.0)	1人 (10.0)	7人 (70.0)	3人 (30.0)	0人 (0.0)	0人 (0.0)
積極的 モチベーション	2人 (66.7)	0人 (0.0)	0人 (0.0)	1人 (33.3)	1人 (33.3)	1人 (33.3)	0人 (0.0)	1人 (33.3)
D-M 中 間	16人 (80.0)	0人 (0.0)	2人 (10.0)	2人 (10.0)	14人 (70.0)	4人 (20.0)	1人 (5.0)	1人 (5.0)
同一性 拡 散	0人 (0.0)	0人 (0.0)	2人 (100.0)	0人 (0.0)	2人 (100.0)	0人 (0.0)	0人 (0.0)	0人 (0.0)

『豊かな友人関係』については、1点以上の者が積極的モラトリアム地位の67%を占め、同一性達成、A-F中間、ならびにD-M中間地位が約30%でそれに続き、同一性拡散地位は2名とも0点となっている。

以上を概括すると、①同一性達成地位ならびにA-F中間地位は『充実した生活』の側面において高く評価されている、②積極的モラトリアム地位は『豊かな友人関係』の側面において高く評価されている、③同一性拡散地位は『充実した生活』については意外に高い評価を受けているが『豊かな友人関係』についてはその評価は低い、そしてD-M中間地位は『充実した生活』に関して最も低い評価を受けている、等の特徴が指摘できよう。

これらの傾向の統計的検証を目的として、社会的適応において最も優れていることが期待される同一性達成地位群（12名）に対して、劣っていることが予想される同一性拡散（2名）とD-M中間（20名）の2地位を併合した群（計22名）を設定し、前節と同様の基準（低得点群：0点／中高得点群：1点以上）でゲス・フー・テストの得点について2分割した2×2クロス表を作成し、分布の比の差の直接確率（片側確率）を求めた結果は表8-8に示したとおりであった。

差は有意ではなかったものの、同一性達成地位群で中高得点群に分類される者の割合は、拡散／D-M中間地位群のそれを2側面のいずれにおいても上回っていた。この結果は、ゲス・フー・テストによって測定された周囲からの客観的な評定によっても、同一性達成地位にある者が拡散あるいはD-M中間地位にある者を上回る“社会的適応”を達成しているとみなされる傾向を持つことを示すものである。

表 8-8 同一性地位とゲス・フー・テスト得点との関連

	ゲス・フー・テスト得点		Fisherの 直接確率 (片側)
『充実した積極的な生活』	0点	1点以上	
同一性達成地位群	6人 (50.0%)	6人 (50.0%)	p = .13
拡散/D-M 中間地位群	16人 (72.7%)	6人 (27.3%)	
『豊かな友人関係』	0点	1点以上	
同一性達成地位群	8人 (66.7%)	4人 (33.3%)	p = .36
拡散/D-M 中間地位群	16人 (72.7%)	6人 (27.3%)	

ゲス・フー・テストを大学生に実施して社会的適応の客観的な指標を得ようとした本研究の試みは、ゲス・フー・テストの測定内容に対する抵抗のためか必ずしも十分な有効回答数が得られず、その結果については①権威受容地位の者が認められず分析の対象としえなかった、②同一性拡散ならびに積極的モラトリアム地位の者も2～3名と少数でその特徴の一般化は困難である、等の限界が指摘されねばならない。

しかしこの試みによって、同一性次元ならびに同一性地位の両者とゲス・フー・テストによって客観的に把握された“社会的適応”との正の対応関係が、部分的ながら実証された。また、自己評定式質問紙によって測定される同一性次元ならびに同一性地位の両概念の基準連関妥当性とその意義が、“社会的適応”という重要な変数を外的基準として支持されたことは本研究の成果であるといえよう。

9章

大学生における同一性の様相と社会態度 [研究6]

1節 問題と目的

前章では大学生を対象として、同一性の様相と比較的身近な人間関係における社会的適応の水準、ならびに性格特性等との関係が検討され、諸仮説が検証されるとともに同一性次元・同一性地位の両概念の妥当性と重要性が示された。しかしながら、青年期後期にあってもなお社会人となる彼らにおける“社会的適応”は、“身近な人間関係”のみで完結しうる、あるいはすべきものではなく、より広い“現実社会”との関係における自己の肯定的位置づけという側面も持つことが必要であるといえよう。

そこで本章では、“現実社会との関係における自己の位置づけ”の1観点として、青年が“より広い社会”に対してどのような“態度・姿勢”で臨んでいるか、また接していこうとしているかという側面を取り上げ、同一性の様相と“社会態度”の諸次元との関連の検討を行うこととした。

2節 方法

測度ならびに調査の対象と時期

社会態度の測度としては、5下位尺度からなる社会態度尺度（加藤・加藤、1987）を使用した。この尺度は表 9- 1 に示した40項目からなり、理論上想定された伝統指向的（①の項目）、革新指向的（②の項目）、合理的・個人主義的（③の項目）、感覚的・娯楽指向的（④の項目）、無気力的・虚無的（⑤の項目）の5つの社会態度次元を測定するもので

表 9-1 社会態度尺度の項目

以下のそれぞれの考えや態度について、あなた自身はどう思いますか。

	どちらかといえば	どちらかといえば	
そう思う	そう思う	そうは思わない	そうは思わない
4-----	3-----	2-----	1-----

の中から選んで、選択肢の番号（4～1）を（ ）に記入して答えてください。

1. たとえまちがっていると思っても、上司や先輩のいいつけには服従する・・・(①)
2. 男女の間に真の愛情があればしきたりや世間体など気にすべきではない (②)
3. 必要な時には上司・先輩・後輩の区別なく、自分が納得いくまで議論する・・・(③)
4. 恋人の条件はまず第一に「カッコいい」ことだ (④)
5. 愛情とか恋愛とかについてまじめに考えるのは無意味なことだ・・・・・・(⑤)
6. 自分個人を主張するよりも、上司や先輩を立てるべきだ (①)
7. 夢や理想を追求しない人生は無意味だ・・・・・・(②)
8. 結婚してもうまくいかないことがわかったら、ためらわず離婚した方がいい (③)
9. 上司や先輩のいうことよりもなかまの意見に従って行動する・・・・・・(④)
10. 他人はどうでもいいし、つきあいたいとも思わない (⑤)
11. 就職はやはり安定した大企業や公務員がいい・・・・・・(①)
12. 老後のめんどうを子供に期待するよりも社会福祉を充実させる方が大切だ (②)
13. 夫婦は子供のためにではなく、夫婦自身のために生きるべきだ・・・・・・(③)
14. 女性は「かわいい存在」であることが一番大事だ (④)
15. 女性の地位とか役割の問題には興味は無い・・・・・・(⑤)
16. 親の老後のめんどうは子供がみるべきだ (①)
17. 社会の進歩に貢献する仕事をするにこそ価値がある・・・・・・(②)
18. 夫婦の役割分担は、各々の能力適性に応じて夫婦ごとでできめればよい (③)
19. 理論よりもフィーリングやムードの方が重要だ・・・・・・(④)
20. 上下関係などわずらわしいだけだ (⑤)
21. 女性は社会に出て仕事につくよりも、家事や育児に専念する方がいい・・・・(①)
22. 政治をよくするためには、もっと革新的な勢力を強くしなければならない (②)
23. 結婚式などの儀式は自分たちなりの個性あるやり方で行いたい・・・・・・(③)
24. 政治や社会問題よりもファッションやレジャーに興味がある (④)
25. 親と子の関係はわずらわしいだけだ・・・・・・(⑤)
26. 結婚式や披露宴では習慣や伝統を重んじたい (①)
27. 芸術や文学も社会の改革に役立つものでなければならない・・・・・・(②)
28. いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきだ (③)
29. 学生時代には政治問題などを考えるよりスポーツやレジャーを楽しむ方がいい (④)
30. なにをしたところでむなしと思う (⑤)
31. 伝統や習慣は多少不合理であっても尊重すべきだ・・・・・・(①)
32. 働く人々が幸福になるためには、労働者の団結が必要だ (②)
33. 自分の生活上の不満や要求はマスコミなどを利用して率直に表現すべきだ・・・(③)
34. 結婚式は豪華なムードでやりたい (④)
35. 社会のためにつくそうなどと考えても、孤立感や挫折感を味わうだけだ・・・・(⑤)
36. 世の中の秩序を守るためには上下関係は無くしてはならない (①)
37. 私たちの努力で今の社会をよりよくしてゆきたい・・・・・・(②)
38. 私生活には互いに干渉しないことが大切だ (③)
39. 芸術も日常生活もすべて「いいムード」であることが何より大事だ・・・・・・(④)
40. 習慣とか伝統などは私にはどうでもいい (⑤)

あり、従来の3次元からなる社会的態度尺度（久世ら、1984；1985）および支持政党を基準としてその妥当性の検証がなされている（加藤・加藤、1987）。回答法は4件法で、“そう思う”を4点、“どちらかといえばそう思う”を3点、“どちらかといえばそうは思わない”を2点、“そうは思わない”を1点として得点化する。

同一性の状態の指標としては、研究1で作成した同一性次元・同一性地位の両尺度を使用した。

上の3尺度を含む質問紙は、国立T大学人間科学系学部（定員 120名）の1年次生を対象として、授業の一環として1986年4月に実施された。有効回答者数は94名（男子45名、女子49名）であった。

3節 結果と考察

1 同一性次元の高中低3群における各社会態度の水準

従来と同様の基準（0点以下、1～13点、14点以上）で区分した同一性次元得点高中低3群における各社会態度の平均値等は表 9-2 ならびに図 9-1 に示したとおりであった。

“無気力的・虚無的”態度については同一性次元得点と負に対応することがア・プリオリに予想されたため分散分析において片側検定を用い、他の態度については両側検定を行った。

“伝統指向的”から“感覚的・娯楽指向的”までの各社会態度については3群間で顕著な差は認められなかったが、“無気力的・虚無的”態度については有意な差が認められ、同一性次元低得点群が最も高い、また同一性次元高得点群が最も低い水準を示している。

表 9-2 同一性次元得点の高中低3群における各社会態度得点の平均値と（標準偏差）

	伝統 指向的	革新 指向的	合理的・ 個人主義的	感覚的・ 娯楽指向的	無気力的 ・虚無的
高得点群[22名]	19.3(3.0)	22.5(3.2)	23.5(3.2)	17.0(3.7)	10.7(1.7)
中得点群[56名]	18.4(3.6)	21.7(2.8)	24.2(2.8)	17.7(3.8)	13.3(3.4)
低得点群[16名]	18.9(3.3)	22.2(2.8)	24.4(3.8)	17.9(3.8)	14.7(2.6)
全 体 [94名]	18.7(3.4)	22.0(2.9)	24.1(3.1)	17.6(3.8)	13.0(3.2)
分散分析の結果	n. s.	n. s.	n. s.	n. s.	p < .01 (片側検定)

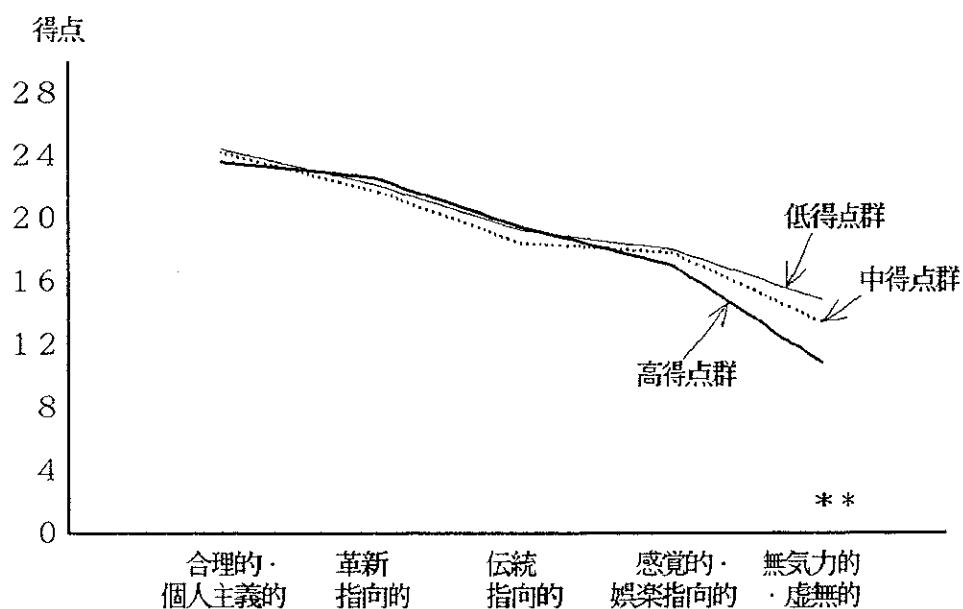


図 9-1 同一性次元得点の高中低3群の各社会態度得点の水準

この結果は、同一性混乱体験の優位は“より広い現実社会”に対する青年の態度をより“無気力的で虚無的”ななげやりのものとし、また同一性混乱体験にまさる同一性体験の蓄積は、青年の自己確認を促進するのみならず、“社会”に対するその態度をより積極的で責任あるものとすることを示唆するものである。

2 諸同一性地位群における各社会態度の水準

諸同一性地位群における各社会態度の平均値等は、表 9-3 ならびに図 9-2 に示したとおりであった。

“伝統指向的”態度については権威受容地位群が、また“無気力的・虚無的”態度については同一性拡散地位群が高い水準を示すことがア・プリアリに予想されたため、両社会態度については片側検定、他の社会態度については両側検定を用いて比較を行ったところ、“伝統指向的”、“感覚的・娯楽指向的”、“無気力的・虚無的”の3社会態度について有意な差が認められた。

図 9-2 に示されているように、同一性達成、A-F中間、積極的モラトリウム、D-M中間の各地位群は類似したプロフィールを示しているが、①積極的モラトリウム地位群は“伝統指向的”態度の水準が最も低い、②同一性達成地位群はA-F中間地位群と並んで“無気力的・虚無的”態度の水準が最も低い、③D-M中間地位群は“無気力的・虚無的”態度と“感覚的・娯楽指向的”態度の水準が、これらの4地位群中では最も高い、等の特徴がみてとれる。

同一性拡散地位群と権威受容地位群については、その人数が少ないため結果の一般化には慎重であるべきだが、ともにかなり特徴的なプロフィールを示しており興味深い。

表 9-3 同一性地位各群における各社会態度得点の平均値と（標準偏差）

	伝統 指向的	革新 指向的	合理的・ 個人主義的	感覚的・ 娯楽指向的	無気力的 ・虚無的
達成 群 [10名]	17.8(3.1)	22.3(2.2)	24.3(4.8)	15.6(3.9)	11.7(4.0)
A-F 中間群[13名]	19.5(2.8)	22.2(3.4)	23.8(2.5)	17.5(2.8)	11.5(2.8)
権威受容群[3名]	21.7(2.3)	21.7(4.5)	23.7(1.2)	24.7(1.5)	14.7(1.5)
積・モ群 [17名]	16.9(2.8)	22.2(2.4)	24.9(2.4)	16.5(4.0)	12.4(2.7)
D-M 中間群[49名]	18.9(3.5)	21.7(3.1)	23.8(3.2)	17.9(3.4)	13.4(3.1)
拡散 群 [2名]	24.5(0.7)	23.5(2.1)	23.5(2.1)	19.0(7.1)	19.0(1.4)
全 体 [94名]	18.7(3.4)	22.0(2.9)	24.1(3.1)	17.6(3.8)	13.0(3.2)
分散分析の結果	p < .01 (片側検定)	n. s.	n. s.	p < .01 (両側検定)	p < .01 (片側検定)

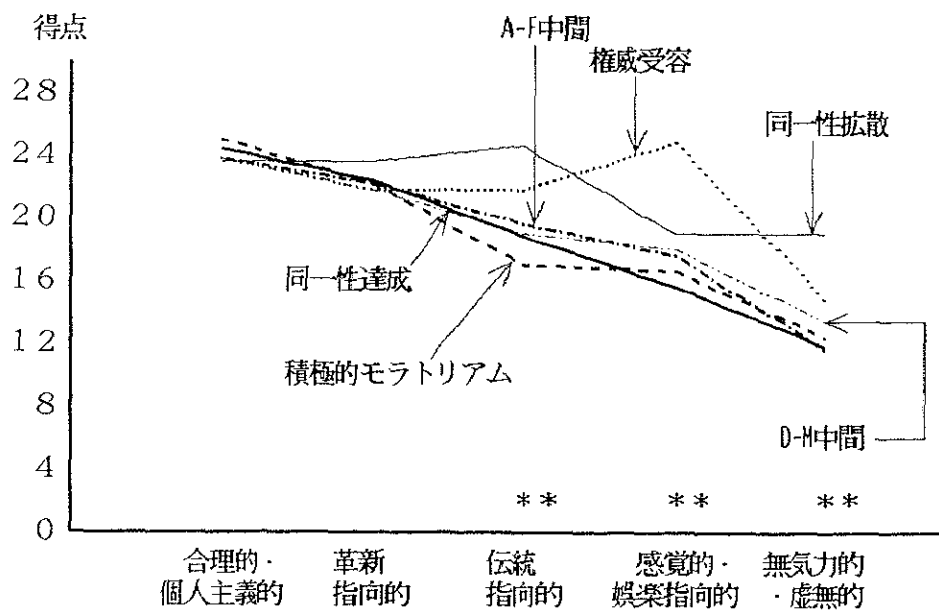


図 9-2 諸同一性地位群における各社会態度得点の水準

同一性拡散地位群は、予想どおり“無気力的・虚無的”態度について最も高い水準を示すとともに、“革新指向的”と“伝統指向的”の相反する社会態度についてともに6地位群中最高水準を示している。後者の結果は、内面的な矛盾・葛藤によって無気力状態に陥るという同一性拡散の1つのタイプの存在を示唆するものかもしれない。

権威受容地位群も、予想どおりかなり高い水準の“伝統指向的”態度を示しているが、同時により顕著な特徴としてその“感覚的・娯楽指向的”態度の水準の高さがみいだされた。これは権威受容地位の現実肯定的・無批判的な特性が、現代青年において享樂的態度ならびに行動傾向に結果したものと考えられよう。また無藤(1979)の“本研究では大部分の早期完了にはそのような危うさ・硬さはなく、今後も要領よく生きていくだろうと予想された”との印象(p. 182)とも共通点を持つように思われる。

同一性拡散地位と権威受容地位は、ともに全体に占める比率が最も少ない同一性地位であり、今回の研究においてもそれぞれ2名および3名が認められたに過ぎない。したがって、その結果の解釈と一般化については慎重を期する必要があるが、上の結果はいずれも予想される方向と一致するものであり、社会態度に関する各同一性地位の特徴が適切に反映されているように思われる。

4節 まとめ

本研究でとりあげた社会態度の5下位尺度のうち、“無気力的・虚無的”態度は青年および社会人にとって望ましくない社会態度であるといえよう。したがって、①同一性次元の高得点群が同態度について最も低く、低得点群が同態度について最も高いという結果、ならびに②同一性達成地位と A-F中間地位とが同態度について最も低く、同一性拡散地位が同態度について最も高いという結果は、“同一性次元”ならびに“同一性地位”の両アプローチによって概念化され測定された両“同一性概念”の、青年期後期における発達と適応における妥当性と有用性を支持するものである。

また、“同一性地位”各群の社会態度プロフィールは、“同一性次元得点”各群のそれと比較してより特徴豊かなものであった。この結果は、より詳細で分析的な同一性の様相の把握・検討を可能にするという同一性地位アプローチの利点を支持するものである。

10章

帰国高校生における同一性の特徴 [研究7]

1節 問題と目的

同一性の発達において、いわゆる“帰国子女”は、これまでの各章で検討を行ってきた一般の日本人青年とは異なった様相を呈することが考えられる。なぜなら、帰国子女においては、その海外における滞在・在学経験を通して、日本社会に一般的なものとは異なった同一化（identifications）がなされていることが予想されるとともに、世界的にもまれな同一人種・均質文化からなる日本社会に成長する一般の青年とは異なり、帰国子女の多くは滞在した地域における人種・文化・社会規範等の多様性と独自性の体験から、異文化の中で生きる個人としての葛藤に直面せざるをえず、またそれらの葛藤をなんらかのかたちで解決して来ていることが期待されるからである。

そこで本研究では、いくつかのカテゴリーに分類した“帰国高校生”と“国内生”（海外在学経験を持たない高校生）との比較を通して、異文化体験が同一性および探索・危機と自己投入の様相におよぼす影響を検討するとともに、帰国高校生と国内生との対照を通して、日本人および日本社会の特徴の一側面を明らかにすることを試みることにした。

日本の経済的発展に伴って海外に駐在・勤務する日本人の数は増加し続けており、その子女の海外での教育、ならびに帰国後の学校教育および社会への再適応の問題は、近年社会的な関心事となりつつある。したがって、帰国高校生の特徴とその現状の把握は、単に青年心理学上の関心に留まらず、社会的にも意義ある試みであるといえよう。

2節 方法

測度ならびに調査の対象と時期

同一性の測度としては、研究1で作成した同一性次元ならびに同一性地位の両尺度を使用した。

諸領域における“探索・危機”および“自己投入”の水準の指標としては、研究2等でも用いた加藤（1983）の“領域別探索・危機-自己投入質問紙”を使用し、“現在”および“中学生のころ”の2つの時点について、0～3点の4件法で回答を求めた。

質問紙には、小学校入学以降の海外現地校ならびに海外日本人学校の各々への在学期間の長さに関する設問を追加するとともに、「自由に文を書いて『自分』を表現してください」という教示文を付した自由記述欄を設けた。

調査は、茨城県の私立茗溪学園の高等部1～2年次生を対象として、1982年9月に実施された。茗溪学園は東京教育大学・筑波大学の同窓会である茗溪会を基盤として設立された学校で、帰国子女に十分配慮した教育を行っている。具体的には、帰国子女を積極的に受け入れるとともに、日本語の補習および主要外国語の保持指導を行いつつ、各クラスに1～2割の帰国生徒を編入する統合学級を運営している。

3節 結果と考察

1 調査対象者の海外在学校の種類および在学期間

調査対象者の在学校の種類および在学期間に関する内訳は表 10 - 1 に示したとおりであった。

表 10 - 1 調査対象者の海外在学校の種類と在学期間

		現地校 (年)								
		0	1	2	3	4	5	6	計	
日本人学校 (年)	0	94*	6	2	1	2	0	1	106	
	1	2	0	0	0	0	0	0	2	
	2	3	0	2	0	0	0	0	5	
	3	13	2	0	1	1	1	0	18	
	4	2	0	0	0	1	0	0	3	
	5	0	1	0	0	0	0	0	1	
	6	0	0	1	0	0	0	0	1	
(年)	7	1	0	0	0	0	0	0	1	
計		115	9	5	2	4	1	1	137	

※ 国内生（海外在学経験を持たない生徒）

調査対象者 137名（男子85名、女子52名）中、海外在学経験を持たない者（国内生）は94名で、他の43名（男子26名、女子17名）は1年以上の海外在学経験（小学校入学以降）を持っていた。その内訳は、日本人学校のみが21名、現地校のみが12名、日本人学校と現地校の両方に在学していた者が10名であった。

2 海外在学経験と高校生における同一性次元得点

先に述べたとおり、日本国内のみで成長する場合とは異なり、青少年期の海外滞在・在学には自他の人種・文化・社会規範等の相違に根差す様々な葛藤に直面せざるを得ない体験、いわゆるカルチャーショックの体験が多くの場合伴うことが考えられる。

このような葛藤体験は、その強度が適度であるならば、自他の相違と自己の独自性・固有性とをより尖鋭に意識させることによって、積極的自覚的な自己探究と現実検証とをうながし、より強靱で分化した同一性をもたらす効果が期待できる。その反面、葛藤の強度が過度である場合や、自我の弱い者等においては、その同一性の混乱および拡散、あるいは葛藤状況からの逃避行動（接触・交流の回避、日本的慣習・文化等の盲目的肯定・受容等）を引き起こすことも考えられる。したがって海外滞在・在学経験は、その内容と特徴によって、同一性体験に対して促進的にも抑制的・阻害的にも影響しうることが予想される。

個々人の“海外滞在・在学経験の内容”は多様であり、それぞれに固有の体験であることはいうまでもない。しかしながら、全体的な傾向について一般性ある特徴を実証的に抽出するためには、検討を行う変数を限定するとともに、それらの分布をより小数のカテゴリーに集約して各

群に一定数以上の人数を確保することが必要である。そこで本研究では、葛藤の強度等を規定する“海外滞在・在学経験”の要因として、①在学
校の種類（現地校／日本人学校）、および②その各々への在学期間（無
し、“短期”＝1年、“中長期”＝2年以上）の2要因（3水準）を取
り上げることとした。

各群の人数および同一性次元得点の平均値を3×3のクロス表のかた
ちで示したのが表 10 - 2 である。

94名の国内生群における同一性次元得点の平均値が 5.0 (SD=11.6)で
あるのに対して、現地校のみに2年以上在学した群（6名）の平均値は
13.5 (SD=11.6)、日本人学校のみに2年以上在学した群（19名）の平均
値は 9.4 (SD=11.9)で、より高い同一性次元得点を示している。

他方、海外在学経験が1年間のみの群、および現地校と日本人学校の両
者に在学した群の同一性次元得点平均値は 6.7～ - 4.5で、国内生の値
とほぼ同じかそれを下回るものであった。

この結果は、①2年以上の比較的長期の一貫した海外在学経験は、そ
の校種を問わず同一性の統合を促進する効果をもつ、②1年程度の短期
の海外在学経験、および現地校と日本人学校の両者への在学は、同一性
の統合にとって中立的あるいは若干阻害的な効果を持ちうる、の2点を
示唆するものといえよう。

3 海外在学経験と高校生における同一性地位

上の仮説および同一性次元得点の水準に関する知見を同一性地位に当
てはめると、比較的長期の海外在学経験を持つ帰国生群においては、国
内生群と比較して、0-II中間および権威受容の両地位の割合は減少し、

表 10 - 2 海外在学校の種類および在学期間と同一性次元得点

		現地校への在学期間			
同一性次元 得点平均値 (人数)		無し	1年	2年以上	計
日 本 人 学 校	無 し	5.0 (94)*	5.8 (6)	13.5 (6)	5.5 (106)
	1 年	-4.5 (2)	— (0)	— (0)	-4.5 (2)
	2年 以上	9.4 (19)	6.7 (3)	3.9 (7)	7.8 (29)
	計	5.5 (115)	6.1 (9)	8.3 (13)	5.8 (137)

※ 国内生（海外在学経験を持たない生徒）

より自覚的な積極的モラトリウム、同一性達成および A-F 中間の各地位が増加していることが予想される。また葛藤の程度が強い場合には、その抑制・阻害効果のために、同一性拡散地位の占める割合がより大きくなることが考えられ、さらに葛藤状況からの逃避等が生じた場合には、権威受容地位の割合が増加していることも考えられる。

そこで、比較的長期間にわたる異文化体験の影響をより明瞭に示していることが期待される3つの長期在学群（日本人学校のみ2年以上在学、現地校のみ2年以上在学、両学校の双方に2年以上在学）およびこれらの3群を併合した“長期海外在学生群”における各同一性地位の分布と国内生群における分布との比較を行うこととした。なお、A-F 中間地位は、中程度ではあるものの探索・危機を経験した上で自己投入に至っているため、同一性達成地位に併合して扱うこととした。

表 10 - 3 ならびに図 10 - 1 に示したように、国内生群と比較して、“長期海外在学生群”では D-H 中間地位の割合がより低く、積極的モラトリウム地位および同一性達成・A-F 中間地位の割合がより高い傾向が認められ、上の仮説を支持する結果が得られている。

権威受容地位の割合に注目すると、“国内生群”では 3.2%であるのに対し、“日本人学校長期在学群”においてのみ 10.5 %と高く、他の“現地校長期群”および“両学校長期群”ではまったく認められないという結果が得られている。日本人学校においては上に述べた葛藤状況からの逃避等が行いやすいという特徴を考え合わせると興味深い結果ではあるが、ケース数が少ないため過剰な解釈は控えることとしたい。

表 10 - 3 国内生群および帰国生各群における同一性地位の分布

% (n)	国内生群	日本人学校 長期群 A	現地校 長期群 B	両学校 長期群 C	長期海外 在学生群 (A+B+C)
同一性達成 & A-F中間	22.3(21)	26.3(5)	16.7(1)	42.8(3)	28.1(9)
権威受容	3.2(3)	10.5(2)	0.0(0)	0.0(0)	6.3(2)
積極的モラトリアム	21.3(20)	31.6(6)	50.0(3)	14.3(1)	31.3(10)
同一性拡散	5.3(5)	5.3(1)	0.0(0)	14.3(1)	6.3(2)
D-M中間	47.9(45)	26.3(5)	33.3(2)	28.6(2)	28.1(9)
計	(94)	(19)	(6)	(7)	(32)

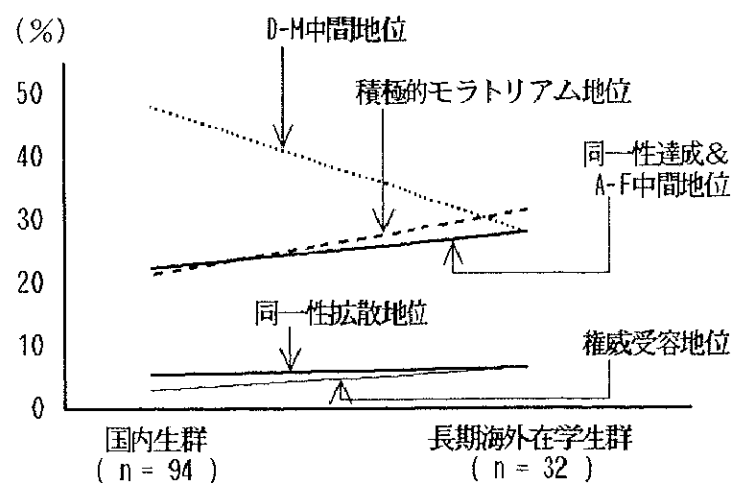


図 10 - 1 国内生群と長期海外在学生群における同一性地位の分布の比較

4 海外在学経験と探索・危機—自己投入の水準

これまでの分析によって、海外滞在経験が高校生の同一性次元ならびに同一性地位に影響を及ぼすこと、ならびにその影響は海外在学の長さ
と在学校の種類によって異なることが示唆された。これらの結果は、海外在学経験がもたらした具体的な諸領域における探索・危機および自己投入の差異を媒介として生ずる結果であると考えられる。この点を検証するためには、海外滞在経験の種類および期間によって定義された各群間で、海外在学時ならびに帰国後の探索・危機および自己投入の水準を比較検討することが必要であるが、本調査においてはその調査時期や対象者数の限界等のため十分詳細な分析は困難である。そこで、在学期間の長さを主要な変数として帰国生を2群に分類し、それらと国内生とを比較することによって、海外在学経験が探索・危機および自己投入の水準におよぼす影響について探索的な分析を試みることにした。

在学校の種類は問わず、海外在学期間が3年以上の帰国生（30名）を長期群、その他の帰国生（13名）を短期群として、長期群、短期群、国内群（94名）の3群間で、“中学時代”ならびに“現在”の諸領域における探索・危機および自己投入の水準を比較した結果は図 10- 2, 3 ならびに図 10- 4, 5 に示した通りであった。

全体として、特に際立った差異や特徴的なパターンは認めにくい
が、中学時代の“勉強”、“異性の友人”、“同性の友人”についての探索・危機、および“家族”への自己投入の水準が、長期群・短期群ともに国内群よりも高くなっている。この結果は、適応あるいは再適応においてこれらの領域が大きな重要性を持っていることの表れであろう。

中学時代の“社会的活動”および現在の“政治的活動”への自己投入

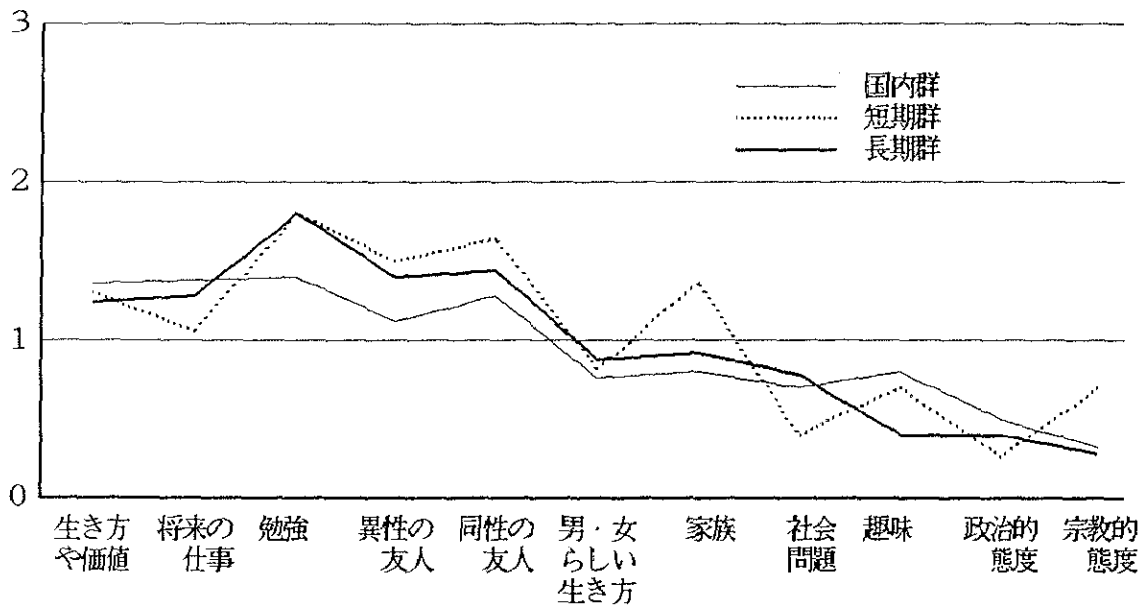


図 10 - 2 諸領域における中学時代の各群の探索・危機の水準

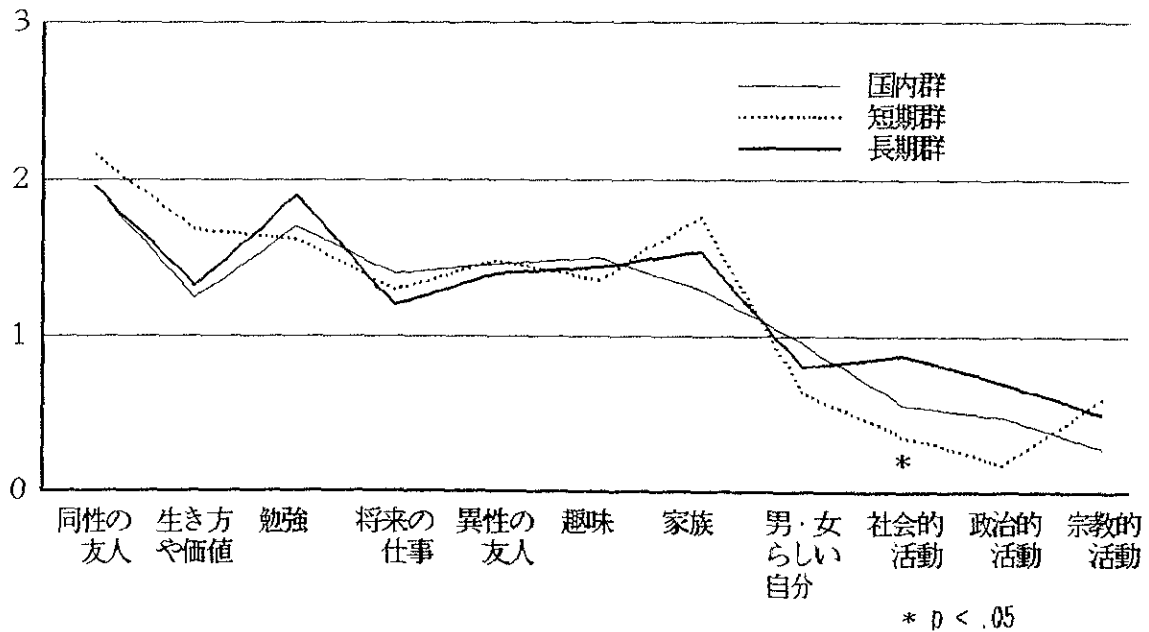


図 10 - 3 諸領域における中学時代の各群の自己投入の水準

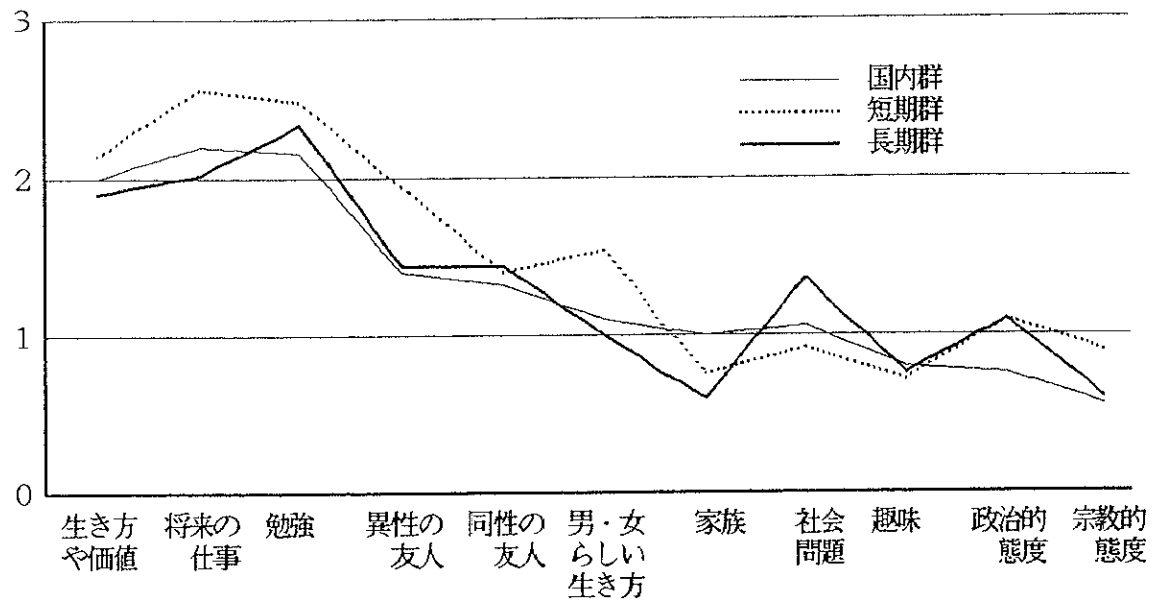


図 10 - 4 諸領域における現在の各群の探索・危機の水準

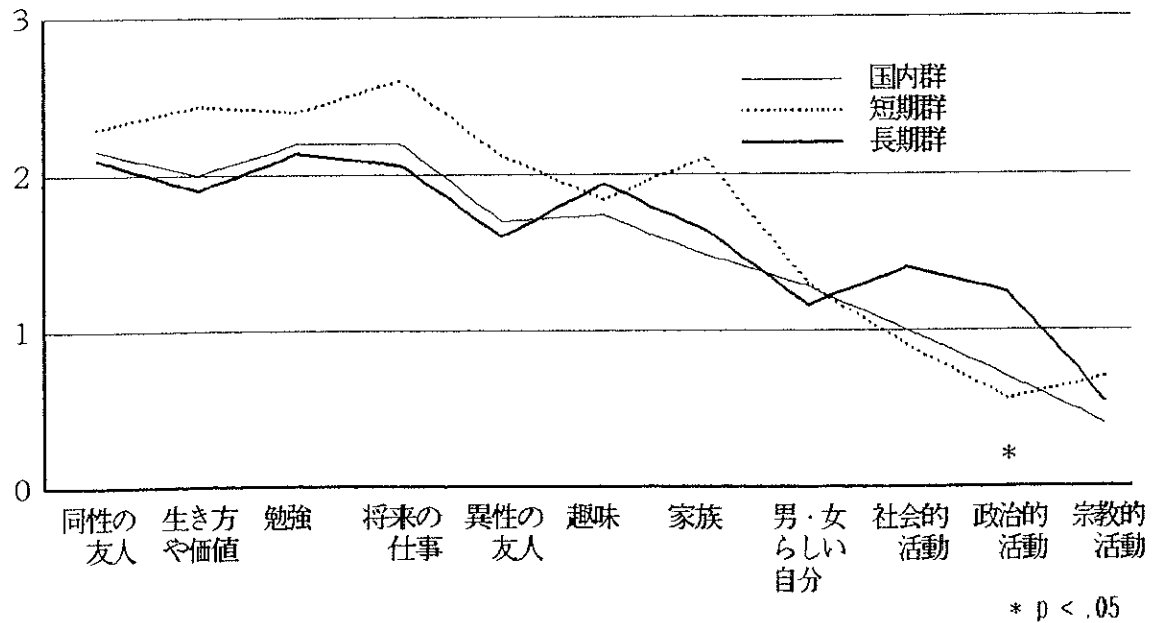


図 10 - 5 諸領域における現在の各群の自己投入の水準

の水準には、3群間で有意な差が認められた。同様の傾向は中学時代の“政治的活動”および現在の“社会的活動”への自己投入、ならびに現在の“社会問題”および“政治的態度”に関する探索・危機の水準にも認められるため、かなり一貫性のある傾向であると考えられる。活動等の具体的な内容は不明であるが、いずれも長期群が最も高い水準を示しており、3年以上の長期の海外在学経験は生徒の社会的関心と積極性を高める効果を持つことが示唆されている。

また短期群については、長期群・国内群と比較して、“将来の仕事”、“異性の友人”等の領域における自己投入と探索・危機の水準が高い、“男（女）らしい生き方”に関する探索・危機や“家族”、“生き方や価値”への自己投入の水準が高い等、そのプロフィールが“より個人的”な領域において高くなっている点がその特徴として指摘できよう。

5 同一性次元得点を基準とした具体的な諸領域の重要性の差異

帰国生においては、その異文化体験を通して、日本国内のみで成長した国内生とは異なった探索・危機および自己投入の体験がなされていることが予想されたが、国内群、短期群、長期群の3群を比較した上の分析では、明確な結果は得られなかった。

そこで本分析では、同一性次元得点を同一性体験の指標とみなし、それに対する具体的な諸領域における探索・危機ならびに自己投入の寄与の大きさを諸領域の重要性の考える観点から、帰国生と国内生の同一性体験の差異の検討を試みることにした。

同一性次元得点を基準変数とし、領域別探索・危機－自己投入質問紙によって測定された各領域における探索・危機ならびに自己投入の水準

(“現在”の値と“中学生のころ”の値の平均値)を説明変数として、偏F値 2.0以上を重回帰式への編入条件とするステップワイズの重回帰分析を行った。国内生94名(男子59名、女子35名)を対象とした結果は表 10 - 4 に、帰国生43名(男子26名、女子17名)を対象とした結果は表 10 - 5 に示したとおりであった。なおここでは男女を併合して分析を行ったが、これは①帰国生群の人数が少ないため男女別々の分析では安定した結果が得られない、②高校生においては探索・危機および自己投入の重要性に関する性差は小さいことが示されている(加藤、1983)、の2点を考慮したものである。

表 10 - 4 に示されているように、国内生においては3つの探索・危機と2つの自己投入が重回帰式に編入され、これらの5変数によって同一性次元得点の全分散の 23.2 %が説明されている。各変数の寄与の方向ならびにその大きさの指標である標準化偏回帰係数(β)の値に注目すると、“男(女)らしい自分”への自己投入と“社会問題に対する態度”についての探索・危機は同一性次元得点に対して正に、他方、“男(女)らしい生き方”と“同性の友人との関係”についての探索・危機、“同性の友人との関係”への自己投入は負に寄与していることがわかる。この結果は、海外在学経験を持たない一般の高校生において同一性体験と密接に関連する領域が、①“男(女)らしい自分および生き方”、②“同性の友人との関係”、③“社会問題に対する態度”であることを示唆するものである。なお、“社会問題に対する態度”についての探索・危機はその値が 1.0 (“すこし考え/迷っている”の水準)に満たない者が国内生の 50.0 %を占めており、必ずしも標準的(normative)な探索・危機であるとは言えない。

表 10 - 4 国内生を対象としたステップワイズ重回帰分析の結果

基準変数：同一性次元得点		標準化 偏回帰係数 (β)	偏F値
編入 順位	説明変数		
1	同性の友人との関係についての探索・危機	- .19	3.0
2	社会問題に対する態度についての探索・危機	.35	13.4 **
3	男(女)らしい自分への自己投入	.45	15.1 **
4	男(女)らしい生き方についての探索・危機	- .32	7.4 **
5	同性の友人との関係への自己投入	- .17	2.6

** $p < .01$ ($R = .523$, 自由度調整済み $R^2 = .232$, $F = 6.63$, $df = 5/88$, $p < .01$)

表 10 - 5 帰国生を対象としたステップワイズ重回帰分析の結果

基準変数：同一性次元得点		標準化 偏回帰係数 (β)	偏F値
編入 順位	説明変数		
1	政治的活動への自己投入	.23	2.6
2	異性の友人との関係への自己投入	.35	5.8 *
3	勉強についての探索・危機	- .34	5.8 *

* $p < .05$ ($R = .545$, 自由度調整済み $R^2 = .243$, $F = 5.49$, $df = 3/39$, $p < .01$)

他方、表 10 - 5 に示したように、帰国生を対象とした分析の結果は国内生のそれとは明らかに異なるものであった。帰国生においては2つの自己投入と1つの探索・危機が重回帰式に編入され、これらの3変数によって同一性次元得点の全分散の 24.3 %が説明されている。国内生と同様に標準化偏回帰係数 (β) の値に注目すると、帰国生においては同一性体験にとって重要な要因は“異性の友人との関係”および“政治的活動”への自己投入であり、逆に“勉強”についての探索・危機は同一性体験を阻害する要因であることが示唆されている。なお、“政治的活動”への自己投入はその値が 1.0 (“やや重要な生きがい/すこしは努力している”の水準) に満たない者が帰国生の 51.2 %を占めており、必ずしも標準的な自己投入ではない。

国内生においてその同一性体験と密接に関連する探索・危機ならびに自己投入の内容と、帰国生におけるそれらとが顕著に異なっているというこの結果は、帰国生と国内生の同一性体験の差異を客観的に実証するものであると同時に、帰国生への対応とその指導におけるひとつの留意点を指摘する知見であるといえよう。

6 自由記述の内容について

本章の研究で使用した質問紙には、その最後の部分に「自由に文を書いて『自分』を表現してください」という教示文を付した欄が設けられていた。本節では、帰国生の手になる自由記述の中から、彼らの内面が率直に表現されており印象的であったいくつかを紹介して、本章の締め括りとしたい。

これまでの実証的な分析によって、一貫した中長期の海外在学経験を持つ生徒は、国内生と比較してより高い同一性次元得点を示す傾向が認められている。しかしながら、その同一性体験のよりどころとして、国内生らとは異なった領域における自己投入や探索・危機を重視し、また現在の日本社会、あるいは日本の学校において一般的な価値観や規範とは異なった同一化をその海外滞在・在学経験を通して身につけてきていると考えられる彼らの多くは、生徒および教師を含む日本人一般に対してかなりの不満を持っており、批判的である。

まず、現地校に長期間在学していた女子生徒の自由記述を示してみよう。彼女の同一性次元得点は16点と高く、同一性地位はD-M中間地位であった。

“私は中学の時、日本語が分からないため必死に勉強をした時の自分をみんなに理解してもらいたかったが、日本人はこう言う点に関して非常に無関心（無神経）である。（中略）

私は日本人に異性の事に関して大げさにさわぐ必要がないと言いたく、もっとあっさりとした付き合いをしたらどうだと言いたい。もっと今は大切な事を考えなくてはならないと思う（中略）日本人の男子の子+女子の子にもっと大人になれと言いたい。（現在の大人にも言いたい。）”

続いて、日本の多くの学校に認められる「画一性の尊重」および「詳細な規則」に対して批判的で、その不満を表現している男子生徒の自由記述を紹介する。彼は両学校長期群の一人で、同一性次元得点は17点と高く、同一性地位は積極的モラトリウム地位であった。

“自分はルールや規則の大嫌いな人間だ。何故日本の学校は、こんなに人間をそくばくするのだろう。”

上の2例はその代表であるが、帰国生の自由記述を概観する時、彼らは日本人一般の持つ“異性交際に対する狭量さ”と“統制的な性格の強

い教育方針”に最も抵抗を感じているように思われる。

帰国子女を対象として、その同一性の特徴を検討することを意図した本研究は、いくつかの興味深い知見をもたらした。具体的には、中長期の一貫した海外在学経験は同一性の発達において促進的な効果を持つこと、帰国生において同一性体験と密接に関連する領域が国内生におけるそれらとは異なること等が示唆された。しかしながら、本研究においてデータを収集することができた帰国生の数は必ずしも十分であるとは言えず、また帰国生に対して特別の配慮を行っている1学園のみにおける研究でもあり、その結果の一般化については慎重である必要があろう。滞在先や滞在時の年齢等の要因も考慮した、より詳細な検討を行うことが今後必要であると思われる。

11章

本研究の要約と今後の課題

1節 本研究の目的と構成

本研究の目的は、Erikson によって提唱された同一性(identity)概念に関して、青年期における心理学的な発達と適応の観点から、以下の諸点に関する概念的、文献的、および実証的検討を行うことであった。

- (1) 精神分析学者 Erikson の“同一性”概念、および関連して他の研究者が展開した諸構成概念の検討と整理
- (2) 青年期における同一性に関する研究の現状の展望と問題点の指摘
- (3) 同一性の概念化において主要なアプローチと考えられる“同一性次元”と“同一性地位”を測定する尺度の構成
- (4) 作成した尺度を用いての多数の高校生、大学生、および若い成人を対象とした調査の実施と、その結果をふまえた青年期における同一性発達の様相と特徴の実証的把握
- (5) 同一性発達において重要な時期であることが示された大学生を対象とした縦断調査の実施と、その結果に基づく同一性の発達過程の特徴ならびに関連要因の検討
- (6) 大学生における同一性の様相と主観的ならびに客観的な社会的適応状態との関連の検討
- (7) 大学生における同一性の様相と社会態度との関連の検討
- (8) 帰国高校生における同一性の特徴の検討

以下に、順を追って本研究の成果を要約して示す。

2節 Erikson の“同一性”概念および他の研究者による 諸構成概念の検討と整理について

まず1章において Erikson の心理社会的な人格発達理論の概略と特徴の展望がなされ、①生涯をコア・クライシスの連続からなるグランドプランとしてとらえていること、②拮抗する異質な体験（例えば“信頼”と

“不信”）を通して基本的強さ（例えば“希望”）を獲得していく自我の機構を仮定していること、③個人のグランドプランは重要な他者のグランドプランと噛み合いながら進行するという“相互性”を重視していること、等の特徴の指摘がなされた。

続いて、Erikson の心理社会的な人格発達理論における青年期の主題である“同一性”対“同一性混乱”のコア・クライシスは（若い成人期の“親密”対“孤立”とともに）、グランドプランにおいて“育てられる側”から“育てる側”へと進むために不可欠な転換点として重要な意味を持つことが指摘された。

2章では、Erikson の示唆的かつ包括的な同一性概念の定義の検討が行われ、“同一性”体験の要件として、『（時間的および場面的な）自己の一貫性の感覚』と『なんらかの“社会集団”との“有効なかかわり合いの存在』の2条件が指摘された。そして、Erikson の“同一性”および“同一性混乱”の両概念は、最も基本的には、青年における自己像の統合の水準、すなわち“社会的文脈において自己の一貫性と有効性とは体験される程度の高低”を意味する両極的構成概念として把握しうる、との要約がなされた。

続いて、Marcia によって提唱された同一性地位(identity status)概念の検討と整理が行われ、①“自己投入”および“探索・危機”という、より具体的かつ行動的な特徴を基準としている、②“仕事”と“思想”の2領域のみについて検討している、③誕生以来の経験の総体ではなく、“現在および近い過去”という、より狭いタイムスパンについてのみ検討している、等の単純化が行われている一方で、④“探索・危機”を経ること無く“同一性”を体験する可能性が考慮されていること、等

の特徴が指摘され、このアプローチによって定義される諸同一性地位の特徴について概念的検討がなされた。

3節 青年期における同一性に関する研究の現状の展望と 問題点の指摘について

まず、展望を行う範囲として①同一性の測定、②同一性の主要な領域、③同一性の発達過程、④同一性と社会的適応があげられた。

“同一性の測定”に関しては、“同一性次元上での拮抗体験の均衡点の測定”と“質的に異なる同一性地位の判定”の2アプローチの存在が指摘され、その各々における測定方法の開発の試みが展望された。

前者すなわち同一性次元アプローチについては、内外の主要な尺度化の試みを展望した後、①同一性概念の理論的分析検討をふまえた包括性と網羅性②肯定的－否定的のバランスのとれた項目構成、③十分簡明な表現による記述、④一定水準の信頼性と妥当性の検証、等の要件を満たす尺度が国内においては見当たらず、したがって上記の基準を満たす同一性次元尺度の構成が必要であることが示された。

後者すなわち同一性地位アプローチについては、半構造化面接による同一性地位判定が標準的方法として広く用いられている現状と同時に、“面接”という測定方法に内在する問題点と概念定義上の問題点が指摘され、一層の精緻化と客観化、簡便化等の必要性が示された。そして、○ラポールの欠如等の要因による偏りがより小さく、○“探索・危機”ならびに“自己投入”について3分割以上のより詳細な評定が可能であり、○多数者を対象とした判定がより容易に実施できる、等の条件を満たす同一性地位の新たな測定法の開発の必要性が指摘された。

また、両アプローチの関連性ならびに各々に固有の特徴を検証する研究が必要であるとの指摘もなされた。

“同一性の主要な領域”に関しては、研究者の関心の所在や研究対象の特徴に応じて、領域の追加と削除が恣意的になされている国内外の現状が展望され、全体的同一性地位を各領域ごとの同一性地位とは別個に把握し、前者との関連の強さを基準として様々な領域の重要性を評価するといった実証的で包括的な研究の必要性が示された。

“同一性の発達過程”に関しては、従来の研究の問題点と適切な縦断的研究の欠如が指摘され、青年期から若い成人期への移行期と考えられる10代後半から20代前半にかけての数年間にわたる期間について、比較的多数の男女を対象として、その同一性の状態とそれに関連すると考えられる諸要因とを、一定のインターバルごとに反復測定する、といったより包括的で詳細な縦断研究が、実施における多大の困難にもかかわらず必要とされているとの指摘がなされた。

“同一性と社会的適応”については、同一性の発達における社会的相互作用の重要性を論じた後、研究の展望と問題点の指摘がなされた。そして、従来の研究をふまえて、同一性次元ならびに同一性地位の両面から把握した同一性の様相と社会的適応状態との対応関係を、多数の男女青年を対象として検討することの意義と必要性が指摘された。

また青年期後期の社会的適応における社会観・社会態度等の重要性が指摘され、“具体的な対人関係”とあわせて、同一性の様相と社会態度との関連を検討することの意義と必要性が指摘された。

4節 同一性次元尺度の構成について

Bourne(1978)による同一性概念の理論的分析検討を基礎的枠組みとして用い、a.発生的、b.適応的、c.構造的、d.力動的、e.主観的、f.心理社会的相互性、g.実存的の7つの特質を網羅する項目からなる予備尺度が作成された。

回答法は“まったくそのとおりだ”から“全然そうではない”の6件法とし、合計得点がゼロを中心として+-両方向に分布するよう、各選択肢は両極的に得点化された。

全18項目からなる予備尺度を、国立T大学の学生 109名（男子69名、女子40名）に実施したデータに基づいてI-T（項目-合計）相関分析による項目分析を行い、基準を満たした14項目を同一性次元尺度の項目として採択した。

アパシー状態を訴えて来談していたクライアント（大学生）に本尺度を実施した結果を一般学生の結果と比較することによって、本尺度の基準関連妥当性の検討を試みたところ、アパシー状態と同一性次元本尺度の得点との間には明瞭な対応が認められた。

国立大学の学生 296名（男子 161名、女子 135名）のデータを用いて、本尺度の因子構造と信頼性係数の検討を行ったところ、単一因子構造が示されるとともに、十分に高い信頼性係数 α （.895）が得られた。

また大学生 296名のデータから、大学1～3年生における同一性は、平均的には“どちらかといえば成立”と“どちらともいえない”の境界付近にあり、またその分布には大きな個人差が存在することが示された。

5節 同一性地位尺度の構成について

従来の測定方法の問題点をふまえて①一般的な“現在の自己投入”、②一般的な“過去の探索・危機”、③一般的な“将来の自己投入の希求”の3要因の水準から、同一性達成、権威受容、A-F中間、同一性拡散、積極的モラトリウム、D-M中間の計6つの同一性地位を定義する尺度を構成することとした。

各4項目、計12項目からなる予備尺度を作成し、同一性次元尺度と同じ6件法の回答法で国立大学の学生310名（男子170名、女子140名）に実施したデータを用いて項目分析を行ったところ、各下位尺度を構成する項目の内的一貫性と各下位尺度の独立性が支持されたため、項目の修正・削除等は行わず、全12項目からなるこの尺度を同一性地位尺度として用いることとした。

同一性次元尺度の場合と同様、アパシー状態を訴えて来談していたクライアント（大学生）に本尺度を実施して同一性拡散地位の比率を一般学生と比較したところ、アパシー状態と同一性拡散地位との間には明瞭な対応関係が認められた。

国立大学生310名における各同一性地位の比率は、同一性達成地位が11.6%、権威受容地位が3.9%、積極的モラトリウム地位が15.2%、同一性拡散地位が3.9%で、本研究で新たに定義された2中間地位はA-F中間地位が12.3%、D-M中間地位が53.1%であった。また、同一性地位の分布には有意な性差は認められなかった。

この結果から、同一性達成地位とA-F中間地位を併合した“同一性達成的”な者が約24%、将来の自己投入を求め努力している者が約15%、そして小此木流の“消極的モラトリウム”にあたるD-M中間的な者

が約半数で、権威受容や同一性拡散的な者はともに 4%程度と少ない、という大学生における同一性地位の現状が示唆された。

6節 同一性次元と同一性地位との関連の検討について

高校2年生、大学1～4年生、および大学卒業後1年目と6年目の計607名からなる集団、およびその内の大学生のみ 352名について、各同一性地位群間で同一性次元得点の平均値の水準の比較を行ったところ、高校生～20代後半の全体と、大学生のみのいずれの場合においても、同一性地位の主効果は有意 ($p < .01$) であり、本研究で作成した同一性地位尺度の併存的妥当性が支持されるとともに、より一般的に、同一性次元アプローチを基準とした同一性地位アプローチの併存的妥当性を支持する結果が得られた。

多重比較の結果、同一性拡散地位の同一性次元得点は他のどの地位と比較しても有意に低かったものの、同一性達成、A-F中間、権威受容の3地位間、および積極的モラトリアムと D-H中間の2地位間の同一性次元得点には有意な差は認められなかった。この結果は、“過去の探索・危機”の程度や“将来の自己投入の希求”の水準等について異なるこれらの同一性地位が、同一性次元得点によっては弁別しえないことを示すものであり、“より詳細な質的分析の可能性”という同一性地位概念の独自の意義が示された。

7節 高校生、大学生、および若い成人における同一性の様相とその差異に関連する要因の横断的検討について

同一性次元尺度ならびに同一性地位尺度と具体的な11の領域における

探索・危機および自己投入の水準を測定する質問紙（加藤、1983）を、高校生（160名）については関東地方の私立普通高校と公立普通高校各1校で、大学生（352名）については関東地方の国立大学2校で、無記名で実施し、また大学卒業生（95名）については国立T大学の人間科学系学部を卒業後1年目と6年目にあたる者のうち住所が把握できた者を対象として、郵送法によって無記名で実施したデータの分析から得られた主要な知見は以下のとおりであった。

○ 同一性次元得点について

- ①同一性次元得点は、10代後半から20代前半にかけて、男女ともにほぼ一貫して上昇する。
- ②上の傾向は、男子では20代を通じて持続するが、女子では20代前半でプラトーに達する。

○ 同一性地位について

- ①高校生（少なくとも“普通高校”の生徒）においては、D-M中間地位が全体の6割近くを占め、自己の同一性に関する自覚は、一般的には低い水準に留まっている。
- ②大学生生活の後半から卒業後1年目にかけて、同一性達成およびA-F中間地位の比率が4～5割にまで上昇し、約半数の青年はある程度以上の探索・危機を経て、その自己投入の対象を見出していく。
- ③20代後半になると、同一性達成およびA-F中間地位の比率が減少する一方でD-M中間地位の比率は再び増加する。

諸領域における探索・危機および自己投入の平均的水準とその性差の解明を目的として、同一性の問題に関して最も自覚的であることが期待される大学1～4年次と大学卒業後1年目の者を併合した群（男子197名、女子189名、計386名）における探索・危機ならびに自己投入の平均値を男女各々について求めたところ、平均的水準からみる限り、本邦の大学生においては“将来の仕事”と“生き方や価値”、続いて“友人関係”、“勉強”等の領域が重要であり、“政治”および“宗教”の重

要性は低いことが示された。

続いて、同一性次元得点の水準との対応を基準として諸領域における探索・危機ならびに自己投入の重要性を検討したところ、男子では“家族との関係”と“将来の仕事”への自己投入、および“政治的態度”に関する探索・危機に有意な差が認められ、また女子では“宗教的活動”、“家族との関係”、“勉強”、“将来の仕事”への自己投入、ならびに“女らしい生き方”、“宗教に対する態度”、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機に有意な差が認められた。

具体的な諸領域の重要性を、全体的な同一性次元得点を基準として分析検討することによって、性差の存在が示される等、興味深い知見がもたらされた。

さらに、各同一性地位群間の差異に基づいて、諸領域における探索・危機ならびに自己投入の重要性を検討したところ、男子では、“めざすべき生き方や価値”に関する探索・危機と“将来の仕事”および“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入に有意な差が認められ、“将来の仕事”に関する探索・危機および“勉強”への自己投入にも有意に近い差が認められた。女子では“将来の仕事”、“望ましい生き方や価値の追求”、“勉強”、“同性の友人との関係”への自己投入と“めざすべき生き方や価値”、“将来の仕事”、“政治に対する態度”、“社会問題に対する態度”に関する探索・危機に有意な差が認められた。

同一性次元を基準とした結果と比較すると、男女両方における“将来の仕事”および女子における“勉強”への自己投入等、共通する領域も認められるものの、全体的には同一性地位を基準とした結果は同一性次元を基準とした結果とはかなり異なっており、同一性次元概念と同一性

地位概念が内容的に異質なものであることが示唆された。

各同一性地位ごとの諸領域における探索・危機と自己投入のプロファイルについても詳細な検討が行われ、男女別の各同一性地位の特徴が指摘された。

8節 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的検討について
国立T大学の人間科学系学部 to 所属する学生を対象として、昭和59年度に国立T大学の人間科学系学部 to 入学した者全員 125名を第1コホート、同年度の同学部3年次在学者中、心理学専攻者全員63名を第2コホートとして、授業中に、あるいは郵送法によって、調査を実施した準縦断的データの分析から得られた同一性次元の発達に関する主要な知見は以下の通りであった。

- ①同一性次元得点の全体平均値は、1年次にはほぼ一定、その後2年次の後期にかけて男女ともに緩やかに上昇し、3年次から4年次前期にかけてやや顕著な上昇を示した後、卒業間際に若干低下する。
この結果は、多くの大学生にとって3年次から4年次にかけての時期が同一性体験の蓄積に関して重要な時期であることを示すものである。
- ②同一性次元得点の分布の検討から、4年次後期における得点分布の双峰化が示された。この結果は卒業に臨んでの青年たちの同一性体験の様相が、多数の“同一性体験者”と少数の“同一性混乱者”とに分化することを示唆している。
- ③同一性次元得点の発達の安定性を検討したところ、各調査時点間の得点の相関係数は .6 ～ .7 程度であり、大学生の同一性次元得点は全体的にはかなり安定しているが、ある程度の変動がどの学年においても生じていることが示された。
また男子と比較して女子の同一性次元得点の安定性がより低い傾向が示された。
- ④同一性次元得点の変動と諸領域における探索・危機および自己投入の水準の変化との対応を男女各々について検討したところ、男子では“めざすべき生き方や価値”、“異性の友人との関係”、“同性の友人との関係”、“勉強”に関する探索・危機に有意な差が認められ、“将来の仕事”に関する探索・危機にも有意に近い差が認められた。

また女子では“勉強”、“将来の仕事”、“同性の友人との関係”、“自分にふさわしい趣味”に関する探索・危機に有意な差が認められた。

これらの領域における探索・危機の水準の変動と同一性次元得点の変化とは一貫して負に対応しており、上記の諸領域における探索・危機の高まりが同一性次元得点の低下と、また探索・危機の低下・解消が同一性次元得点の上昇と関連していることが示された。

1 インターバルの前後という比較的短期間における同一性次元得点の変化と、具体的な諸領域における探索・危機の水準の変化との負の対応を実証的に明らかにした点は本研究の成果といえるが、“自己投入”の水準との間に明瞭な対応関係をみいだすことができなかった点については、今後さらに検討を続ける必要があると思われる。

9節 大学生における同一性地位の発達に関する縦断的検討について
上の縦断的研究と同一の対象者について、その同一性地位の発達過程に関する分析検討から得られた主要な知見は、以下の通りであった。

- ①大学1年次には、未分化な D-M中間地位が6割近くを占め、同一性拡散地位も比較的多いが、その一方で将来の自己投入を探し求める積極的モラトリウム地位も2割弱と比較的多く認められる。
- ②2年次から4年次前期にかけて、探索・危機を経て自己投入の対象をみいだした同一性達成地位（A-F中間地位を含む）の占める比率は2割程度から4割程度にまで増加し、対照的に D-M中間地位の比率は6割近くから4割弱にまで減少する。
- ③発達の安定性は D-M中間地位が7割以上で最も高く、A-F中間地位を含む同一性達成地位が5割以上でそれに続く。他方、積極的モラトリウム地位と同一性拡散地位の安定性は3割以下と最も低い。
- ④積極的モラトリウム地位からの移行先をみると、A-F中間地位を含む同一性達成地位への移行は約2割とむしろ少なく、D-M中間地位へと“退行的”に移行する者が4割以上でその2倍も認められる。
- ⑤大学生における同一性拡散地位は、多くの場合一過性のものであることが示唆された。
- ⑥各調査時点間ごとに同一性地位の変遷のパターンの集計を行ったところ、各学年に特徴的な変遷のパターンの存在が示唆された。

- ⑦ D-M中間地位から各同一性地位への移行にともなう諸領域における危機および自己投入の水準の変化を男女各々について検討したところ、以下の諸特徴が示された。
- 同一性達成地位への移行には、男子では“将来の仕事”に関する探索・危機の顕著な低下がともなうのに対し、女子ではこれといった特徴は認められない。
- 同一性拡散地位への移行には、男子では“将来の仕事”および“めざすべき生き方や価値”の領域における探索・危機の高まりと“宗教的活動”への自己投入の高まりがともなうのに対し、女子では“生き方や価値”に関する探索・危機と自己投入の両者の低下がともなっている。
- 女子では、権威受容地位への移行にともなって、“生き方や価値”に関する探索・危機と自己投入の水準に同一性拡散地位への移行の場合以上の低下が認められる。
- 全体的な分散分析の結果から、男子では“将来の仕事”に関する探索・危機ならびに“宗教的活動”への自己投入、女子では“自分がめざすべき生き方や価値”に関する探索・危機ならびに“望ましい生き方や価値の追求”への自己投入等が、同一性地位の移行と密接に関連する重要な要因であることが示された。

10節 大学生における同一性の様相と諸性格特性

ならびに社会的適応との関連について

国立T大学人間科学系学部（定員 120名）に1986年度に入学した1年次生を調査対象として、YG性格検査を指標とした主観的な適応状態の水準と同一性の様相との関連の検討を行った。また、同学部4年次生を対象として、デス・フー・テストを指標とした客観的な適応状態の水準と同一性の様相との関連の検討を行った。

同一性の様相とYG性格検査との関連について、大学1年次生94名（男子45名、女子49名）のデータの分析から明らかとなった主な知見は以下のとおりであった。

①同一性次元得点について

- 同一性次元得点は一般的活動性、社会的外向性、支配性等の性格特性とは有意な正の相関、抑鬱性、劣等感、協調性の無さ、神経質、回帰性傾向等の性格特性とは有意な負の相関を示し、相関のパターンは男女間でほとんど共通であった。

- 同一性次元高得点群は、協調的で、劣等感は低く、支配的、社会的に外向的、活動的等の特徴としており、かなり顕著な右下がり（D：安定積極）型のプロフィールを呈した。
- 同一性次元低得点群は、抑鬱性と劣等感が強く神経質で思考的に内向的である等の特徴を含む平均（A：平凡）型のプロフィールを呈した。

②同一性地位について

- 同一性達成地位と比較して、同一性拡散地位はより劣等感が強く社会的に内向的であることが示された。
- 同一性達成地位と比較して、権威受容地位は思考的により外向的であると同時に、より服従的でのんき、主観的であり、気分の変化はより大きくより攻撃的であることが示された。
- 同一性達成地位群と積極的モラトリアム地位群のプロフィールは極めて類似していた。

同一性次元得点の高中低各群および各同一性地位群は、それぞれ特徴的な性格特性プロフィールを示すことが実証された。特に、ともに高い自己投入の水準を示す同一性達成地位と権威受容地位との、性格特性上の差異が明らかにされた点は興味深い。

大学4年生を対象として、郵送法によって実施されたゲス・フー・テストの結果と同一性の様相との関連について、28名（男子7名、女子21名）の有効回答の分析から明らかとなった主な知見は以下のとおりであった。

- ①同一性次元得点とゲス・フー・テスト得点との間には「充実した積極的な生活」項目では有意な連関が、また「豊かな友人関係」項目でも有意に近い連関が認められ、周囲の学生も同一性次元高得点者をより高い社会的適応状態にあるとみなしていることが示された。
- ②「充実した積極的な生活」項目については、同一性達成地位にある者が拡散あるいはD-M中間地位にある者を上回る社会的適応を達成しているとみなされる傾向が示された。

大学生へのゲス・フー・テストの実施を試みた本研究は、回答に対する抵抗のためか必ずしも十分な有効回答数が得られず、結果についても

①権威受容地位の者が認められず分析の対象としえなかった、②同一性拡散ならびに積極的モラトリウム地位の者も2～3名と少数でその特徴の一般化は困難である、等の限界が指摘されうる。しかし、この試みによって、同一性次元ならびに同一性地位と、客観的に測定された社会的適応の水準との正の対応関係が部分的ではあるが実証されたことは、本研究の成果である。

1.1 節 大学生における同一性の様相と社会態度について

国立T大学人間科学系学部（定員 120名）の1年次生を対象として、同一性次元尺度、同一性地位尺度ならびに5下位尺度からなる社会態度質問紙を実施して得られた94名（男子45名、女子49名）の有効回答の分析から明らかにされた主要な知見は以下のとおりであった。

- ①同一性次元得点の高中低3群間には“無気力的・虚無的”態度について有意な差が認められ、同一性次元低得点群が最も無気力的・虚無的であり、同一性次元高得点群はその対極であることが示された。
- ②各同一性地位群間には“伝統指向的”、“感覚的・娯楽指向的”、および“無気力的・虚無的”の3社会態度に有意な差が認められた。
- ③同一性達成、A-F中間、積極的モラトリウム、D-M中間の各地位群は類似したプロファイルを示しているものの、次の特徴が認められた。
 - 積極的モラトリウム地位群は“伝統指向的”態度の水準が最も低い、
 - 同一性達成地位群はA-F中間地位群とともに“無気力的・虚無的”態度の水準が最も低い、
 - D-M中間地位群は“無気力的・虚無的”態度と“感覚的・娯楽指向的”態度の水準が、これらの4地位群中では最も高い、
- ④同一性拡散地位群は、“無気力的・虚無的”態度について最も高い水準を示すとともに、“革新指向的”と“伝統指向的”の相反する社会態度についてともに6地位群中最高水準を示した。
- ⑤権威受容地位群はかなり高い水準の“伝統指向的”態度を示したが、同時により顕著な特徴としてその“感覚的・娯楽指向的”態度の高さがみいだされた。

全ての同一性地位について十分多くの有効データが得られたとはいえないものの、これらの結果はいずれも一般に予想される方向にあり、社会態度に関する各同一性地位の特徴が適確に把握されているように思われる。

また、“同一性地位”各群の社会態度プロフィールは、“同一性次元得点”各群のそれと比較してより特徴豊かなものであった。この結果は、より詳細で分析的な同一性の様相の把握・検討を可能にするという同一性地位アプローチの利点を支持するものである。

1.2節 帰国高校生における同一性の特徴について

いわゆる“帰国子女”は、その異文化体験のために一般の日本人青年とは異なった同一性の様相を呈することが予想される。そこで、各クラスに帰国生徒を編入する統合学級を運営している茨城県の私立M学園の高等部1～2年次生を対象として、同一性次元ならびに同一性地位尺度、領域別探索・危機-自己投入質問紙、および小学校入学以降の海外在学体験に関する設問を含んだ質問紙調査を実施した。

調査対象者 137名（男子85名、女子52名）中、海外在学経験を持たない者（国内生）は94名で、他の43名（男子26名、女子17名）は1年以上の海外在学経験（小学校入学以降）を持っていた。

葛藤の強度等を規定する“海外滞在・在学経験”の要因として、

○在学校の種類（現地校/日本人学校）、および

○各々への在学期間（無し、“短期”＝1年、“中長期”＝2年以上）

の2要因（3水準）を取り上げて分析したところ、同一性次元得点に関しては、

- ① “2年以上”の比較的長期の一貫した海外在学経験は、校種を問わず同一性の統合を促進する効果をもつ、
- ② “1年程度”の短期の海外在学経験、および現地校と日本人学校の両者への在学は、同一性の統合にとって中立的であるか、あるいは若干阻害的な効果を持ちうる、

の2点を示唆する結果が得られた。

また、同一性地位については、3つの長期在学群を併合した“長期海外在学生群”における同一性地位の分布を国内生群における分布と比較したところ、“長期海外在学生群”では D-M中間地位の割合がより低く、積極的モラトリウム地位および同一性達成・ A-F中間地位の割合がより高い傾向が認められた。

諸領域における探索・危機および自己投入の重要性に関する帰国高校生の特徴を検討することを目的として、同一性次元得点を基準変数とし、各領域における探索・危機ならびに自己投入の水準を説明変数とするステップワイズの重回帰分析を、国内生94名（男子59名、女子35名）ならびに帰国生43名（男子26名、女子17名）を対象として行ったところ、国内生においては①“男（女）らしい自分および生き方”、②“同性の友人との関係”、③“社会問題に対する態度”等が同一性体験と密接に関連する領域であるのに対し、帰国生においては“異性の友人との関係”および“政治的活動”への自己投入がその同一性体験にとって重要であり、逆に“勉強”についての探索・危機は同一性体験を阻害する要因であることが示唆された。

また、自由記述の内容から、彼らは日本人一般の持つ“異性交際に対する狭量さ”と“統制的な性格の強い教育方針”に最も抵抗を感じていることがうかがわれた。

1.3 節 本研究の意義と今後の課題

以上の本研究の成果の概略をふまえて、本研究の達成の固有の意義を要約し、また今後の課題を指摘して本章のしめくくりとしたい。

本研究の意義としては、第1に Erikson および Marcia によって展開された同一性次元概念および同一性地位概念の検討・整理をふまえて、比較的容易に実施可能な質問紙尺度を構成した点があげられる。

このような測度の開発なしには、高校生から20代後半の成人にわたる600人以上を対象とした横断的調査研究や60～120人を対象とし2年以上にわたって約半年ごとに反復測定を行う縦断的調査研究等は、ほとんど不可能であったと考えられる。

そして、これらの尺度を用いて、高校生から20代後半という青年期中期から成人期初期にわたる同一性発達の様相と特徴が、同一性次元と同一性地位の両面から実証的に検討され、大学在学期の重要性や20代における同一性次元と同一性地位の発達の推移の差異等が示唆された点は、本研究の第2の意義であるといえよう。

また、同一性地位尺度に関しては、従来の単純な2分割ではなく、選択肢の意味をふまえたカットオフ・ポイントを用いたより詳細な判定が試みられ、4つの典型同一性地位と2つの中間同一性地位が定義された点も独自の工夫として評価しうるものであるといえよう。しかしながら、これらの判定基準・手続きの妥当性と適切性については、今後さらに検討を続けることも必要であると考えている。

第3の意義としては、次元・地位の両尺度においては一般的・全体的な同一性の状態を把握し、それとは別に網羅的な11の具体的な領域における探索・危機と自己投入の水準を測定して、両者の関連から諸領域に

における探索・危機ならびに自己投入の重要性を明らかにしようとした点が指摘できよう。この方法によって、各領域における探索・危機ならびに自己投入の重要性を客観的・実証的に評価することが可能となり、同一性次元、同一性地位の各々について様々な知見が得られたのである。

第4の意義としては、これまでなされていなかった比較的多数の男女を対象とした反復測定をともなう縦断的研究を試みた点があげられる。欠測データ等の問題を含みながらも、この試みによって同一性次元および同一性地位の発達的変遷とその安定性、大学の各学年に特徴的な同一性地位の移行のパターン等の、横断的方法によっては得がたい知見を得ることができた。しかしながら、本研究でなしえたのはあくまで約2年間ずつの準縦断的な調査であり、今後の課題としては4年間あるいはそれ以上にわたる縦断調査の実施があげられねばならないであろう。

第5の意義としては、同一性の様相と“社会的適応”という重要な変数との関連を主観・客観の両面から実証的に検証した点があげられよう。多くの性格特性の把握が可能なYG性格検査を基準として用いることにより、例えば同一性達成地位と権威受容地位との差異等の新たな知見が得られた。またゲス・フー・テストを大学生に実施することによって、有効回答率は低かったものの、同一性次元・同一性地位の両者について、その妥当性を部分的にはあるが客観的に支持する結果を得ることができた。

さらに、帰国高校生というやや特殊な青年を対象として、その同一性の様相ならびに特徴に関する実証的な検討を試み、サンプルサイズ等の限界はあるものの、いくつかの興味深い知見を示した点も、本研究のひとつの意義として指摘することができよう。

このように、本研究はその表題である“青年期における同一性の発達と適応”の全体像の把握について、それに必要な測度の開発を行うとともに、その概要に関する一定の知見を得るという成果をおさめたといえよう。しかし、同一性の発達を促進しあるいは阻害する要因についての結果は諸領域における探索・危機ならびに自己投入というかなり抽象的な水準における検討に留まっており、より具体的・実際的な教育的介入・働きかけの考案、およびその効果の評定等については、これからの課題として取り組んでいきたいと考えている。

文献

- Adams, G.R., Shea, J., & Fitch, S.A. 1979 Toward the development of an objective assessment of ego-identity status. Journal of Youth and Adolescence, 8, 223-237.
- Block, J. 1961 Ego identity, role variability, and adjustment. Journal of Consulting Psychology, 25, 392-397.
- Bourne, E. 1978 The state of research on ego identity : a review and appraisal. part I & part II. Journal of Youth and Adolescence, 7, 223-251 & 371-392.
- Bronson, G.W. 1959 Identity diffusion in late adolescents. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 414-417.
- Coles, R. 1970 Erik H. Erikson : The growth of his work. Boston : Atlantic Little Brown.
- Dignan, M.H. 1965 Ego identity and maternal identification. Journal of Personality and Social Psychology, 1, 476-483.
- Driedger, L. 1976 Ethnic self-identity: a comparison of ingroup evaluations. Sociometry, 39, 131-141.
- 遠藤辰雄編 1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- Erikson, E.H. 1950, 1963 Childhood and society. New York : Norton.
- Erikson, E.H. 1956 The problem of ego identity. Journal of the American Psychoanalytic Association, 4, 56-121.
- Erikson, E.H. 1958 Young man Luther: a study in psychoanalysis and history. New York : Norton.
- Erikson, E.H. 1959, 1980 Identity and the life cycle. Psychological Issues, 1, 1-171.

- Erikson, E.H. 1964 Insight and responsibility. New York : Norton.
- Erikson, E.H. 1969 Gandhi's truth. New York : Norton.
- Erikson, E.H. 1976 Toys and reasons. New York : Norton.
- Erikson, E.H. 1982 Life cycle completed. New York : Norton.
- Fitch, S.A., & Adams, G.R. 1983 Ego identity and intimacy status: replication and extension, Developmental Psychology, 19, 839-845.
- 福島章 1979 対抗同一性 金剛出版
- Grotevant, H.D., Thorbecke, W., & Meyer, M.L. 1982 An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain. Journal of Youth and Adolescence, 11, 33-47.
- Gruen, W. 1960 Rejection of false information about oneself as an indication of ego identity. Journal of Consulting Psychology, 24, 231-233.
- Hauser, S.T. 1972 Black and white identity development: aspects and perspectives. Journal of Youth and Adolescence, 1, 113-130.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- 加藤厚, 加藤隆勝 1984 帰国高校生におけるIdentityの特徴 筑波大学心理学研究, 6, 57-66.
- 加藤厚 1986 同一性測定における2アプローチの比較検討 心理学研究, 56, 357-360.
- 加藤厚, 加藤隆勝 1987 現代青年の社会態度の構造 ―態度を構成する次元の検討― 筑波大学心理学研究, 9, 87-93.
- 加藤厚 (印刷中) 大学生における同一性次元の発達に関する縦断的研究 心理学研究

- 古沢頼雄 1968 青年期における自我同一性と親子関係 依田新編 現代青年の人格形成
金子書房 pp. 67-85.
- Lifton, R.J. 1967 Boundaries: psychological man in revolution. New York :
Random House.
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego identity status.
Journal of Personality and Social Psychology, 3, 551-558.
- Marcia, J.E. 1967 Ego-identity status : relationship to change in self-
esteem, "general maladjustment," and authoritarianism. Journal of Person-
ality, 35, 118-133.
- Marcia, J.E. 1976 Identity six years after: a follow-up study. Journal of
Youth and Adolescence, 5, 145-160.
- Marcia, J.E. 1980 Identity in adolescence. In Adelson, J.(Ed.) Handbook
of Adolescent Psychology. New York : Wiley.
- Marcia, J.E., & Friedman, M.L. 1970 Ego identity status in college women.
Journal of Personality, 38, 249-263.
- Masuda, M., Matsumoto, G.H., & Meredith, G.M. 1970 Ethnic identity in three
generations of Japanese Americans. Journal of Social Psychology, 81, 199-
207.
- Matteson, D.R. 1977 Exploration and commitment: sex differences and methodo-
logical problems in the use of identity status categories. Journal of Youth
and Adolescence, 6, 353-374.
- Meilman, P.W. 1979 Cross-sectional age changes in ego identity status during
adolescence. Developmental Psychology, 15, 230-231.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究
27, 28-37.

西平直喜 1970 青年の自我同一性に関する研究(そのⅠ) 日本教育心理学会第12回
総会発表論文集, 196-197.

小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社

Orlofsky, J.L., Marcia, J.E., & Lesser, I.M. 1973 Ego identity status and the
intimacy versus isolation crisis of young adulthood. Journal of Personality
and Social Psychology, 27, 211-219.

Protinsky, H.O. 1975 Eriksonian ego identity in adolescents. Adolescence, 10,
428-432.

Rasmussen, J.E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effective-
ness. Psychological Reports, 15, 815-825.

Rebaudières-Paty, M. 1987 De la question de l'identité culturelle à celle
du sujet. Enfance, 40, 11-26.

Simmons, D.D. 1970 Development of an objective measure of identity achieve-
ment status. Journal of projective techniques & personality assessment, 34,
241-244.

Stark, P.A., and Traxler, A.J. 1974 Empirical validation of Erikson's theory
of identity crises in late adolescence. Journal of Psychology, 86, 25-33.

砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究 27, 215-220.

高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接 批評的展望 教育心理学研究
32, 320-328.

鑑, 山本, 宮下編 1984 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版

Tabouret-Keller, A. 1987 Identité, processus d'idenitfication, nominations.
Enfance, 40, 5-7.

- Waterman, A.S. 1982 Identity development from adolescence to adulthood: an extension of theory and a review of research. Developmental Psychology, 18, 341-358.
- Waterman, A.S. (Ed.) 1985 Identity in adolescence : processes and contents. San Francisco : Jossey-Bass.
- Waterman, A.S., Geary, P.S., & Waterman, C.K. 1974 Longitudinal study of changes in ego identity status from the freshman to the senior year at college. Developmental Psychology, 10, 387-392.
- Waterman, A.S., & Goldman, J.A. 1976 A longitudinal study of ego identity development at a liberal arts college. Journal of Youth and Adolescence, 5, 361-369.
- Waterman , A.S., & Waterman, C.K. 1971 A longitudinal study of changes in ego identity status during the freshman year at college. Developmental Psychology, 5, 167-173.
- Zazzo, B. 1969 Le dynamisme évolutif chez l'enfant. In R. Zazzo (Ed.) Des garçon de 6 à 12 ans. Paris : P.U.F.

筑波大学附属図書館



1 00920 05351 0

本学関係
